

ジャン「人類を救うために恋のキューピッドになる」

三木えーつと

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

訓練兵時代にタイムリープしたジャンは、マール組の3人（ライナー、ベルトルト、アニ）を味方にしようと思いつく。

その方法とは、3人に恋人を作ることと籠絡しようというものだった。

カプ厨になったジャンが、恋のキューピッドになって奮闘する話です。

ふざけたギャグ設定ですが、その後は原作リスペクトで真面目に書いてます。

マール組との駆け引きやガチ恋愛やシリアスやギャグともりだくさん。

※原作の考察と合わない部分がありますが、あくまで二次創作ということでご了承ください。キャラ崩壊はしないように頑張ります。

※わりと最新までのネタバレがあります。

※pixivでも公開中

一章完結しました！（2021/4/13）

お気に入り登録、しおり、ここすき、感想、評価ありがとうございます！

目次

二十三話	170
二十二話	162
二十一話	156
二十話	148
十九話	141
十八話	132
十七話	127
十六話	122
十五話	116
十四話	107
十三話	99
十二話	89
十一話	80
十話	73
九話	66
八話	58
七話	51
六話	42
五話	33
四話	28
三話	22
二話	10
一話	1

三十八話	三十七話	三十六話	三十五話	三十四話	三十三話	三十二話	三十一話	三十話	二十九話	二十八話	二十七話	二十六話	二十五話	二十四話
272	263	257	249	242	235	228	221	212	205	199	194	188	182	175

## 愛の伝道師編

### 一話

その日、ミカサは冷静ではなかった。

大好きな家族の心が見えず、混乱と焦燥と哀憫に沈んでいた。

エレンが仲間を裏切った。

私の家族は——エレンはそんなことしない！ と、ミカサは自信を持って言えなくなっていた。

そんな自分に戸惑いと嫌悪を感じずにいられない。

エレンにマフラーを巻いてもらったあの日から、私の命はエレンのものなのに。

ずっとそう誓っていたのに。

私にはわからない。

エレンの味方をしていいのか、わからない。

ミカサが、戦場を駆ける。

無感情に敵を殺す。殺す。殺す。

今となつては巨人よりも人間を殺した数の方が多いだらう。

アルミンと違って、他人を殺すことに抵抗がなかったことを、今でも覚えていいる。

なぜか——エレンのためだ。

エレンのためなら何でもできると、誰でも殺せると思っていたからだ。

ミカサは、唇を強く噛み締める。

血の味が口内に広がった。

こんな気持ちで戦場に立つべきではなかった。

ふと気付くと複数の銃口が、彼女に向けられていた。

避けられない。

死の覚悟はとつくにしていたはずなのに、瞳を閉じれば浮かぶのは

エレンの顔——

銃声が響く。

いつまで経っても訪れない痛みにも、ミカサはまぶたをあげた。

そこには一人の青年が、銃弾を一身に受け、血だらけで立っていた。

「よそ見してんじゃねーよ……バカ」

そう言うと、青年は地面に崩れ落ちる。

血に濡れた髪が彼の顔を覆い隠した。

覚えのある頭痛が、ミカサを襲う。

「エレン……？　嘘……エレン！」

ミカサは血相を変えて青年の元へ駆け寄ろうとするが、彼女を殺そうとする敵の攻撃は止まらない。

「ああああああああ！　邪魔をするなアアアア！」

獣のような咆哮をあげ、怒りのままに敵を殲滅する。

よくも！　よくもよくもよくも！　私の家族を！

何度も何度も刃物を敵の肉体にねじ込む。

そして、最後には返り血で染まったミカサだけが戦場に立ち尽くしていた。

彼女の手からナイフが滑り落ちる。

エレン！　エレン！　エレン！

そんな……私のせいでエレンが！

ああ、神様！　どうか神様！

こんなのは嘘！　エレンが死ぬはずない！

私の家族は――

彼の身体を抱え、その頬に手を添える。

冷たい。

急速に熱が失われていく肉体。

ミカサは涙を流して、その顔を覗き込む。

そして、死にゆく青年の名を呼んだ。

「ジャン……」

\*\*\*\*\*

好きな女を守って死ぬのは、男冥利に尽きる。

そうカツコつけて銃弾を身に受けたが、彼女が他の男の名を叫びながら駆け寄ってくるのを見て、ジヤンは内心後悔した。

間違えてんじゃねーよ。

髪の色もちげーし、顔も似てねーし、声も違うだろ。

どんだけエレンのことしか考えてねえんだ、こいつは。

クソツタレ。

死ぬ時ぐらい、俺のことを見ろよ。

けれど、文句を言う資格がないことは自分でもわかっていた。

片思い歴うん年。

すっかり拗らせて、何年も仲間としてそばにいたのに一度も好きだとは伝えなかった。

こんな終わり方なら、言えばよかった。

深い後悔の念に苛まれ、ジヤンは訓練兵卒業の日——人類が超大型巨人の二度目の襲撃を受けた日のことを思い出していた。

ガスを補給できず、このまま死ぬのかと思った……あの時も「言っときゃよかった」と後悔したはずだ。

なのに、俺はまた無様に同じ思いをしている。

振り返りついでに思えば、あの頃が一番楽しかったな。

壁内も壁外も関係なく、仲間と切磋琢磨して必死こいて訓練して……そりゃー仲良しこよしとは言えねーが、少なくとも殺し合いをするほどじゃなかった。

もう彼女の声は聞こえない。

音は遠ざかり、海の中を深く深く沈んでいくような倦怠感に包まれる。

むしろ聞こえない方がよかった。

もうその口から「エレン」なんて言葉を聞きたくなかった。

ミカサの泣き顔を遮断するように、ジヤンは静かに瞳を閉じる。

もし……もしもあの頃に戻れるなら、今度はうまくやる。

誰も死なせねエ。  
俺は特別でも強くもない。  
自分に力がないことぐらいわかってる。  
無力なことぐらい何度も何度も思い知らされた。  
それでも、誰も死なせねエ。  
ミカサ……お前を泣かせたりしねエ。  
だから頼むよ、神様……。  
そして男は自分の心臓の最期の音を聞き、絶命した。

\*\*\*\*\*

「ジャン。そろそろ起きろよ」

懐かしい声がある。

もう忘れたと思ったのに、案外覚えているもんだ。  
やたらと硬いベッドとボロい毛布。

埃っぽい臭いに鼻がツンとして、目頭が熱くなる。  
目を開けなくたってわかる。

——ここは訓練兵の寮だ。

神なんていないと思っていたのに、死ぬ間際にあんな願い事をした  
からだろうか。

なかなか憎い演出してくれるじゃねーか。

どうにか熱くなる胸を抑えようと、ジャンは寝たフリを続ける。  
久しぶりの再会で、ボロボロ泣くのはさすがに格好悪い。

お前に会ったら、真っ先に俺の武勇伝を聞かせてやろうと思っ  
たんだ。

気配が近付いてくると、声の主はジャンの肩を揺り動かす。

「いい加減にしないと遅刻するぞ」

彼の手の熱が、さらにジャンの胸を熱くさせた。

「ああ、わかってる。……よお、マルコ。久しぶりだな」



目を開ければ、マルコの懐かしいそばかすが目に入った。それを見た途端、ジャンの涙腺が崩壊する。

我慢するなんて無理な話だった。

「久しぶり？ 寝ぼけてるのか？ まったくお前は——ってなんで泣いてるんだよ!?!」

「はは……そりゃ、こんなん泣くだろ。お前があんまり早く逝っちまうもんだから、俺はすげー苦労したんだぞクソが」

胸がいつぱいになって苦しい。

生きていた頃も、いつも胸は苦しくて痛かった。

けど、それとは別の痛みだ。

ジャンはマルコを思いつきり抱きしめる。

「なんだよ触れんのかよ！ すげーなオイ！ つーか俺も死んでんだから当たり前か！」

「うわああああああ！ 何すんだよ気持ち悪い！ 離れろよ！」

「うるせー！ 誰が離すか！」

「鼻水がアアアア！ 顔にすりつけんな！ 服につけんなよ！ オイ馬面聞いてんのか！」

「何やってんだよ二人とも……。この状況がわからねーのは、俺がバカだからじゃねーよな？」

男にしては甲高い、特徴的な声が出た。

ジャンにとってはマルコよりもよほど聞き慣れた声だった。

「コニーー！ いいところに来てくれた！ 助けてくれ！」

マルコの悲痛な叫び。

聞きたくなかった名前が飛び込んできて、ジャンは頭を殴られたような衝撃を受ける。

「嘘だろ……まさかお前まで死んじゃったのかよ」

声の震えが止まらない。

ジャンはふらつきながらベッドを降りた。

やっと解放されたマルコが、その様子を怪訝な表情で見守る。

床に足が沈むような感覚。

仲間を失った時の絶望感。

まさか死んでからもこんな思いをするなんて――。  
一歩づつ、コニーに近づく。

そして、ある違和感に気付いた。

近付いているはずなのに、いつまで経ってもコニーは小さいままだ。

爆発的な成長で周囲を驚かせた180センチの身長は見る影もない。

ジャンは驚愕に顔を歪ませ、コニーの肩を激しく揺さぶる。

「オイ……どうしちゃったんだよコニー！ 一体何があった!?? その姿……まるで小っちゃえージャガイモじゃねーか！」

「マルコ、こいつ殴ってもいいか？」

「ああ、強めに頼むよ」

マルコは真剣な表情で頷いた。

\*\*\*\*\*

懐かしい訓練兵舎の食堂も記憶のまま、何一つ変わらない。

そこにごった返す同期の訓練兵たちも4年前の姿のままだ。

そして自分の体も4年前の姿に戻っていることを、ジャンは確認していた。

夢の中にいるような気分だが、頬の痛みが「これは現実だ」と自身に突きつける。

この世界はなんだ？

死後の世界じゃなかったのかよ。

これじゃ本当にタイムリープでもしたみたいだ。

マルコとコニーの後ろを、ジャンはゾンビのように歩く。

すると前方から見知った顔が現れた。

細身の長身――そばかすが印象的な女は、ジャンの顔を見た途端ゲラゲラ笑い出す。

「だはは！ なんだよその顔は！ 今日是一段と男前じゃねーか！」  
ユミル——壁外でライナーの仲間には喰われたはず。

この憎たらしい顔は、とても死人には見えない。

その隣には小柄な金髪美少女——ヒストリアがユミルを諫める。

「だ、ダメだよユミル！ 笑ったりしちやジャンがかわいそうだよ！  
大丈夫？ とつても痛そう……。そうだ！ 救急箱もってくるよ  
！」

ジャンの腫れた頬を見て、慌てる美少女。

彼の知る女王の毅然とした姿からは想像もつかない。

間違いない。

これはヒストリア・レイスではなく、4年前のクリスタ・レンズだ。

「もう何がなんだかわからねー。クリスタ……。やっぱりお前は天使  
だったのか？」

「はへ!?？ ど、どうしたのいきなり……。天使なんて、そんな私は  
……」

雪のような白肌の頬がみるみる真つ赤に染まっていく。

あわあわして否定の言葉を繰り返す彼女は、誰が見たって愛らし  
い。

それが面白くないのか、ユミルがクリスタを守るように抱きしめ  
る。

「おいおい。私の許可なく天使を口説くんじゃねーよ。ちよつと優し  
くされたからって勘違いすんなよ馬面野郎」

「ユミル！ そんな言い方——わわッ！」

「お前は黙ってろ」

さらనికిつく抱きしめられて、クリスタはくぐもった声を上げる。

「うー苦しいよおユミル」

ジャンは魂の抜け切ったうつろな表情で、

「ああ、すまねえ。……。俺が悪かった」

そう謝ると、二人の横をすうっと通り過ぎる。

彼はふらつきながら歩を進める。

すると、前方から歩いてきた誰かにぶつかった。

その衝撃にジャンが尻餅をつくど、申し訳なさそうな声が彼の頭上に降ってくる。

「あああ！ すみません！ 大丈夫ですか？ でもジャンも悪いんですよ。ちゃんと前を向いてないから——」

同期のくせになかなか治らない敬語口調。

彼女の声を聞いて、ジャンは反射的にバツと顔を上げる。

そこには、先日の作戦で死んだ仲間が立っていた。

「サシヤ！ お前サシヤだろ！！？」

「はい？ ええまあ……誰かと言われればサシヤ・ブラウスですけど……」

突然の大声にサシヤは戸惑って、

「なんだか様子が変わですが、そんなにお尻痛かったん——」

「サシヤ！ 会いたかった！」

感極まったジャンが、思いつきりサシヤを抱きしめる。

その瞬間、時が止まった。

サシヤは固まり、ジャンにされるがままに泣きすがられる。

数秒の沈黙の後、わっと周囲がざわつきはじめた。

「血迷って私の天使にちよつかい掛けたと思えば……なるほどなア、本命は芋女ってわけか！」

「そうなのサシヤ！！？ ジャンと付き合ってるの！！？」

ユミルとクリスタの勢いに押されて、サシヤは我にかえる。

「違います！ そんなわけ——」

「照れんなよ。クリスタも無粋なこと聞いてんじやねーよ。ジャンを見る。愛しい女抱いて涙流してんじやねーか」

「本当だ……。すごい！ すごいよサシヤ！ お祝いしなくっちゃ！」

まるで水を得た魚だ。

訓練兵たちの娯楽は少なく、こういった話題は一瞬で広まる。

サシヤは真っ赤な顔で焦り、ジャンを引き離そうともがく。

「ちよつと何してんですか！ 早く離れてくださいよー！」

「嫌だ」

「嫌だつて何を——ッ！」

「お前に肉を食わせるまでは絶対離さねーぞ！」

「キヤー！・今のつてプロポーズ!?？」なんて騒ぐ声は、ジャンにとつては些細なものだ。

なぜなら、ジャンはサシヤ・ブラウスの最期の言葉を知っている。

「肉……」

それが彼女の最期の言葉だ。

あの時のエレンのように人によつては嘲笑する、間抜けな最期だったろう。

しかし、ジャンは彼女がどれほど食に命をかけていたか知っている。る。

もつと生きて、安全な世の中で肉を——美味しいものを食べたかつたらう。

なのに、サシヤは夢半ばに死んだ。

大事な夢よりも仲間の命を大切にするやつだからだ。

そんな良い奴で、愛すべきバカだからだ。

世界はクソツタレで、良い奴でバカな奴ほど先に逝つてしまうことをジャンは身に染みて知っていた。

「おーいみんな！・新たなカップルの誕生だぞ！」

ユミルが食堂に響き渡る大声をあげると、あつという間に食堂中の注目が集まる。

サシヤは湯気が出るほど真っ赤になって、

「やけん、なんべんもいよいよろうが！・離れろ！」

彼女の膝蹴りは見事に男の急所に当たり、ジャンは無言のまま地に伏したのだった。

## 二話

夕焼けでもないのに、空は焼けていた。

銃の焼香に血の臭いが混じり、風がさらっていく。

吹き渡る一陣の風が、生茂る草を揺らしていく。

タンタタタタ——タンタンタン。

耳に馴染んだ銃撃音。

そこに咆哮と絶叫が加わる。

まさに戦場のど真ん中で、ジャンは立ち尽くしていた。

立体機動装置も銃もない。丸腰だ。

……なんだ。

俺は何をしている。

呆然と、辺りを見回す。

そこには惨劇が広がっていた。

サシャが、銃撃を受けている。

身体中に銃弾を浴び続けている。

血まみれなのに、不思議と彼女は倒れない。

だから途切れなく撃たれ続ける。

その隣では、マルコが巨人に喰われていた。

彼は暴れることもなく、無表情だ。

食事中の巨人の前には長い長い列があり、その最後尾は肉眼で確認できない。

そこには見知った顔も並んでいた。

直感的に気付く。

巨人に喰われた——今までの犠牲者の列だ。

巨人はマルコを飲み込むと、最前列にいた者に手を伸ばした。

ジャンは戦慄する。

胃からせり上がる汚物をなんとか飲み込む。

脳を直接搔き乱すような恐怖。

後退り、震える足を叱咤する。

逃げねえと。

一刻も早く！

パニックになる脳を奮い立たせ、振り返る。

と、目の前にはエレンがいた。

コニーやアルミン——リヴァイやハンジたちもいる。

まだ生きているはずの仲間たちが、エレンの前に一列になつて並んでいた。

エレンが無言で、ブレードを引き抜く。

そして次々に仲間たちの首を跳ね飛ばした。

コニーが、アルミンが——生首になつて転がる。

エレンは仲間たちの生首を蹴り上げながら、痙攣的な笑い声をあげる。

その光景に、ジャンは冷静さを取り戻していた。

不思議と恐怖心は消え、ただ深い悲しみと絶望が胸の内に広がる。

項垂れて、重い首を振った。

「なんでだよエレン。……俺たち仲間だったろ。なんで裏切るんだよクソツタレ！」

嗚咽まじりに叫ぶ。

が、惨劇は止まらない。

戦場で繰り広げられる残酷な死の連鎖は、まるで彼がここにいないかのように振る舞った。

撃たれて、

喰われて、

刺されて、

そして殺される。

みんなみんなみんな——死ぬ。

もう十分だろ！

俺には関係ねーんだ。

——だって俺はもう死んだんだから。

「エレンじゃなくてよかった」

冷たく涼やかな声が、ジャンの鼓膜を揺らした。

硬く閉じたまぶたを開けると——ミカサがいた。

その黒く沈んだ瞳とじつと目を合わせる。  
かつて彼女とこんなに見つめ合うことがあっただろうか。  
すると、ふいに彼女が目を逸らした。

ジャンはその視線を追って、下に目を向ける。

彼女の手にはブレードが握られ、その刃の先端はジャンの腹部に  
深々と刺さっていた。

生暖かい血が溢れる。

視認した途端、強烈な痛みがジャンを襲う。

痛い。

熱い。

苦しい。

浅い呼吸をなんとか繰り返す。

崩れ落ちてしまいたいのに、腹に刺さったブレードはびくともしな  
い。

もがき苦しむジャンをミカサは冷酷に見つめていた。

彼女の乾いた唇が開く。

「死んだのがジャンでよかった」

\*\*\*

「あああああああああああああああ！」

絶叫と共に飛び起きる。

息遣いは荒く、汗でビツシヨリ濡れた前髪が額に張りついていた。

ジャンは呆然と辺りを見回す。

白いベッドに白いカーテン。

剥き出しのコンクリート壁。

消毒液の臭いがほのかに鼻をついた。

見覚えがある……ここは兵舎の医務室だ。

そう思い至ると、ジャンは脱力して後ろに倒れこんだ。



固いベッドがギシギシと大きな音を立てる。

「……なんつー夢見てんだ、俺は」

深く呼吸を整えながら、瞳を閉じる。

「だいたいミカサは「エレンじゃなくてよかった」とも「死んだのがジャンでよかった」とも言ってたな」

「たしかに俺をエレンと間違えはしたが……俺でよかったなんてさすがに――」。

「ああああああクソ！」

「やめだやめだ！」

夢の内容でグダグダ悩んでたって仕方ねエ……って、どこからが夢だ？

「そこまで考えて、再び飛び起きる。」

「確かに自分は死んだはずだ。」

「しかし、あの子の出来事はどうだ。」

「まるで訓練兵時代にタイムリープしたような――あれは夢？」

視線を彷徨わせると、ベッドの傍らのサイドテーブルにメモが置いてあるのを見つけた。

「そこには懐かしい文字が並んでいる。」

『今日のお前は特別に頭がおかしい。』

よって、本日は訓練不能であると判断した。

教官には報告済みだ。

ノートは取っておいてやるから、しっかり休んでくれ。』

マルコの筆跡だ。

訓練兵時代、奴のノートは散々見せてもらった。

「見間違えるはずがない。」

メモに指の跡がくつきりつくほど、ジャンは自然と指先に力を込めていた。

「夢じゃねエ。……夢じゃねーんだ」

「コニーに殴られた頬も、サシャに蹴られた局部もまだジンジンと痛む。」

「不本意ではあるが、その痛みも夢じゃないと証明してくれていた。」

『訓練兵時代に戻りたい』

死の間際の願いがまさか叶うとは。

神様は本当にいるのかもしれない。

そこまで考えて、ジャンの脳に電撃が走る。

ちよつと待てよ……。

今の俺なら——人類を救えるんじゃないか!?!?

だって俺は未来を知ってるんだ!

いてもたってもいられず、教員用のデスクに向かうと鉛筆を手にした。

昂る興奮を抑えて、まずは冷静に情報を書き出そうと考えたのだ。

・人は巨人化できる

・壁外人類がいる

・ライナー、ベルトルト、アニは壁外人類で——

思いつくまま快調に滑らせていた筆をピタリと止める。

次にどう続けようか迷っていると、ジャンは不気味な現象を目にした。

書いた文字がぐにやりと曲がったのだ。

文字は形を変えて一本の線のようにになると、端の方から次々と浮き上がり、最後には煙になって消えた。

ジャンは啞然として、白紙に戻った紙を凝視する。

超常現象を目撃し、信じられない気分のまま口を開く。

「ベルトルトは——ッ！」

超大型巨人だ! と言おうとした。

途端に、心臓を鷲掴みにされたような痛みに襲われる。

たまらず胸を抑えてうずくまった。

冷や汗が額をつたい落ちる。

「はは……神様も案外優しくねーな」

書くこともできず、話すこともできない。

つまり未来を知っていたって誰にも協力を頼めないということだ。

ジャンは床に大の字になって、天井を見上げた。

薄汚く、低い天井が覆いかぶさってくるようだ。

…：俺一人で何ができる？

たとえばライナー、ベルトルト、アニを暗殺することは不可能ではないだろう。

そうすれば超大型巨人の二回目の襲撃は防げる。

だが、その後はどうする。

また時間が経てば、壁外人類は攻め込んでくるだろう。

それじゃ問題の先送りだ。

理想的な形は、ライナー、ベルトルト、アニの三人を仲間として引き込むこと。

それができれば壁外人類と交渉やスパイを送るという方法も——選択肢が増えることは間違いない。

壁内人類は早急に理解すべきだ。

自分たちが世界でどんな存在なのかを。

\*\*\*

「けどなあー、仲間にするってどうすりゃいいんだよ？」

「お前の言ってる意味がわからねーのは、俺がバカだからじゃねーよな？」

談話室は全ての訓練兵に開かれた部屋——いわば自習室のようなものだ。

ここでは自習やグループ会議など、もっぱら自主的な訓練活動に用いられる。

その談話室の一角で、未来ではお馴染みの三人組が机を囲んでいた。

「そう言うなよ、コニー。色々あって頭ん中ぐっちゃぐちゃなんだよ」  
ずっと混乱しっぱなしだ。

ハードな訓練後に呼び出すのは悪いとは思ったものの、誰かに話を聞いてもらわないと頭がおかしくなってしまうそうだった。

机に突っ伏すジャンに、コニーは冷ややかな視線を送る。

「俺らみたいなバカに相談か？　そういうのはマルコに聞けよ」

「……昔の俺ならそうするんだろーな」

正直なところ、まだマルコに慣れないのだ。

ジャンにとつてのマルコは、約5年前に死に別れた親友だ。

その死に様は壮絶で、右上半身は噛みちぎられ、巨人の臭い粘液にまみれていた。

ジャンはマルコの遺体を目に焼き付け、死体の山に投げ入れ、燃え盛る火にまかれて消し炭になるのを見送った。

その記憶は、後に経験する凄惨な出来事にも劣らず、今でも夢に見るほどだ。

なのに、今の状況はどうだ。

目の前で動いて喋って生きている……そんなマルコを見ていると胸の奥がざわついて落ち着かない。

ジャンはガシガシと頭をかいて、

「とにかく。今の俺は、お前らといるのが一番落ち着くんだよ」

コニーは目を丸くして、

「お前……本当にジャンか？」

「はア!?　バ！　バツカかテメーは！　ジャンだろどう見たってキルシユタインさんだろ！」

妙に鋭い指摘に取り乱して、ジャンは声を上擦らせた。

「だってよー。俺らそんなに仲良くねーだろ」

「は？」

「驚くことじゃねーよ。そもそもお前のこと嫌いだしなー。だよなあ、サシャ」

「もちろんです。ジャン、あなたは最低の馬面野郎です。自分勝手に自分本位でわがままで自分勝手に——あなたみたいな自分のことしか考えられない人間はママのおっぱいでも吸ってりゃーいいんですよ！」

「落ち着けよ。頭痛が痛いみたいになってるぞ。ん？　あれ、いいのか？　頭痛は痛いもんなあ……」

フーツフーツ！ と威嚇するネコのように毛を逆立てるサシヤを、  
コニーは首を傾げながら宥める。

背中を預け合っていた戦友から、まさかの拒否。

なんとなく心の抛り所に思っていたのに、ジャンは頭を殴られたよ  
うな衝撃を受ける。

「あれ、俺らってそんな感じだったっけ……？ つーか、俺のどこが嫌  
いなんだよ？」

「バカにしてくるし、上から目線なところだな」

「口が悪いところですね」

「自慢話しかしねーところだな」

「正直な俺カツコいい！ とか思ってるところですね」

「マルコに教わった癖に『俺すげー！』とか得意げにするところだな」

「立体機動で飛んでる時の決め顔がうざいところですね」

「カツコつけるくせに馬面なところだな」

「馬面なところですね」

「よーし、わかったもう十分だやめてくれ」

そうだった。

訓練兵時代の俺って、そんな奴だった。

そりゃ嫌われるわ。

別に誰彼かまわず好かれないと思っただことはねーけど、こいつらに  
嫌われてると思うと……ちよつと胸にくるものがある。

ジャンは眉間に深いシワを刻む。

誰もが過去の自分を恥じることがあるだろう。

日常生活の中で、ふいに思い出し「うわああああ！」と叫びたくな  
る時があるだろう。

思い出したくない痛い過去——それを現在進行形で見せつけられ  
るといふのは……ちよつと精神的にきつい。

「お前らの言い分はわかった。けど、俺も本当に困ってんだよ。頼む  
ぜ、天才なんだろうコニー」

「……たしかに俺は天才だけだな？」

「人類始まって以来の天才に聞きたい。例えば、だ。桃太郎って昔話

あるだろ?」

「ああ……桃から生まれた桃太郎が、サルと鳥と犬を仲間にして鬼退治にいくってやつだろ?」

それがどうしたんだよ、とコニーが疑問符を浮かべる。

ジャンは大真面目に頷いて、

「ところが、だ。桃太郎は旅の途中で気付いちまう。実は、サルとキジと犬はスパイ——つまり鬼の仲間だったんだ」

「なん……だと。それじゃ、桃太郎はやべーじゃねーか!」

「そうなんだよ! このままだと桃太郎は鬼に殺されちまうんだ。そこで桃太郎は考えた。どうにかサルとキジと犬を説得して、自分の味方になってもらおうってな。そこでだ、コニー。お前ならどうする?」

「なるほど。難しい問題だが、俺は一つ気になつてることがあったんだ。鳥はどこに行っちゃったんだ?」

「コニーは救いようのないアホですね。鳥はキジのことですよ。というか、何なんですか。このどうでもいい話……」

呆れ顔のサシヤがジャンを睨みつける。

「あなたが何を聞きたいのか知りませんが、私はまだ怒ってるんですよ」

「怒ってる? お前になんかしたつけ?」

しらばっくれるジャンに、サシヤは声を荒げる。

「なッ——! 今朝のことですよ! 私にやっただでしょう! まさか忘れたんですか!?!」

「ああ、お前に蹴られたことならもう気にしてねーよ」

「そうでした……気が動転して手加減もできずすみません——じゃなくって! なんで私が謝らなきゃいけないんです!?!」

首まで仄かに赤く染まったサシヤは歯噛みして、

「いきなり、その……抱きしめたりとか困ります! 迷惑です! 噂されたりして大変だったんですからね!」

年相応の少女らしくツンとすねるサシヤに、ジャンは少し驚いた。

正直に言えば、彼女には食べ物と野生児のイメージしかなかったか

らだ。

これが地獄を体験する前のサシャ・ブラウス。過酷な戦闘の中で、捨てざるを得なかった彼女の一面かもしれない。

「……俺が悪かった。明日から朝食のパンは半分やる。兵団卒業するまでずっとだ」

「許します。一生ついていきます」

食べ物が絡むとちよろいのは昔からだった。

なんだよ、こいつらあんまり変わんねーなあ。

相変わらずコニーはバカだし、サシャは食い意地張ってるし。

二人との関係性はゼロから——むしろマイナスからの出発なのに、戦友の面影に思わず口元が緩む。

それを誤魔化すように、ジャンはごほんと咳払いを一つした。

「それで、お前ならどうするんだ？ どうやって三匹を味方につける？」

「そんなの簡単ですよ。鬼からの報酬よりも美味しい餌を用意すればいいんです。人間が思うよりも野生の獣は損得に敏感ですから。報酬の獲物をチラつかせ、きちんと調教すれば桃太郎の手駒にするのは簡単です」

「調教ってお前な……」

例えば話なのに、獣寄りの回答では参考にならない。

相手は人間だ。……たまに巨人にはなるけれど。

微妙な表情のジャンを気にすることもなく、サシャはおまけのように付け加える。

「まー、鬼側で調教済みなら話は別ですけどね」

「調教済み……？」

「獣は一度主人を決めたら裏切ることはありません。場合によっては、自分の命を賭しても主人に仕えます。そういう風に調教されるからです」

サシャの野性味あふれる回答に、ジャンは黙り込んだ。

不思議と的を射ているように思えたからだ。

あの三人は壁外から選ばれた戦士。

かなり偏った差別的な教育を受け、恐らく弱みや人質も握られてい

る。

それを調教と呼ぶのに違和感はなかった。

……そんな奴らが簡単に祖国を裏切るはずがない。

「いや、一つだけ方法があるぜ」

自信たっぷり、コニーがニヤリと笑う。

「本当か？ なんでもいい。言ってみてくれ！」

「へへ……それはだな——愛だよ」

愛？ と、ジャンは口の中で単語を反芻する。

「愛って……なんですかそのバカ丸出しな答え」

「わかってねーなーサシャ！ どんな試練も愛さえあれば乗り越えられるんだよ。アルミンが言ってたんだ。恋愛感情つてのは偉大だつ

てな。なんでも、どんな試練や障害も愛の前ではただのスッパイ酔？

になるらしーぜ！」

「スパイスですよ。というか、それは小説とか……ラブストーリーというやつでしょう。どうやって桃太郎に取り入れるんですか」

サシャが眉根を寄せると、突然ジャンが立ち上がる。

その時、天命というべき衝撃がジャンの脳を駆け抜けた。

「やっぱりお前は天才だぜ！ それだ……愛だよ！ 愛がないなら、作ってやりやーいい！ サル、キジ、犬をそれぞれつがいにしてやりやーいい！」

「つがい？ 安易な交配は野生の生態系を崩す——」

もはやサシャの言葉はジャンの耳に届いていなかった。

そうだよ。

あいつらだつて好きで俺らを殺すんじゃないやねんだ。

ベルトルトも俺らのことを「仲間だと思ってた」と言っていた。

けど、あの頃の俺らはガキで……世界の陰謀やらお偉いさん方の命令には逆らえなかった。

それでも、ガキにはガキだけの世界——青春つてもんがあるじゃ



ねーか。

仲間の絆だけじゃ、奴らを引き止めることはできなかつた。

だが、そこに愛が加われればどうだ？

愛する人と世界を天秤にかける——なかなか良いラブストーリーになりそうだ。

「人類を救うのは、復讐でも憎悪でもねエ——ラブ&ピースだ！」

タイムリープという気まぐれをくれた神様にVサインを突き上げて、ジャンは高々と宣言した。

### 三話

窓から朝日が差し込み、ジャンの顔を照らした。  
光の眩しさに彼の睫毛がまたたく。

ジャンはブーツとした頭で起き上がると、ピチチツと可愛らしい声につられて窓の方を見やった。

窓辺ではマルコが小鳥に餌をあげている。

——平和だ。

こんなに平和な朝はいつぶりだろう。

「おはよう」

視線に気付いたマルコがジャンに挨拶をした。

「おう」

「なんだ。今朝は泣かないんだな」

そう言つてクスクス笑うマルコに、ジャンは「うっせー」と言い返す。

こんな些細なやりとりにもまだ慣れない。

気恥ずかしさを誤魔化すように、ジャンは勢いよくベッドから降りた。

その時、興奮した様子のコニーが部屋に駆け込んでくると、「来てみろよ！ 今日のベルトルトはすげーぞ！」と叫んだ。

\*\*\*

コニーに促されてついていくと、そこには超大型巨人の間抜けな姿があった。

ベッドの上で長い足をほぼ180度の開脚。

上半身はのけぞつてベッドから飛び出し、逆さになった頭がぶらぶら揺れている。

薄く開かれたまぶたからは白目がちらちら覗いているが、すーすーと規則正しい寝息が聞こえるということは生きてるんだろう。

新種のエクソシストか何かだろうか。

「……すっげー懐かしいな」

「懐かしい？ 俺もここまですごい寝相は久しぶりに見たんだがな」

ジャンの隣で、ライナーが首を傾げた。

奇妙な寝相を前に、コニーは今日の天気やら運勢を占っている。

あーでもないこーでもないと言熱する姿は、なんというか……仲間って感じた。

「そーいや体は平気なのか？ マルコから聞いたぞ。昨日は様子が変わったってな」

ライナーは親しげに尋ねた。

「ああ……もう心配ねーよ。昨日は寝ぼけてただけだ」

ジャンがそう答えると、

「ならいいけどよ。あんまり心配かけるなよ？ お前のフォローばかりでマルコの成績が下がらないか心配だ」

とライナーは言った。

その言葉に、ジャンは眉をピクリと動かす。

未来でマルコを殺す張本人が吐いたセリフに、内心苛立っていた。

「……心配ねーよ。マルコは優秀だ。今期の十番以内には必ず入るぜ」

「本当にらしくねーな、ジャン。いつもなら俺の才能の方が——とか噛みつくだろう」

「ちよつとばかり大人になっただけだ。兄貴分のアンタに心配かけるほどじゃねーよ」

努めて冷静に、ジャンは言った。

ライナーはマルコを殺す。

その未来を思うと、ドス黒い感情が溢れてくる。

到底許せない。許せるはずがない。

——それだけの感情だったらどんなに楽だろう。

ベルトルトの間抜けな寝相。

それを取り巻いて笑う仲間。

仕方ねーなど困ったように見守る兄貴分のライナー。

この未来さきの地獄じごくを生きてきたジャンにとつては、すべてがまぶしい。

このぬるま湯にいつまでも浸かっていたいと思ってしまう。

たとえ偽りの時間だとしても。

「ジャンー！」

強く肩を掴まれて、ジャンはハッと顔を上げた。

そこには心配そうに自分を見つめるマルコとライナーがいた。

「おいおい、真っ青だぞ。今日も休ませた方がいいんじゃないか？」

「さすがに二日連続はまずいよ。兵士として体調管理に不安があると思われてしまう。下手したら減点だ」

「そうは言ってもな……無理して事故にでもなったらどうする」

「僕がフォローするよ。おそらく精神的な問題だからさ。注意して見ていれば大丈夫だと思う」

真剣に話し合う二人。

ジャンはぼかんとして、そんな二人を眺めていた。

そうだよな。

まだマルコは死んでねえし、ライナーは良い兄貴分のままだ。

俺の同期はまだ誰一人欠けてねえ。

今日の訓練について綿密に打ち合わせを始めるライナーとマルコ。

その後ろでは、ベルトルトの顔にコニーが落書きをしている。

ジャンはおもむろに駆け寄ると、ベルトルトの頭をわしゃわしゃ揺らした。

ンゴつと豚っ鼻を鳴らし、ベルトルトがヨダレを撒き散らして飛び起きる。

落書きの最中だったコニーがもろにヨダレを被って悲鳴をあげた。

「だははははー！ ベルトルトのやつすっげー顔してるぜ！」

その光景に、ジャンは腹を抱えて笑った。

俺が運命を変えてやる。

その間抜け面がずっと間抜け面でいられるように――。

\*\*\*

ライナー、ベルトルト、アニに恋人を作る。

そう決めたままでは良かった。

が、さっそくジャンは大きな壁にぶつかっていた。

……カップルってどうやって作りやいいんだ？

ようするに、俺は恋のキューピッド的なことをやろうとしてるんだよな。

そりや面白がってネタにすることぐらいはあったが、基本的に他人の恋路とかどうでもいいしな……考えたこともなかったぜ。

朝食の薄いスープに入った芋をスプーンでつつきながら、ジャンは思い詰めていた。

視線の先ではライナーとベルトルトがデカイ図体を並べて食卓についている。

下手に関わりを持つのは危険だ。

なるべく直接的な介入はしたくない。

できれば自然な流れで恋人を作ってもらうのが理想だろう。

が、流れに任せるとすれば自ずとカップリングは決まってくる。

ライナー×クリスタ、そしてベルトルト×アニだ。

「だあああああ！ クソ！ そのカップリングは推せねエ！ 無謀すぎる！」

スプーンを握る拳を机に叩きつけ、ジャンは頭を抱えた。

ライナーとクリスタなんて完全に美女と野獣だ。

ゴリラのくせに身の程を弁えない。高望みにも程がある。

そしてベルトルトとアニは危険すぎる。

現状はベルトルトの片思いだろうが、万一切つつかれでもしたら困る。

味方に取り込もうとしてるのに、身内で結束されては意味がない。

三人にはなんとか新しい恋を見つけてもらわねーと……。

前途多難の難題に、ジャンは遠い目でため息を吐いた。

「なあ、マルコ……人はどうやって恋に落ちるんだろう」

「人前でそういうことは言わない方がいい。馬鹿がバレるよ」

マルコはパンをかじりながら答える。

「昨日から思ってたが、なんか俺にだけ冷たくねエか？」

「大事な時期なのに君が変なこと言い出すからだろ。だいたい恋なら僕よりもジャンの方が知ってるじゃないか。……ほら、来たぞ」

そのとき涼やかな風がふわりと吹き通って、刈り上げたジャンの襟足をくすぐった。

自然と吸い寄せられる視線。

空中を泳ぐように彼女の黒髪が流れる。

——まるでアイツに一目惚れした日の再現みたいだ。

そう錯覚するほどに心を奪われた。

彼女はまっすぐに歩み、空席を見つけるとくるりと振り返った。

ジャンの記憶よりもまだ幼さが残る顔立ち。

それでも、美しさは少しも変わらない。

目が合った。

みるみる顔が熱くなるのを感じる。

おいおいマジかよ。

目が合ったぐらいで赤くなるってガキか俺は!?!?

焦るジャンの方を向いて、ミカサの艶やかな唇が開く。

「エレン」

彼女の口から当たり前に飛び出した名前に、ジャンは頭から冷水をぶっかけられたように感じた。

ジャンの背後を通って、呼び掛けられた黒髪の少年が欠伸ばじりに席につく。

彼女は優しい手付きで少年の寝癖に触れ、

「エレン。寝癖はきちんと治さないとダメ。だらしなく見えてしまう」

「うるせえーな。俺の勝手だろ」

訓練兵たちにとっては日常的な二人のやりとりも、ジャンにとって

は数年ぶりの懐かしくも苦々しい光景だった。

## 四話

少年はまだ小柄で、黒髪の短髪で、くりくりした大きな瞳は鋭く輝いていた。

決意に満ちた眼差し。

自分を正義だと信じて疑わない面構え。

ミカサとアルミンに囲われて巨人の駆逐談義に花を咲かせる姿を見ながら、昔からエレンのそういうところが気に食わなかったとジャンは思い出していた。

いつだったか「ジャンは指揮官向きだ」とマルコに言われたことがあった。

実際、調査兵団では指揮官としての役割を果たしていたし、確かに向いていたんだろう。

けれど、それは決して自分が特別だからではなく、むしろごく普通の弱い人間だからだとジャンは自覚していた。

今まで心臓を捧げてきたその他大勢。

それが自分の立ち位置で、そうあるべきだとも思っていた。

震えながら、心臓を捧げる順番が回ってくるのを待っていたと言ってもいい。

だが、エレンはちがう。

あいつだけは特別で、運命に選ばれた。

そしてミカサにも――

「お前って、エレンに絡まなくなったよな」

ある日の作戦の最中、コニーにそう言われた。

「昔はすぐ突っかかって、ケンカ売ってたのによ。……まー、俺らもいつまでもバカやってるわけにいかねーしな」

俺はなんて答えたんだっけ。

ジャンは立ち上がった。

マルコの静止の声を振り切って力強く足を進め、エレンに近寄るとその胸ぐらをぐっと掴み上げる。



何者にも屈しない強い瞳。

久しぶりに睨み合ったムカつく面に、ジャンはカツと頭に血が上った。

派手な音を立てて貴重な食料が床にブチ撒かれる。

「何すんだよ！ スープがこぼれちまったじゃねーか！」

「スープなんてどうでもいいんだよクソツタレめ！」

怒りのままにジャンが拳を振り上げると、

「ジャン、やめて。エレンは朝ごはんを食べていただけ。たしかに二ンジンは残していたけれど、もしあなたがそのことで怒っているなら心配ない。いま私が注意しようとしたところだから」

ミカサはそう言って、ジャンの腕に手を置いた。

「出てくんよミカサ！ ケンカ売られたのは俺なんだぞ！」

エレンが怒鳴った。

「まずいよエレン！ こないだだつて教官に注意されたばかりだろ？！

？ 今は大事な時期なんだからケンカなんてしてる場合じゃないよ」

アルミンが慌てて仲裁に入った。

未来では久しく見ていない三人のやりとり。

懐かしくももどかしい思いに、ジャンは力を込めてエレンを引き寄せる。

「なんでテメーはそうなんだ！ ミカサやアルミンがいるのに、仲間がいるのに……なんで俺らを——」

裏切ったんだ！ と続けようとする、ジャンの心臓に鷲掴みにされたような激痛が走った。

未来に関することは喋れない。この痛みはペナルティだ。

尋常でない痛みにジャンが動きを止めると、エレンはすかさず彼の手を振り払った。

「お前が何を言いたいのかさっぱりわかんねーけどな。これだけは言つとくぞ。俺はお前とは違う。すべての巨人を駆逐するまでは、俺は止まれねーんだ。お前みたいなやつに構ってる暇はねーんだよ！」

唸るように、エレンは言った。

「……俺みたいなのやっつてなんだよ」

痛みに耐えながら、ジャンはなんとか声を絞り出す。

「いつも自分で言ってるじゃねーか。憲兵団になって内地に行きたいんだろ？　なんだっけか——たしか安全で快適な暮らし？」

エレンは鼻で笑い、

「勝手に行けよ。ただし、俺の邪魔だけはすんな。腰抜け野郎が」

その瞳に正義と憎悪の炎をたたえて、エレンは言った。

しかしジャンは知っている。

いつしかその炎は——憎悪が正義を焼き尽くし、すべてを飲み込むことを。

俺はバカだ。

未来のエレンに言えなかったことを、今のエレンにぶつけてどうする。

考えろ。俺が今すべきことは何だ？

鋭く痛む心臓に耐えるために、ジャンは無意識のうちに胸のあたりを掴んでいた。

灰汁色のシャツごと握り締めた拳はまるで兵士の敬礼のようだ。

数多の兵士が人類に心臓を捧げてきた。

今まで幾度となく握り締めてきたそれが、自らの弱い心臓を熱くさせているようにジャンには感じられた。

その熱に浮かされて、口を開く。

「お前の言う通り、俺は腰抜け野郎だ。だが、それは昨日までの俺だ」  
「なんだよ。今日のお前は違うって言うのか？」

不遜な表情のエレンに、ジャンはニヤリと笑いかける。

心臓の痛みは既に消えていた。

「よく聞けよ、エレン。俺は調査兵団に入る」

「……は？」

エレンは敵意を忘れて、間抜けな声をあげた。

驚いているのはエレンだけじゃない。

ミカサもアルミンも——無関心を装いながら面白半分には耳を傾けていた食堂の誰もが耳を疑った。

「お前が調査兵団って……そりゃ、どういう意味だよ」

「言葉通りだ。もう成績なんてどうでもいい。憲兵団なんてクソ食らえだ。内地での安全な暮らしは楽観主義者の夢物語にすぎねエ。……俺は理解したんだよ。本当の意味で心臓を捧げる覚悟のねーやつに何も救えやしねーってな」

昨日までとは180度違うジャンの言葉に、エレンは戸惑っているようだった。

怪訝そうに彼の顔をまじまじと見つめ、その瞳が確かに決意に満ちているのを見るとエレンは徐々に嬉しさを滲ませた。

「死に急ぎ野郎」なんて嘲笑混じりのあだ名を付けたのは他でもないジャンだ。

しかし、そのあだ名に心の中では誰もが肯定していたことをエレンも感じていたのだろう。

訓練兵の中でも異端扱いだったエレンに、幼馴染み以外ではじめての同志ができたのだ。

エレンは頬を紅潮させて、

「そうか！ はは……やつとわかってくれたのか！ この世から巨人を駆逐するには調査兵団で戦うしか——」

「残念ながらお前に同調したわけじゃねエ。たしかに俺は間違ってたけどな。そりやお前も一緒なんだぜ、エレン」

エレンは仲間を裏切り、地ならしという選択をした。

壁外人類の殲滅。

とてもハッピーエンドとは言えねエ。

つまりエレンは人類を救うことに失敗したんだ。

だから神はタイムリープなんて反則技を使って新しい救世主——俺を選んだ。

ミカサが不思議そうにこちらを見つめている。

その視線を感じながら、ジャンはエレンを睨みつけた。

「人類を救うのはお前じゃねエ。——俺だ！」

\*\*\*

兵舎の廊下をエレンはずんずん歩いていく。

さつきジャンから言われたことに腹を立てているのだろう。

隣に並ぶアルミンがエレンを懸命に宥めている。

そんな二人の後ろ姿を眺めながらミカサは考えていた。

まさかジャンが調査兵団に興味を持つとは思いもしなかった。

昨日までは「憲兵団に入る」とうるさいぐらいだったのに……人は変わるものだ。

エレンも少しぐらい変わってくれないだろうか、とミカサは小さな溜息を吐く。

もちろんエレンが私を大切に思っているのはわかっている。

なぜなら私たちは家族。

強い絆で結ばれている。

けれどエレンは優しいから、そこにつけこむ女狐がいるのだ。

ミカサは奥歯をギリリと噛み締める。

エレンはまっすぐで純粹だ。

だから彼に悪い虫が付かないよう、かねてから彼女は気を揉んでいた。

エレンが照れ屋なのはわかっているけれど、もう少し私との仲を見せつけてやってもいいのに。

赤くなった頬を隠すように、彼女は大切な赤いマフラーに顔を埋める。

大好きな家族の背中を熱く見つめながら何度目かの溜息を吐いていた。

しかし残念ながら鈍感なエレンはその様子に気付くこともなく、むしろ隣で歩く幼馴染みの少年が背後に感じるプレッシャーに胃を痛めているのをミカサは知らない。

## 五話

朝一の訓練は立体機動からはじまる。ずっしりと根付く大木。

重なり合った枝葉が青々と茂る。

朝靄の中を突き抜けて飛ぶと、肌がしっとり濡れ、風に冷やされて気持ち良い。

鼻を通る清涼な空気も、地上で吸うものとはどこか違う気がする。巨人も敵対する人間もない森の中は、ジャンにとっては久しぶりの環境だった。

すっかり戦いの道具と化していた立体機動装置は——実際にそうではあるが——訓練兵時代、何よりもジャンを解放してくれる相棒だった。

日々の訓練の鬱憤も、宙を飛んでいるうちに霧散して消えていく。今思えば、ちっほけな自尊心を満たしているにすぎなかったのだろう。

それでも楽しいことには変わりない。

「ジャンー！ ちよつと待ってくださいよ！」

切羽詰まった叫びが背後から聞こえて、ジャンは手近な枝に降り立った。

しばらく待っていると、朝靄の中から飛び出した影が隣に着地した。サシャだ。

「もう！ 単独作戦じゃないんですからね!?? 準備運動から飛ばしてどうするんです!??」

ぷりぷり怒り出す彼女に、ジャンは眉尻を下げる。

「悪い。気付かなかった。つい、な」

「というか、なんかめちゃくちや早くなくてませんか？ 全然追いつけませんでした。こんなに霧が出るのに……」

お前が遅くなったんだろ、いつものように返そうとして、すんでのところで飲みこむ。

ジャンには四年分の実戦経験の記憶がある。

四年前の身体だから感覚が違って多少やりにくいだが、それでも訓練兵のサシヤと差が出て当然だろう。

つーか、何純粹に楽しんでんだよ。

浮かれる頭をブンと振って、ジャンは気合を入れ直した。

ついさつきエレンに啖呵を切っておいて、失敗は許されない。

恋のキューピッド作戦を成功に導かなければ。

アニとはあまり接点がないからな。

まずはライナーとベルトルトか。

あの二人に惚れてるっつー女子がいれば、話は早いんだがな。

そういや考えたこともなかったが、あいつらなんでモテねーんだ？

「なー、サシヤ。ベルトルトって地味な顔してっけど、長身で足は長げーしめちやくちやスタイルいいよな。ライナーだって、ガテン系でいい体してるじゃねえか」

「いいですか、ジャン。なんの話かわかりませんが、その発言は誤解しか生まないですよ」

バサリと頭上で葉のぶつかる音がすると、まもなくアニが近くの枝に降り立った。

「何の話？ 今、ライナーとベルトルトとか聞こえたけど」

「ああ、アニ。聞いてくださいよ。ジャンが——」

「バツカ！ 何でもねーっつもの！」

思わずサシヤの頭をブレードの柄で叩くと「なにするんですか！」と、サシヤは涙目で抗議した。

自分から聞いてきたくせに、アニはさほど興味もなさそうに「あつそ」と話を終わらせた。

伏し目がちの目元に、霧のせいで少し湿った束のブロンドが落ちる。

その前髪を指ですくって右耳にかけると、何事もなかったように黙り込んだ。

いつもと変わらないアニの様子に、ジャンはホツとした。

危ねえ。不用意な発言は控えねーと。

こいつらの名前もなるべく出さない方がいいな。どこから疑われるかわかんねーぞ。

立体機動特有のワイヤー音が近付く。

今日の訓練で分けられたチーム——フォーマンセルの最後の一人だ。

小柄な影が霧のベールをまとって、アニの隣に着地した。

「遅くなっちゃってごめんなさい！ 思うように進めなくて……」

眉尻を下げて、クリスタが言った。

「問題ねエ。これから本題に入るところだ」

チームメンバーが揃ったところで、ジャンが指示を出す。

「作戦を確認するぞ。まもなく訓練用の信煙弾が打ち上がる。それを元に巨人型模型を狩りつつ、ゴールを目指す。先頭はアニ。次にサシャ、クリスタが続き、俺がしんがりだ」

この訓練は、ゴールへの到着時間と巨人型模型の討伐数が相対的に評価される。

立体起動訓練は点数が高いため、訓練兵たちは高得点を狙ってくる。

「何体狙う？」

アニが短く聞いた。

「信煙弾を見てから、距離も考慮して判断する。高得点を狙うなら最低三体はいきてエ。霧もあるし、昨日の雨の影響でここらの木肌は滑りやすいからな。ゴール時間はさほど稼げねーだろ。討伐数で勝負するしかねエ。とにかくアニは手近の模型に向かってくれ。細かい指示は後で出す」

無表情のアニが「了解」と呟く。

「サシャは遠目が利く。アニのフォローを頼む」

「了解です」

「クリスタは、全力でサシャについて行け。俺がフォローに回るから、離されても焦るなよ」

「了解！」

緊張した面持ちでクリスタが頷いた。

ほどなくして、訓練開始を告げる信煙弾の音が響く。

四人が一斉に空を見上げた。

左右に赤い煙の筋が現れ、中央の奥の方に仄かに緑色が見えた。

霧のせいで三本しか見えない。

ジャンは舌打ちをして、

「巨人型模型を二体狩って、最速で到着地点へ向かう！ 左からだ！」

彼の言葉を合図に、三人は「了解！」と返事をする。と立体機動にうつった。

\*\*\*

未来から来たんだから、この訓練は二回目のはずなのに、まったく記憶にない。

以前はどうやって訓練を終えたんだろう。

記憶にないぐらいだ。

好成绩は出せなかったんだろうな。

多少成績が上下したところで未来に影響があるとも思えないし、適当にやっとけば大丈夫だろう。

ガスを節約するために、遠心力を利用する。

ジャンは振り子のように身体を大きく振って、重なる葉の切れ目に何とか身体を寄せて、赤い信煙弾が伸びる先を確認した。

「アニー！ もうちよい左だ！」

前方に声をかけると、彼女は手をあげてジャンに合図をしてから左方修正した。

しばらく進むと、「見えました！」とサシヤが叫ぶ。

アニが巨人型模型の右足首——臄にあたる部位を削ぐ。

次いで、サシヤが左の臄を。

クリスタは頸に浅い斬撃を残し、その隣をジャンが深く抉った。

間髪入れず、アニは力強く木肌を蹴って反動をつけると、方向転換



する。

それに皆が続く。

二体目は、かなり右に逸れることになる。

が、隊の進行方向を示す緑の信煙弾——ゴール地点にはかなり近づく。

悪くないペースだ。

キラキラした金糸のような髪をなびかせるクリスタの横顔を、ジャンはちらりと盗み見た。

桜色のぷっくりした唇をきゅつと結んで、何かに耐えているみたいな顔。

一生懸命で、小さくて、かわいくて、優しくて——天使みたいな女の子。

それが同期の男たちの共通認識だろう。

誰もが一度は、彼女を巨人の手から守る痛々しい妄想をしたことがあるはずだ。

かつてはジャンもその一人だった。

だが、今は彼女の本来の姿を知っている分、もどかしい。

未来のクリスタ——ヒストリアは女王として立派に務めを果たしていた。

心ない民衆の陰口にも、社会から外れた孤児の薄暗さにも、耳を傾け続ける強さ。

彼女はまやかしの優しさではなく、信念を手に入れた。

ヒストリアは言っていた。

「あの頃の私は、良い子になろうって必死だったの。みんなに好かれるクリスタ・レンズを演じてないと、不安で不安で仕方なかった。誰かに必要とされたかった。私って、空っぽだったんだよ」

正直、ジャンには彼女の不安は理解できなかった。

なぜなら、不特定多数に好かれないと思ったことなど人生で一度もなかったからだ。

嫌いな奴もいれば、好きな奴もいる。

それが人間として当たり前だし、誰からも好かれるなんて不可能

だ。

第一、偽った自分で好かれたって意味がない。

偽物の関係。

破綻は目に見えている。

けれど、少しだけヒストリアに共感できる部分もあった。

嫌われるのは別にいいが、ダサイ奴だと馬鹿にされるのは嫌いだ。

そういう意味では、彼女と同様、ジャンも他人の目を気にしてるんだらう。

二体目の巨人型模型を発見する。

先ほどと同じようにそいつを片付け、ゴール地点へ向かった。

討伐数で点数を稼げない以上、高得点を狙うにはタイムを縮めるしかない。

自然、皆のスピードは上がっていく。

ぐんぐん進んでいくアニとサシャ。

さすが成績上位組だけあって、スピードを上げるためのガスの吹き方も体重移動もなかなかのものだ。

それに比べて、クリスタはどうにも危なっかしい。

彼女も成績上位ではあるが、立体機動のレベルは訓練兵として及第点。

いくら霧が出てるからって、アンカーを刺す場所も悪いし、何より判断が遅い。

これでは実戦で、巨人から逃げきれないだらう。

問題なのは、クリスタだけじゃない。

調査兵団として実戦経験を経たジャンから見ると、同期の訓練兵はレベルが低すぎる。

超大型巨人の二回目の襲撃の際、多くの同期が巨人に喰われたのもこれが原因だらう。

最低でも、巨人から逃げ切れるレベルにはなってもらわねーと。

俺がタイムリープしたことで、変わる未来もある。

運が悪けりゃ、クリスタも何かの拍子で巨人に喰われるかもしれねえ。

クリスタの後ろ姿を観察しながら、ジャンはそう考えていた。その時、向かい風の突風が吹いた。

突き飛ばされるみたい押し戻される身体。

四人の体勢が大きく崩れる。

鋼鉄製のワイヤーがギョルギョル悲鳴をあげた。

急に霧が立ち込め、目の前にあるクリスタの姿が白いモヤに消える。

両腕で顔を庇いながら、ジャンは声を張り上げた。

「いったん止まれ！ 近くの枝に——」

「きゃあああ！」

クリスタの悲鳴がジャンの声をかき消した。

反射的に声の方に目を向ける。

深い霧の切れ目から小さな身体が落ちていくのが見えた。

「クリスタ!?」

サシヤが叫んだ。

ジャンの視界の端で、青ざめて振り返るアニとワイヤーの射出装置をクリスタに向けるサシヤ。

「ダメだ。アニは遠すぎる。」

サシヤは霧のせいで、狙いをつけられないようだ。

悔しそうにサシヤは顔を歪めた。

ジャンは逡巡する。

どうする。

サシヤの射撃の腕は並みじゃない。

一か八か。

いや、ダメだ。

万が一、当たりどころが悪ければクリスタが死ぬ！

そうなれば取り返しがつかねエ！

未来が変わっちゃう！

「やめろ！ 俺が行く！」

そう怒鳴ると同時に、ジャンはクリスタを追って木肌を蹴った。驚愕に満ちたサシヤの悲鳴が聞こえる。

ジャンは霧が目には張り付いてくるのも構わず、両眼を大きく開いてクリスタの姿を探した。

クソ！

霧が深くて何も見えねエ！

記憶を頼りに、片方のワイヤーを地面付近の木に射出する。

確かなアンカーの手応え。

手元のレバーを押して、ワイヤーを一気に巻き取る。

数倍速で地面に近づく肉体。

死の予感にギリギリと心臓が軋んだ。

にわかに霧を抜けると同時に、ジャンの瞳が金髪の少女を捕らえた。

瞬時にアンカーを前方上部に射出。一気にガスを噴出する。

無理やり背を押された振り子ののように、ジャンは突進した。

目の前でクリスタが急降下していく。

もう地面が近い。

間に合うか!?!?

「クリスター」

喉が裂けるほど怒鳴ると、のろのろとクリスタはこちらを向いた。

その瞳は虚だ。

頭にカツと血が昇り、ジャンは夢中で怒鳴った。

「バカヤロー！ 手伸ばせ！」

まるで夢から覚めたようにクリスタはハツとすると、戸惑いながらも両腕をジャンに向けて伸ばした。

すんでのところで彼女の細い腕を掴み、胸に引き寄せる。

ぐんぐん迫る地面。

両腕でクリスタを抱え直して、アンカーを抜いた。

受け身を取りながら二人は地面をゴロゴロ転がり、そのまま藪に突っ込んだ。

衝撃に、一瞬意識が飛びかける。

「クツ……いつてえーな」

ジャンが呻き声をあげた。

「クリスタ！ ジャン！ 無事ですか!?？」

いつのまに降りてきたのか、血相を変えてサシヤが駆け寄る。

アニは言葉を失ったように真つ青な顔でこちらを見つめていた。

二人の顔を見た途端、緊張の糸が緩む。

ジャンはため息混じりに「まあな」と返して片手をあげて見せると、

二人の顔もほっと緩んだ。

腕の中で、クリスタが小さく身動きをする。

「あれ、私……」

「生きてるぜ。残念ながらな」

「え？ あ……ジャン！ 血が！」

彼女は慌てて身体を離し、枝葉に擦られてあちこち傷だらけのジャン

を見ると、大きな瞳を潤ませた。

「たいしたことねーよ。怪我してんのはお前もだろ」

「でも！ ごめんなさい！ 私のせいで——ッ！」

「後で聞いてやるからちよっと黙ってる」

自分でも思ったより冷たい声色だった。

クリスタの肩がビクリと震える。

それに気付かないフリをして、彼女を助け起こし、ジャンもむくり

と起き上がった。

「サシヤ、アニ。先に行け。二人だけなら制限時間内に到着できる。

班員が欠けてるから減点されちまうが、0点よりはマシだろ。俺はク

リスタの怪我を見てから行く」

「でも——」

「今朝のエレンとのやりとり聞いてたろ？ 俺は本当に成績とかどー

でもいいんだ。気にすんな」

なおも食い下がろうとするサシヤの肩に手を置いて、アニが「わ

かった。行くよ、サシヤ」と促した。

サシヤは心配そうに何度も振り返りながらもアニの後をついて

行った。

## 六話

二人の背中を見送ってから、クリスタに向き直る。

叱られるのを怯える子供みたいに、彼女は俯いていた。

なんだか弱いものいじめでもしている気分だ。

ジャンは、ぶつけどころのない苛立ちを溜息と共に深く深く吐き出して、しゃがみ込む。

「足見せろ」

「え……う？」

クリスタは戸惑った声を漏らす。

不安そうに揺れる青い瞳。

その瞳を見上げて、ジャンはもう一度言う。

「怪我の具合を見せてくれ」

「あ、そっか！ えっと……」

あわあわと言葉に詰まる彼女を待たず、細い足首を軽く握る。

急に触れられて驚いたのか、クリスタの身体が固まる。

「痛むか？」

「だ、大丈夫……だと思う」

触った感じ、腫れもない。

目立った外傷はねーな。

「他に痛むところは？」

「えっと……特にはない、かな」

そう言つて、クリスタは気まずそうに前髪を整え、視線を地面に固定する。

彼女の小さな手が所在なく、蜂蜜色の金髪をなぞる。

そこに何か見えた気がして、ジャンは立ち上がると彼女の手を取つた。

「へ？？？ あのだうしたのかな？？」

驚くクリスタを無視して、無理やり彼女の右手を引き寄せる。

その手の平は、痛々しく裂けていた。

親指の付け根から、横に一直線の切り傷。

傷口からは、少量ではあるものの血が溢れている。

「この傷は？」

「あ……その、地面に降りるときにブレードの刃が当たったみたいで……でも！ 本当にそんなに痛くないの！ 全然大丈夫だから——」  
「大丈夫かどうか、判断するのはお前じゃねエ。俺だろ」

苛立ちを隠さずに言うのと、クリスタは消え入りそうな声で「ごめんなさい」と呟いた。

彼女の手には、ジャンは素早く包帯を巻く。

問題なくブレードを握れるか確認してから、やっと安堵の溜息を吐いた。

それにしてもさっきのはかなりヤバかった。

一歩間違えれば俺もクリスタも死んでいた。

巨人や壁外人類との攻防で死ぬことは覚悟していたが、こんな一訓練いちくんれんで死にそうになるなんて想定外だ。

訓練中の事故——過去にこんな事故はなかった。

タイムリープの影響が早くも出ていると考えていいだろう。

未来を変えようとする俺への警告か？

わからねえ。

が、ビビって引き下がるわけにやいかねーぞ。

「何があった？ 突然落ちたように見えたが」

「突風が来たとき、片方のワイヤーを射出したところだったの。それが風に弾かれちゃって……。もともと刺してた一本のワイヤーだけでぶら下がる形になったんだけど……」

「アンカーが外れたのか」

こくりと、クリスタが頷く。

事故だ。

前回と同じように訓練をなぞったつもりだったが、それでも多少の誤差はある。

おそらく突風に吹かれるタイミングがズレたんだ。

それで、クリスタが落ちた。

「お前はアンカーを刺す場所がわりーんだよ。とにかく到着地点へ向

かうぞ。立体機動装置は無事だろうか？」

そうクリスタに指示を出しながら、自分の立体機動装置をガチャガチャといじる。

「え……あの……それだけ？」

機嫌を伺うように、おどおどした口調で彼女は言った。

「何だよ。他に報告でもあるのか？」

「ううん……そうじゃないけど……。あの、怒って……ないの？」

怒ってるに決まってるんだろ！ と、喉まで出かかった言葉を何とか飲み込む。

アンカーが外れたからって手がないわけじゃない。

すぐにワイヤーを巻き取れば、自力でどうにかできたかもしれない。

だが、クリスタはそうしなかった。

あのまま死ぬ気だったんだ。

もともと自殺願望があったことはヒストリアから聞いていた。

けど、どうしても俺にはわからねえ。

クソみてえなヤツらに認めてもらうことがそんなに大事か？

こればかりは、他人が口を出したって——ましてや俺が言っても意味がない。

自分で気付いて、もがきながら考えて乗り越えるしかない。

あのヒストリアのように。

だが、仲間として、彼女の苦しみに気付けなかった自分を恥じた。

恥じることしかできなかった。

「怒ってほしいのかよ」

「だって私が悪いから！ 私のせいでジャンまで大怪我——ううん、死ぬかもしれないなかったんだよ!?? ごめんなさい。本当にごめんなさい……」

こいつは、今まで何度謝ってきたんだろう。

想像もつかない。

「クリスタ。顔上げろ」

そう言うと、彼女は大きな瞳を潤ませて、上目遣いにジャンを見上



げる。

「いいか？ あー、もうめんどくせーから、正直に言うのだな。俺はお前にかけるべき言葉が見つからねえ。何かガツンと言うべきだとも思うんだが……それは俺にはできねーんだ」

ジャンはクリスタの事情を知っている。

知っていれば、それっぽい説教もできるだろう。

しかし、未来で知ったことを持ち出すのはフェアじゃないと、ジャンは感じていた。

クリスタにどうこう言う資格があるのは、ちゃんと彼女に向き合ってきた奴だけだ。

ガシガシと頭をかいて、しばらく言葉を探して、探してから、ジャンは言う。

「だから、お前は二度と俺に謝るな」

「……え？」

「今後一生、俺に謝るなって言っただ。下手したてに出るの禁止。かすり傷ぐらいで無駄に氣遣ったり、申し訳ないとか、そういうめんどくせーのは全部禁止だ」

「め、めんどくさいって……」

「めんどくせーよ。俺は、俺のために、俺の判断でお前を助けただけだ！ 俺の行動は、全部自分のためだ！ みくびんなよ。俺は104期きいち一の自己中野郎だぞ」

長い睫毛をはたはたさせているクリスタを鼻で笑って、

「だいたいお前に謝られたところで、俺には何の得もねーだろ。辛気くせえ面見せられるだけ迷惑だぜ」

「なっ！ そんな言い方しなくても——ッ！」

「なんだよ。天使もたまには怒るのか？ あれーおっかしいな。俺は命の恩人様のはずなんだが」

言い返す言葉が思いつかないのか、クリスタは真っ赤な顔で口をぱくぱくさせている。

結構おもしろい顔だ。

「よし。じゃー、話は終わりだな。行くぞ」

まとまった、とばかりにジャンが立体機動装置に手をかける。  
ワイヤーを射出しようとしたところで、クリスタが慌てて彼の腕に抱きつく。

「バツ——バカか！ 危ねえーだろー！」

「ご、ごめんなさ……じゃなくってえつと……そう！ お礼ならいいでしょ!?? 助けてもらったらお礼をするのは当然だもん！」

いい子ぶりっこは、得意げに言う。

「謝るっていうのは……ジャンが嫌なら、やめる。私の謝りたい気持ちには、自己満足になっちゃうもんね。そのかわり！ ジャンも私に謝るの禁止ね！ それなら平等でいいでしょ？」

いや、何が平等だよ。

さっぱり意味がわからん。

してやったり、とニツコリ笑う面倒な天使。

ジャンは適当に受け流そうとして、

「あー、わかったわかった。それでいいから……」

「お礼するから何でも言ってるね！ 私にできることなら何でもするから！」

ピタリ。

ジャンの動きが止まる。

クリスタは可愛らしく小首を傾げて、

「ジャン？ どうかしたの？」

「今、なんでもって言ったか？」

「うん。言ったよ？」

ジャンがクリスタの両肩を掴む。

いやらしい笑みを浮かべた悪人面をぐうーっと近付ける。

「え？ え？ あの、私——」

「言ったよな？ なんでもってなんでもだよな？」

奴隷商に捕まった幼気な少女のように、クリスタは涙目で頷いた。

\*\*\*

訓練兵が抱えるストレスは膨大だ。

教官に怒鳴られながら、肉体をいじめ抜くきつい訓練。

芋、パン、スープ——美味くもない最低限の食事。

卒業後の進路に関わる成績へのプレッシャー。

それらの鬱憤は、溜まって腐り、なかなか消化されない。

娯楽が少なすぎるのだ。

うまくストレスを解消できる者がいる一方で、どうしても腹の虫が治らない者もいる。

そういう奴らは、大方にして攻撃的で、下世話な嗜好きだ。

厳しい訓練の後、味気ない夕食を終えると、ようやく訓練兵は自由時間を与えられる。

食堂の一角にのさばる集団。

絵柄付きのカードを七枚ずつ配布して、残ったカードは裏にして山を作り机の中央に置く。

昔から遊び尽くしているカードゲームだ。

特に盛り上がることもなく、机の上には黙々とカードが散らばっていく。

一人の男が口を開く。

「なあ、知ってるか。勘違い馬面野郎の話だ。クリスタとデキてるらしいぞ」

「は？ 何かの間違いだろ」

「それがマジなんだよ。目撃者が何人もいるんだ。なんでも一週間ほど前から、訓練が終わると二人で森に消えていくらしーぜえ」

うおおおおお！ と、天使の名前に歓声上がる。

「マジかよ！ なんであんなクソ野郎と!?!」

「ほら、最近エレンとやり合ってたろ。俺は調査兵団に入る！とか急にイキり出したやつ。どーせ成績上位にいるのがキツくなっただけだろ。俺は才能あるとか吠えてたくせにダッセーなあ」

「それで憲兵団は諦めて女漁りか？ いやー、さすが自分に正直な男

は違うな！」

「クリスタは馬術が得意だからな。馬面野郎に乗っかつてるんじやねーの!?？」

「ギャハハハハハ！ マジかよすっげー見てえわ！ 今から覗きに行くか!?？」

その瞬間。

彼らが占拠していた机が、ガン！と凄まじい音を立てた。

場に出されていた綺麗な絵柄のカードが、ブーツに踏みにじられる。

そこから伸びる細く長い足。

一瞬にして静まり返った男たちに、彼女は言う。

「今、なんつった？」

鋭い眼光に気圧され、男は怯む。

「な、なんだよブス。自分がモテないからって嫉妬か？」

「失恋で傷心してるんだろ？ 愛しのクリスタちゃんが馬に乗り換えちまったからなあ」

ギリギリのところを持ち堪えていた理性が、脳内でブチギレる音がした。

ニヤついた男の口にブーツの先端を突っ込もうと、彼女は腰を捻り勢いをつけて、カードを蹴散らす。

ヒュンと空気を裂いてまっすぐに進んだその先端が、男の顔に埋まる直前に受け止められる。

「そこまでだ。これ以上問題を起こすようなら、教官に報告させてもらうよ。開拓地送りになるのと、独房にぶち込まれるのとどっちがいんだい？」

「……チツ。行こーぜ」

マルコの顔を見た途端、分が悪いと踏んだのか、男たちはしぶしぶ退散していった。

「ご利益がありそうな穏やかな面のわりに、場を掌握するのが上手い男だ。」

「……もういいだろ。離せ」

「ああ、そうだったね。ごめん  
なぜ謝るのか。」

眉を八の字にさせて、照れたようにマルコは足を解放する。  
ぶつけ損なった鬱憤を、ユミルは仕方なしに治めようとして、はみ  
出た分をでつかいたため息に変えた。

手近のイスにどかりと座り、行儀悪く大股びらきに足を投げ出す。  
ったく、こいつさえ来なけりやボコボコにしてやったのに。

邪魔しやがって。

散らばったカードを律儀に拾い集めるマルコの背中を、ユミルは睨  
みつける。

彼は背を向けたまま、

「君の気持ちはわかるけど、自分のせいでケンカしたなんて知ったら、  
辛いのはクリスタだと思うよ」

相変わらず人の嫌なところを突いてくる。

一見、人畜無害そうなくせに余計たちが悪い。

ユミルは眉間にシワを寄せる。

「お前はどうかなんだよ。親友の馬面くんも、かなり評判悪いじゃねー  
か」

「ハハハ！ あいつが嫌われるのは、いつものことだからね。今さら  
なんとも思わないよ。本人が気にしてれば庇ってやる気も起きるん  
だけど。昔、同じようなことがあってさ。僕が怒ったら『お前は関係  
ねーのに何怒ってんだ？』って言われたからな。庇い甲斐のない奴だ  
よ」

そう言つて、マルコはふかふか笑う。

ジャンらしい無神経さに、ユミルは不覚にも喉をくつくつ鳴らし  
た。

「最近のジャンは、妙に落ち着いてるんだ。何か隠し事もあるみたい  
だし。手が焼ける親友が一人立ちしていくみたいで、僕はちよつとき  
びしいかな」

「なんだよそれ。気持ちわりー」

「厳しいなあ。なんでだろうね。こういう時って女の子同士だと綺麗

に思うのに、男同士だと気持ち悪いよね」

「……さーな。顔の問題だろ」

ユミルはそつぽを向いて、

「お前ってそんな感じだっけ？ 今日はやけにお喋りだな」

嫌なら立ち去ればいいのに、なんとなく腰を上げるタイミングを失った。

そんな自分にイラつきながら、らしくもなく、ユミルは会話を振る。

マルコは少し驚いたように、けれど、すぐに人の良い笑みを浮かべた。

「君は嫌がると思うけど——ユミルって、少しジャンと似てるんだよね。だから喋りやすいのかな？」

「……お前って、ホント嫌な奴だな」

ユミルの耳に、昨晚のクリスタの声が蘇る。

『ジャンって、ちよつとだけユミルに似てるの』

彼女は、そう言ってクスクス笑っていた。

よく女好きだと言われるが、クリスタのことを恋愛対象として見たことはない。

ただ、たまに思うだけだ。

もし私が男だったら、もつとクリスタと深い付き合いになれたんだろうか。

私が女だから、クリスタと一緒にいけない時が来るんだろうか。

私が女だから、あいつの一番にはなれないのか。

## 七話

ぼかぼかした陽気に包まれて、どいつもこいつも眠そうな面をぶら下げている。

無理もない。

昼飯明けに、この温かさだ。

腹が満たされれば眠くなるのは、人間の本能だろう。

対人格闘の訓練は点数も低い上に、教官の見回りも少ない。

一部の真面目バカと本物のバカを除き、厳しい訓練の格好のサボリ場として、絶大な人気を誇る時間だ。

しかし、本来なら筆頭のサボリ魔が一名。

鼻息荒く、睨みつけてくるのが意外だった。

「なあ、ユミルがすげー目でお前のこと睨んでるぞ。何やったんだよ」

「このあいだ、ちよつと色々あってね。嫌なやつって言われたよ」

そばかすの浮いた頬をほりほりかいて、マルコが言う。

ジャンは目を丸くして、しかし、すぐに煽るようにニヤついた。

「お前が？ めずらしいこともあるもんだな。どうよ、人に嫌われる気分は？」

「多少落ち着かないかな。けど、ユミルが今一番嫌いなのは断トツでお前らしいからさ」

「それ本人に言う必要がある？」

その時。

二人一組になつて、木製のナイフを奪い取るフリをしている訓練兵の合間を、低い頭が通るのが見えた。

「悪い。ちよつとサボる」

マルコに声をかけると、ジャンはその後を追う。

気を抜くとすぐに見失つてしまいそうになるのは、彼女の背が低いせいか、それともマールレ仕込みのスニーキングスキルのせいだろうか。

勝負どころだ。

ここで一発、強烈な印象を与えなければならぬ。

深呼吸をして、心を落ち着かせる。

——よし、行くか。

ジャンはアニの前に立ち塞がると、木製のナイフを放り投げた。彼女は反射的に、それを受け取る。

ブロンドの隙間から覗く氷のような瞳が、こちらを睨みつける。

「よお。暇だろ？」

「アンタの相手をするほど暇じゃないよ」

そう言つて、投げ返されるナイフ。

それを受け取ると同時に、ジャンは地面を蹴り上げ、瞬時にアニの懐に入る。

日々の訓練で薄汚れた木の刃が、彼女の胸を抉ろうとした刹那——寸前で、アニは半身になって躲した。

ナイフが空を切る。

すれ違い様に、ジャンは強烈な膝蹴りを腹に叩き込まれるが、それをなんとかガードする。

素早くナイフを逆手に持ち直して、アニの顔面に向けて振り下ろした。

至近距離で迫る切っ先に顔色ひとつ変えず、彼女は容赦ない攻撃を首を傾けて躲し、ジャンの腕を掴む。

押し切ろうとするナイフと、力点をズラして持ち堪える細腕。

ギリギリする攻防。

二人の視線が衝突する。

「いきなり襲いかかるなんて、マナーがなってないんじゃないのッ！」突然、手応えが消えた。

流れるような動きで、アニは身を翻す。

支えを失つて、ジャンの体勢が大きく崩れた。

クツ——これはヤバイ！

焦るジャンの頭を狙つて、ブオンと効果音付きのハイキックが放たれる。

前傾に崩れた重心を活かし、すんでのところで伏せる。

逃げ遅れた髪が、彼女の足先に擦れてチツと摩擦音が鳴った。



ひよつとしたらアニの舌打ちかもしれないが、確認する余裕はない。

一度立て直そうと、バックステップで距離を取ろうとするが、アニはそれを許さない。

速い。

一瞬で、ジャンの懐に入り込み、バネのある拳が彼の心臓を狙う。

その攻撃を半身になって避けると、既視感に襲われた。

これは——さっきの俺の攻撃のトレースか!?!?

なめやがって!

憤るが、アニの攻めに体勢は完全に崩されている。

避けられねエ!

今度こそ、ジャンの頭部を、強烈なハイキックが襲う。

ジャンは足を踏ん張り、腹にたらふく力を込め、腕を高くあげてガードを作る。

鋭い蹴りが、彼の腕に突き刺さった。

衝撃がビリビリと骨に響く。

「——ッ重てえな。未恐ろしいぜ」

正直言つて、めちやくちや痛<sup>いて</sup>え。

けど、受け止めた。

痩せ我慢でニヤリと笑ってみせると、アニは少し驚いて、感心したように「へえ」と呟いた。

ガードごと吹き飛ばす自信があったのだろう。

よっしゃ!

今のはかなりポイント高<sup>たけ</sup>えだろ!

狙い通りの反応に、内心ガッツポーズをする。

恋のキューピッド計画——先日、やっと解決の糸口を見つけた。

ライナーの方はなんとかなりそうだし、ベルトルトについては未計画だが、奴はライナーの腰巾着<sup>こしぎんちやく</sup>だ。

相方が崩れれば、いずれ突破口も開けるだろう。

しかし、アニは難しい。

彼女は普段から誰とも話そうとせず、孤立気味。

壁内人類を攻撃する罪悪感から、人と距離を置いてるんだろう。となると、間接的な干渉は厳しい——アニだけは、直接の接近が必要だとジャンは判断した。

問題は、どうやって彼女と親しくなるか……そこで思い出した。エレンによると、アニは対人格闘の時だけは生き生きとして、楽しそうだったと。

つまり、こいつとの対話は拳にかぎる！

こういう格闘技バカは、強い奴には一目置くはずだ。

俺の実力を見せつけければ、好感度もうなぎ上り——そこから一気に距離を詰めてやるぜ！

ジャンは勇み立つ。

ガードしたとはいえ、一撃ももらったところだ。

防戦一方の展開も、そろそろ癪に障る。

四年前なら手も足も出なかったが、実戦経験を積んだ俺は昔とは違うぜ。

反撃に出ようと、ジャンはすり足で移動しながら間合いを計る。

アニも独特のファイティングポーズを取る。

彼女も本気だ。

アニの格闘術は、相手の力を利用するカウンター技が基本だが、さてどうするか……。

真剣勝負に脳をフル回転させる。

ますます空気が張り詰め、互いの忍ぶような呼吸が聞こえ、次の一呼吸で飛び出そうと、ジャンが決めた時だった。

視界の隅に、光の粒子が現れた。

注視しなくても正体はわかつている。

ミカサだ。

俺はバカか！

色ボケしてる場合かよ、集中しねーと！

ジャンは奥歯をギリギリと噛み締めて、一層キツくアニを睨みつける。

しかし、恋というのは厄介なやつで、一度存在を意識してしまうと

なかなか離れることができない。

まるでミカサの体から光でも溢れてるように、視界の片隅がパツと明るい。

どんな状況でも、ミカサを見つけられるという馬鹿げた特技は、案外戦場でも役立つていた。

戦場でのジャンの仕事は、二つある。

現場の指揮とミカサのフォローだ。

リヴァイ兵長に次ぐ存在の彼女は、役割を与えて縛るよりも、単独で動いてもらった方が何かと都合が良い。

エレンが絡むと暴走しがちな彼女の手綱を引くのは、明言されたわけでもなかったが、自然とジャンの役割になっていた。

頭が切れて、調査兵団の中でも古株で、なおかつ立体機動の技術面から見ても、ミカサについて行けるのはジャンぐらいだったからだろう。

混戦の中、いち早く彼女の姿を見つけ、状況を把握するには、ジャンの特技が大いに役立った。

戦場という舞台で、たった一人を照らし続けるスポットライト。

そのおかげで、ミカサを危機から救ったことも何度かある。

いつしか彼女の影のパートナーにでもなった気がして、命がいくつあっても足りないとかヒヤヒヤする一方、自尊心を満たされてもいた。

ミカサには俺がいないとダメなんだ、なんて独りよがり。

だいたい「影の」なんて自分で付けている時点で、負けを認めているのと同じだ。

無表情ながらも熱心に、ミカサがエレンに話しかけている。

大方、「格闘技なら私が教える」などと言って、断られているんだろう。

そんなことに心がざわつくのも、我ながら鬱陶しい。

なんとか集中しようと思間に力を込めて、アニに瞳を据える。

と、ふいに彼女の視線が薄らいだ気がした。

睨み合っているのに、なんとなく目が合わないような……。

なんだ？

視線誘導——フェイクか。

一瞬、アニの動きに警戒するが、その瞳に見覚えがあることに気付く。

こいつ、何か見てる？

何を——

アニの視線の先を探ろうとして、目玉を動かしたのが悪かった。隙ができたんだろう。

「あ」と、思った時には遅い。

目の前に瞬間移動したアニが、ジャンの手首を握り、顎を掌で押し上げる。

ふくらはぎを蹴り上げると、軽々とジャンの体が浮いた。

カエルが潰れたような声を出して、オムツの換えを待つ赤子のような間抜けなポーズで、ジャンは地面に落ちる。

「終わりだね」

アニは冷ややかな声で言うと、奪い取った木製のナイフを放り投げた。

「ちよつと待て。……今のはノーカンだ」

腰がやられて、すぐには動けない。

例の情けないポーズのまま言う。

「アンタ、今死ぬほどダサいけど。自覚ある？」

「ダサくねーだろ！ 途中までカツコよかったろ！ いい線行つてたろ絶対！」

アニは皮肉めいた口調で、

「どうでもいい。最近やたらとやる気みたいだけど、私を巻き込まないでくれる？ 迷惑だから」

！  
くツ……この女、こつちが下手に出てりやーいい気になりやがつて

なんとか立ち上がり、怒りを抑えて言う。

「頼む！ もう一戦だけ！ もう一戦して負けたら諦めるから！」

「悪いけど。先約がいるんだよ。もう一人面倒なのがね」

アニの視線がズレる。

視線の先では、エレンが瞬ぎもせず、こちらを見つめていた。彼の後ろで、ミカサが霸王のオーラを放って、アニを睨み付けている。

「わかった？ アンタが本当にカッコいい男なら、これ以上か弱い女の子に負担をかけるようなマネはしないとと思うけど」

そう言って返事も待たず、アニはエレンの元へ向かう。

その後ろ姿に、ジャンは言いようのない突き上げる衝動を感じた。

「待てよ！ じゃあ、次の休み！ どっか行かねーか!?? 二人で！」  
ほとんど無意識に、口を開いていた。

立ち止まったアニが、唾然として振り返る。

アニのこんな顔、めずらしい……じゃねーよ！

何言ってるんだ俺は!??

じゃあって何だよ!??

じゃあの意味がまったくわかんねーよ馬鹿か!??

自分のセリフに、アニ以上に驚いて、ジャンは取り乱す。

「いや、ちがう——ことはねーけど！ 深い意味はなくてだなア！

なんつーか純粹に、そう！ 純粹な意味で親睦を深めようという一つの提案として——」

「いよよ」

「……は？」

「いいよって言ったんだよ。乙女に何度も同じこと言わせないでくれる？」

全然良くなさそうなかめ面で言うと、アニはさっさとエレンのところにへ行ってしまった。

彼女の背を見送って、想定外の飛躍的進歩に、ジャンは呆然と立ち尽くした。

## 八話

クリスタは、緊張した面持ちでブレードの柄を握りしめ、始まりの時を待っていた。

立体機動装置が、いつもよりずしりと重く感じる。

慣れ親しんだ訓練場の森の入口もどこかよそよそしく、飲み込まれてしまいそうだ。

彼女は立っているのを確かめるように、地面を踏みしめる。

金髪碧眼の美少女。

クリスタ・レンズ。

みんなから好かれて、誰にでも優しく、真面目で、いい子で、成績優秀だけど、立体機動は少し苦手だった。

兵士として最も重要な科目が、なぜ苦手なのか——単純な理由を言うなら、怖かったからだ。

他の科目と違って、立体機動は他者を巻き込む事故が多い。

それも即死亡に繋がる重大な事故だ。

もしも他の人とワイヤーが絡んだら、空中で衝突したら、振りかざしたブレードが当たったら——。

恐ろしいもしもが心臓に絡まって、自然と体が縮こまってしまう。

でも、怖がるのは終わりにしなきゃ。

一生懸命教えてもらったんだもん。

結果を出さないと——！

唇を強張らせて、クリスタは空を見上げる。

彼女の思いとは裏腹に、からりと晴れ渡り、数匹の鳥が遊ぶように飛んでいく呑気な空。

その空と木々の境目を、瞳が乾くほど凝視する。

打ちあがる信煙弾を1ミリでも早く視界に入れようと、自然と背筋が伸びる。

そして、開始の合図を告げる信煙弾が空に上がった。

訓練用にカスタマイズされた森は、時折巨人型模型を抱いている以外は、同じような景色だ。

行手を遮って伸びる枝葉。

無数のアンカーの跡が刻まれた木肌を晒す大木が、ひっきりなしに目の前に現れる。

飛んでも、飛んでも、ちつとも進んでいない気がして、クリスタは焦っていた。

立体機動長距離飛。

約10kmの森を、立体機動で飛ぶ時間を競うという、実にシンプルな試験内容だ。

その分、実力差が出やすい。

タイムを縮めるためには、ギリギリでガスを使い切る計算や立体機動の技術が必要になる。

落ち着いて！

大丈夫、いつも通りやれば——あんなに練習したんだから！  
歯を食いしばってワイヤーを巻き取る。

焦れば焦るほど、前のめりになってどんどんリズムが狂っていくのが、自分でもわかる。

わかるのに、直せない。

直せないからまた混乱して、体が強張って——

『くだらねえ。本当に怖いことは、何の成果も出せず、仲間を死なせることだ』

脳内で、ジャンの声が響いた。

それは、クリスタの悩み——立体機動への恐怖心を聞いた時、開口一番、彼が言い放った言葉だった。

『最悪なことばかりを想定するから、最善を見抜けねえ。だから判断が遅い。ビビってる暇があるなら、最善を尽くすことに頭を回せ』

わかってるよ。

でも、最善って……そんなの私には見つけられない！

目の前に現れる枝を、ブレードで立ち切って無理やり進む。

『肩の力を抜け。もっと視野を広げろ。最短ルートを探すんだ！』

巻き取ったワイヤーを、再び射出。

無事にアンカーが刺さったところを見届ける。

『視線の置き場がちげーんだよ！ アンカーが刺さったかどうかなんていちいち確認すんな！ すぐに次の射出場所を考えろ！』  
そうだ。

ジャンに言われたんだった。

視線は常に前方へ。

最短ルートを探して、複雑なところは細かく、開けたところは大胆に、アンカーを刺す！

待ち構えていたように、枝葉が入り組んだ木の壁が前方を塞ぐ。

一呼吸浅く吸って、止めて、思い切って体を平行に——空中でスライディングをするみたいに、壁の直下をすり抜ける。

『ガスを吹かすタイミングが違う！ 何度も同じこと言わせんな！』  
そう！

このタイミングで少しガスを吹かせて、腰を捻って少し巻き取って、アンカーを引いて、体勢を立て直す時は——

『体の軸ブラすなよ！ 腹に力入れろ！』

クリスタは形の良い唇をきゅつと引き結ぶ。

瞳の色は濃く、その光は徐々に輝きを増していく。

どんだんスピードに乗っていくのがわかる。

顔にぶつかる風の圧も、耳元で鳴る風の音も、ぜんぜん違う。

こんな感覚は、はじめてだ。

『よし、いいぞ』

ジャンの声が、穏やかに言う。

『最後に、立体機動で一番大事なことを教えてやる』

彼はふつと息だけで笑って、

『イメージするんだ。今やるべきことを考え、最善を見つけ、それを完璧にこなす自分の姿を。だから、お前もカツコつけて飛べよ、クリスタ』

導かれるように、行手にぽつぽつと木漏れ日が光る。

そして、一番奥の方に眩い光の塊。

クリスタは、その光の塊に向かって、飛び込むように小さな身体を空へ投げ出した。



余計な力の抜けた、怯えのない空中姿勢。かわいい天使から、美しい女神への転身。

彼女の背に、真つ白な翼が生える。

キース教官が待つゴール地点へ、クリスタは砂埃を上げて着地した。

「クリスタ・レンズ——5分55秒！」

教官の大声が響くと、固唾を飲んで見守っていた同期の女子がワツと沸く。

「すごいですよ！ 6分切るなんて！」

「さすが私のクリスタだ！ やるじゃねえか！」

「わわ！ やめてよユミル！」

駆け寄ってきたユミルとサシヤに、クリスタはすっぽり抱きしめられる。

ユミルに乱暴に頭をなでられて、ぐしゃぐしゃになった髪のまま、クリスタは嬉しさがこぼれるようにあどけなく笑う。

と、きよろきよろあたりを見回して、お目当の人物を見つけると、小さくピースサインを送った。

\*\*\*

同期一の美少女が、自分だけに合図を送るといふのは悪くない。

というか、かなりの優越感だ。

好成績がよほど嬉しかったのだろう。

ピースサインに片手を上げて応えると、クリスタはますます嬉しそうに笑った。

……なんか今の俺、めちやくちやカースト上位だな。

「おいおい。どういうことだ？ 俺の目が悪くなけりや、天使が馬に微笑みかけているように見えるんだがな！」

逞しい腕が、ジャンの首を拘束して締め上げる。

その腕をタップして、ジャンが叫んだ。

「いつてーな！ マジで締まってんだよ！ 放せよ、ライナー！」

「いいや、放すわけにいかねーな。お前とクリスタが、一体どういう関係か白状するまではな！」

「何にもねーっつの！」

「ほう。モテ男気取りとはいい度胸だ」

ライナーはチョークスリーパーを決めたまま、のけぞる。

ジャンの体重で上手いことバランスを取って、ほぼ90度に曲がっているところが素晴らしい。

感心した様子のコニーが、プロレスの解説者のようにマイクを向けるジェスチャーをする。

「おおっ！ 良い技決まってんな。さすがライナーだぜ！ ちなみ

に技名はなんですか？」

「キルシユタイン・クラツシャーだ」

「クーーーーール！」

「ぶっ殺す。今すぐやめねーとぶっ殺す」

酸素不足で真っ赤になったジャンが、ようやく解放される。

この糞ゴリラ！

誰のために俺が苦勞してると思ってたんだ！

別にお前のためじゃねーけど！

痛む喉を抑えて、ジャンが言う。

「本当にクリスタとは何もねーよ。立体機動のレベルがあんまり低すぎるから、練習に付き合ってたただけだ」

「そんなデカい声で言うなよ。睨まれてるぞ」

「そうかよ。自分でも心当たりがあるんなら、まだ救いようがあるぜ」  
実際、クリスタの立体機動の成績は悪くはなかった。

訓練兵としては及第点。

つまり、クリスタ以下の腕前の奴らが、うようよいるということだ。  
一部の同期から胸糞悪い視線を感じて、ジャンは歯噛みする。

俺の嫌味ぐらいでイラついてるんじゃ、話にならねエ。

近いうちに巨人に喰われることも知らねーで、どいつもこいつも腑抜けてやがる。

未来を知っている者と、知らない者の温度差。

過去のジャンがそうであったように、巨人と真つ向から戦う日が来るとは、誰も本気では思っていないのだ。

しかし、このままではライナーたちの説得が失敗に終わった場合、犠牲者が多数出るとは避けられない。

なんとか104期全体の立体機動レベルを底上げしたいが、クリスマス以外の誰が、ジャンの指導についてこれるだろう？

クリスタの場合、命の恩人というアドバンテージを使って、かなりスパルタに立体機動の技術を叩き込んだ。

いくら命の恩人でも、ヘトヘトになった訓練後、同期に上から目線で指図をされて、素直に従える者はそういない。

文句も言わずについてきてくれたのは、彼女の人柄があつてこそだろう。

普通の同期じゃ、途中でキレられるのがオチだ。

俺の技術は、調査兵団で培ったもんだ。

素直に言うことを聞いてりゃー、レベルアップは确实なんだが……。

奴らにしてみれば、ただの同期が偉そうにと反発するに違いねエ。

つーか、俺の好感度が低すぎんだよ！

せめてもう少し人望があれば——！

八方塞がりの事態に、ジャンは密かにため息を吐く。

まあ、それはそれとして……だ。

ちらりと横目で見ると、ライナーは「喜んでるクリスタは格別にかわいいな」と真顔で呟いていた。

ライナーに関しては、今晚にでも第一の手を打つ予定だ。

が、せっかく来た流れ……ちよつと踏み込んでみるか。

ジャンは慎重に言葉を選んで、ライナーに言う。

「そんなにクリスタが好きなら、デートでも誘ってみりゃいいじゃねーか」

「いや、今はそういう空気じゃないだろう」

「そうだぞー、ジャン。それぐらいバカな俺でもわかるぜ」

「どういう意味だよ?」

ジャンはライナーに尋ねる。

「周りを見てみるよ。訓練兵も今年で終わりだ。もうすぐ三年間の結果が出る。いわば追い込みの時期ってやつだな。呑気に恋愛できる雰囲気じゃないだろう」

「最近すげーピリピリしてるもんなあ」

コニーが相槌を打ち、ライナーが頬を染めて続ける。

「まあな。もう少し良い空気があれば、俺だってなあ……」

思春期の頃。

思考を左右するのは、何よりも周囲の環境だ。

みんなが持っているモノはとりあえず欲しくなり、流行っている言葉は使いたがり、カッコいい斬撃姿勢があれば無意味にくるくる回ったりする。

そして、恋愛もまた然り。

友達に彼女ができれば羨ましいが、そうでなければ意外とどうとも思わない。

むしろ恋愛をしない空気の中で、自分だけが浮かれるのはとてつもなく恥ずかしく、「別にあいつのことなんか好きじゃねーし!」と強がるのが定石だ。

恋人など作ろうものなら、どこぞのバカ夫婦のように冷やかされるだろう。

なるほど、環境か……考えたこともなかったぜ。

つーことは?

こいつは恋愛OKな雰囲気がないと何もしねーってことか?

どんだけめんどくせーんだよ繊細ゴリラ!

「ああああクソが!」と、ジャンが崩れ落ちる。

雰囲気ってなんだよ!?!?

恋愛ムード漂うハッピー訓練兵团でも作れってか!?!?

無理だろ! ふざけんな!

俺は、一体何人のキューピッドやりやいいんだよ!

まだ誰のキューピッドにもなれてねーつつのに!

……だが、これはライナーだけの問題じゃねえ。

ベルトルトやア二の今後にも大きな影響を与えるはずだ。

早めに手を打たねーと……。

苛立ち紛れにガシガシと頭をかきむしる。

すると、わざとらしい大声が耳に入ってきた。

「成績上位のジャン・キルシユタインは、余裕があつて羨ましいよなあ。恋バナなんてしちやつてよ」

「成績なんてどうでもいいとか言つてたくせに、今回の試験も二位だろ？ 何のアピールだよ」

いつ開拓地送りになつても不思議じゃない、落ちこぼれ集団。

訓練兵時代、何かと鼻につくジャンを憂き晴らしの対象にして、よく突つかかつてきた面倒な奴らだ。

いつもならスルーしていた安い挑発も、太陽光の似合わない薄暗い顔ぶれを見て、ジャンの頭にふと光が灯る。

「あんな奴ら相手にするなよ。——つて、オイ！」

制止するライナーを無視して、一直線に向かう。

悪人面をニヤつかせて近付くと、嫌な予感がしたのか、奴らが後ずさった。

ジャンは飛びつくように肩を組んで、リーダー格らしい二人を捕まえる。

「何すんだよ！」

「まーまー、今までのことはお互い水に流すつてことで」

「はっ!? 馴れ馴れしいんだよ！ テメーのそういうところが嫌いなんだ！」

「俺の話聞いて！ お前らにとつても、かなり良い話だと思うぜ？」

そもそも正攻法で行こうとするから無理が出るんだ。

運命に逆らう気なら、ちよつとばかしズルい手も使わねーとな。

## 九話

「それでね！ それでね！ すつつつごく気持ち良かったの！ あんな感覚はじめてっていうか、本当に翼が生えて飛んでるんじゃないかな？ ってちよつと本気で思っちゃうくらいでね！」

「大袈裟だろ。立体機動始めて3年目だぜ？ 今更そんな感動すること——」

「あるよっ！ ぜんぜん違うんだよ！？」

クリスタは、前のめりになって言う。

「でも、ジャンはもっと速く飛んでるってことだよ。だから、本当にすつごいなーって改めて思ったし、ジャンのアドバイスがあつたからこそその結果でね！」

「わかった。お前の気持ちはよくわかったから、少し離れてくれ……」  
訓練終了後。

立体機動装置が置かれる第一倉庫は、訓練場の森の入口付近にぽつんと設置されていた。

ジャンは樹木をなんとなしに見上げながら、いつものようにクリスタを待つ。

すると、ジャンの姿を見つけたクリスタが、瞳を輝かせて駆け寄ってきた。

今日の試験の様子を興奮気味に語ってくれた弟子に、もちろん嬉しさを感じてはいたが、整った顔が至近距離に近付いて、ジャンは赤い顔を背ける。

やっと自分の大胆さに気付いたクリスタも、「ごめんなさい！ その、私、ちよつと夢中になっちゃって！」とあわあわ慌てながら、ジャン以上に顔を赤らめて体を離れた。

「いや、問題ねーよ。まあ、上手くいってよかったな」

「えへへ……うん、ありがとう」

彼女は目元の笑みを深くして、

「ジャンもおめでどう。今日の試験、ミカサとほぼ同タイムの二位だ

よね？ みんなびつくりしてたよ！」

「あー、……まあな」

その褒め言葉を、曖昧に笑って誤魔化する。

ずっとあいつの背中を追ってきたからな。

巨人も敵もいねえ直線勝負で離されるわけねーっつか、むしろ訓練兵時代のミカサにも勝てねーとか、わりと自信なくしたぜ。

ガッツリ実戦経験を積んだ身で、大人げもなく本気で試験に挑んだのは、ひとえにミカサに勝ちたい一心だったのだが……。

結果として、変わらない実力差を見せつけられただけだった。

負け惜しみに聞こえるかもしれないが、やはりミカサは別格だとジャンは思う。

立体機動を手にした時から、彼女は完璧だ。

遠い目で佇むジャンを、クリスタは不思議そうに見つめる。

「そろそろ行こっか？ あんまりのんびりしてると、暗くなっちゃうもんね」

ジャケットを翻して、彼女はくるりと背を向ける。

その背中に、ジャンは遠慮がちに声をかけた。

「あー、悪い。今日の練習はなしだ」

「そうなの？」

「おう。……実は、クリスタに頼みたいことが——」

「本当？？」 なになに？？」

言いにくそうに切り出したジャンを遮って、クリスタは声を弾ませる。

「何でそんな食いつくんだよ」

「だって、なんでもするって言ったのに……立体機動の訓練させろくなんてお願いなんだもん。私が得してばかりで、少しぐらいお返ししたいよ」

と、拗ねるように唇を尖らせる。

天使かよ。

反射的に浮かんだ言葉をポーカーフフェイスで打ち消して、ジャンは胸ポケットを探り、二枚のチケットを取り出した。

そこには、『喫茶店♡シユエット お食事券』と、いかにも女の子らしい筆跡で書かれている。

クリスタは目をぱちくりさせて、

「それって……」

「トロスト区に新しく飯屋ができたことは知ってるか？」

「えっと、たしか赤い屋根のかわいいお店だよ？ 女の子が好きそうな感じの」

「そうだ。そしてこれは、お食事券だ。二枚ある」

あ……、とクリスタが小さく呟いた。

お辞儀をするように頭を垂らしたチケットを、まじまじと見つめて、透き通る青い瞳に光が輪を描いて走る。

じんわり熱を帯びていく頬を見つめながら、ジャンは思い切っとう。

「頼む、クリスタ。一緒に飯食いに行ってくれねーか？ ……ライナーと」

「……え？ ライナー？」

ぽかんとしたクリスタに、ジャンは慌てて言う。

「待て！ お前の言いたいことはわかってる！ 何でライナーって思っただろ？ 嫌だよな、あんなゴリラとかわいい喫茶店なんて入れねーよな！」

「ううん！ ちがうの！ ライナーが嫌とかじゃなくって！」

両手をぶんぶん振り回して、彼女は一生懸命否定する。

「……あの、なんでジャンがそんなお願いするのかなんて」

最もなところを突っ込まれて、ジャンは押し黙った。

なんとなく気まずそうに、クリスタは目を伏せる。

当たり前だ。

本人から誘われるならともかく、そこにジャンが入るのは意味不明だろう。

しかし、ここで引くわけにはいかない。

ライナー攻略は、彼女にかかっているのだから。

美女と野獣。



月とスツポン。

巨人に真珠。

ライナーとクリスタの組み合わせは、そんな言葉がよく似合う。

だが、「男と女の間には絶対はねえ！」をスローガンに掲げてきたプロの片思い拗らせ師としては、一縷の望みを捨てきれずにいた。

それによくよく考えてみれば、クリスタをまともに口説いた男など、今までいなかっただ。

押しに弱いところもあるし、本気で口説けば案外いけるかもしれない。

訓練兵の入団式、美少女特有のキラキラしたオーラを纏っていたクリスタは、すぐに訓練兵男子の注目の的となった。

彼女に近付こうと、男どもが虫のようにふらふら寄っていく。

昼時になればクリスタの分まで席をとって食事の準備をしたり、彼女の当番の手伝いをしたり、訓練中の班分けでは彼女をめぐる静かな争いになったりした。

危うく教官にバレそうになって慌てふためくバカどもを、ジャンは冷たい目で眺めていたものだ。

しかし、それも一週間ほどで終息することになる。

ユミルが、クリスタの隣に並ぶようになったからだ。

性悪でがさつなユミルと、優しくてかわいいクリスタ。

どういった経緯かは知らないが、正反対の二人がつるむようになったのは、それなりの衝撃があった。

以降、男たちの末路は、ユミルに睨まれて諦めるか、ユミルにボコられて諦めるかの二択になっていった。

ユミルに任せきりで他力本願なクリスタに、「嫌なら自分で断れよ」とジャンは薄い関心で評価していたのだ。

しかし、今は自分が、彼女の優しさに付け込もうとしている。

なんて答えればいいんだ。

未来のことは話せねーし、納得のいく説明なんて……。

言葉を探しても見つからない。

ジャンが何も言えずにいると、手の中のチケットがするりと抜けて

いった。

驚いて顔を上げる。

クリスタは二枚の紙切れを見つめ、

「よくわからないけど、ジャンが困ってることはわかったから。私で力になれるなら、協力させて?」

そう言つて、微笑んだ。

……俺はずるいな。

ただ頭を下げるだけで、クリスタなら引き受けてくれるとわかつていた。

こいつの優しさに無策で頼つた。

ジャンは項垂れて、彼女の両肩をグツと掴む。

「すまねえ……本当にすまねえな、クリスタ……」

「ご飯行くだけだよね?!? なんてそんな悲壮感あるの?!?」

クリスタは目を伏せて、

「だけど、二人つきりはちよつと恥ずかしいから……他に誰か誘つてもいいかな?」

「え?!? おおお! もちろん! それならベルトルトがいいんじゃないか? そんでクリスタも話しやすい女子をもう一人誘つてよ!」

ここでまさかのダブルチャンスかよ?!?

興奮で鼻を膨らませて、ジャンは食い気味にベルトルトを推す。

クリスタが誘うなら、ユミルかサシャあたりか?

どっちが来ても望み薄だが、万が一、愛が生まれることも無きにしてもあらず!

ロマンスは突然だぜ!

「その……ジャンはどうかな?」

クリスタは、顔色を伺うようにジャンを見上げる。

「ほら、私つてあんまり仲良い男の子とかいないし、緊張しちゃうし! 私が一番話しやすい人つて、ジャンかなあつて。ぜんぜんベルトルトが嫌とかじゃないんだけどね?!? 次のお休みとか、どうかなあつて!」

「あー、……わりい。次の休みは、先約があるんだ」

意味不明な頼み事をするんだから、お前も付き合えっていう筋はわかるが……あいにく次の休みはアニとの約束がある。

それに、降って湧いたベルトルトチャンスを逃すのは惜しいからな。

幸運にも、本当に先約があることにジャンはホツとした。

ただでさえクリスタには苦勞をかけている。

そのうえ嘘をつくのは嫌だった。

「ううん。先約があるなら、ぜんぜんいいの」

クリスタは華奢な人差し指を、ジャンの鼻先に突きつける。

「それと、さつきから謝りすぎだよ。お互いに禁止って、約束したでしよ？ そんなにペコペコしなくたって、なんでもするよって言ったのに」

鼻先にある人差し指を、眉間にシワを寄せたジャンが握る。

「ペコペコってお前なあ。……あと、なんでもするとか他の男に言うんじゃねーぞ」

俺にはミカサがいるから問題ねえが、普通の男に言うには危険すぎるセリフだ。

突然握られて、驚いたんだろう。

クリスタは慌てて、ジャンの手の中から指を引き抜く。

いつのまにか傾いた空。

夕暮れのほの赤い光を輪郭に宿して、彼女は小走りにタツタツタツと兵舎に走っていく。

そして、くるりと振り返り叫んだ。

「私に任せてね！ どの料理が美味しかったか、ばっちりリサーチしてくるから！」

元気よくチケットを掲げてぶんぶん振ると、そのまま兵舎に駆け込んでいく。

蜂蜜に苳ジャムを重ねたような色の髪が、艶やかになびいて兵舎に吸い込まれる。

それを見送ってから、ジャンは胸をなで下ろした。

あ、俺がセツティングしたこと口止めすんの忘れた。

……まあ、明日でいいか。

ようやく、これで一步前進だぜ。

休む暇もなく、次の対戦相手——アニ・レオンハートのことをあれこれ考えながら、ジャンも兵舎へ足を向けた。

## 十話

そのカフェは、大通りから少し外れた隠れ家みたいな場所にあった。

暗っぽい焦げ茶で、木造りに統一された店内。

ほっこりする木目の温かみに、アンティークっぽいさりげないフォルムが洒落ている。

でんと鎮座するベンジャミンも、天井からぶら下がる色ガラスのラントンも絶妙にうるさくなくて、はじめて来るのに妙に落ち着けた。いい店だな。

相手がアニとはいえ、一応リサーチしておいてよかつたぜ。

マルコに聞いたのも正解だった。

いかにも老舗っぽい初老のマスターが、コーヒーと一緒にアップルパイを持つてくる。

その表面はつやつや光って、編み目の間からずっしり詰まったりんごが顔を覗かせていた。

焼き立てのパイに、アニがナイフを入れる。

サクサクと軽やかな音。

彼女は眉一つ動かさず、一口大になったパイを黙々と口へ運んだ。手が止まらないってことは、美味いってことか？

……マジでよくわかんねーな。

居心地の悪い間を埋めようと、ジヤンは無意識にコーヒーカップに口をつける。

口内に広がるブラックの苦味。

その味に、むせた。

本当は飲めないくせに、アニがブラックコーヒーなんて頼むから、つい「同じものを」と注文したのを忘れていた。

「大丈夫？」

彼女が言う。

せめてパイから目を離してほしい。

可能性は低いとわかっていても、こうして二人きりになると、生きた心地がしなかった。

アニがその気になれば、簡単に殺される——そう思うと背筋が凍る。

訓練兵生活の平和ボケで、忘れかけていた恐怖心がじんわりと起こされる感覚。

落ち着け。

何も問題はないはずだ。

人間が巨人化できることを壁内人類が知らない以上、こいつらも正体がバレるとは思ってねえだろ。

つまり俺はノーマーク、ただの同期だ。

パイを口へ放り込む。

バニラビーンズの甘みが広がって、コーヒーの苦味を和らげてくれた。

にしても、男と二人で出掛けるつつーのに、その格好はどうなんだよ。

フード付きパーカーに、スキニーパンツとブーツ——アニは、よく食堂で見かける服装のまんまだった。

いや、別にいいけどよ。

こっちだつてデートしようと思つて誘つたわけじゃねーし、俺にはミカサがいるし、人類の未来かかつてるし。

けどな、普通は普段着で来ねーだろ！

ちよつとはうきうきしてスカートとか履いてこいよ！

髪とか下ろしてこいよ！

真新しいシャツを整えて、ジヤンは溜息を吐く。

窓から差し込む光に溶けるようなまつ毛が、アニの肌に影を作つた。

根元から立ち上がった鼻筋はなだらかに伸びて、下向きにツンととんがっている。

怖え顔してるけど、結構美人だよな。

問題は性格か。



次に、服屋を何件もはしごする。ジャンの目にはほとんど同じように見える洋服を手にとって戻す作業を延々と続ける。

次に、雑貨屋に寄った。バッグやらポーチやら文房具やら——とにかく片っ端に目を通していく。

次に紅茶屋、花屋、本屋をめぐって、結局何も買わずに一番最初のアクセサリーショップに戻ったところで、ついにキレた。

「お前、マジでいい加減にしろよ！ 何時間見りや気がすむんだ!?？」  
「嫌なら帰りなよ。私はついてきてなんて言っただけだ！」

苛立つジャンを気にもせず、彼女はヘアゴムを手取る。

日々の訓練で体力はあるはずなのに、買い物に付き合うのはめっちゃくちや疲れる。

精神的な疲れだ。

女性向けの店に足を踏み入れるだけで、男のメンタルはゴリゴリ削られるのに、それが数時間続くなんて地獄でしかない。

ここまで我慢した俺の苦勞も知らねーで、ちよつとぐらい勞いの言葉があつてもよくねえか!?!?

……待て待て待て、ここで怒ったら負けだろ。

アニと親睦を深めることが、今日の目的だしな。

ここは友好的な姿勢を見せるべきだ。

桃色の小さな花飾りがついたヘアゴムを眺める彼女に、笑顔を作った。

「そのヘアゴムなかなか良いな。もうそれでいいんじゃないか?？」

「……でって何? あんまり可愛くないけど、今まで見てきた中ではまだマシな方ってこと?」

「そ、そういう意味じゃねーって! ただ俺は——そう! こっちの方がアニっぽいなって思っただけだ」

ジャンは色違いのヘアゴムを指差す。

「アニのイメージ的には青がなくとちらつと思っただけで、もちろん今見てたピンクの方も逆に似合うと思うぜ! マジで!」

って、なんで俺がショップ店員みたいになっただよ!

馬鹿みたいなテンションで、機嫌を取ろうとする自分に頭が痛く



なってくる。

すると、彼女が小さく呟いた。

「……私のじゃないから」

「は？ お前のじゃねえって、どういう——」

「だからプレゼントなんだってば！」

アニは頬を紅潮させて言った。

低い位置から睨み上げてくるが、彼女にしてはめずらしく迫力が無い。

意外な展開に、ジャンは面食らった。

「誰にだよ？」

「……ミーナ」

「お前ら仲良かったっけ？」

「別に。たまにあの子から話しかけてくるぐらい」

「じゃあ何で？」

「……前に誕生日プレゼントもらったから。お返しした方がいいのかと、ちよつと思っただけ」

ちよつと思っただぐらいで、貴重な休日潰して何時間も探し回ったりするかよ。

「けど、私の柄じゃなかったね。これだけ探しても見つからないんだから」

すっかり無表情に戻って、何とも思っていないみたいに彼女は言った。

アニは、どんな奴なんだろう。

正直なところ、その問いに上手く答えられない。

アニが女型の巨人だと判明した後、彼女に最も近かった者として同期全員が報告書を提出した。

その時だって、何を書けばいいか分からなかったし、たぶん同期全員同じだったとジャンは思う。

104期の4位卒。

対人格闘術が得意。

性格はクールで、孤立しがち。

女型の巨人。

壁内人類を殺し、104期の仲間を殺し、挙句、捕まりそうになったら硬質化で水晶の中に逃げ込んだ引きこもり。

壁に穴を開けたくせに、巨人に襲われたコニーを体を張って助けたこと。

すっかり肉塊になった死体を見て、呆然と謝っていたこと。

エレン奪取のとき、女型の巨人として殺すべきだったのに、アルミンとジャンを見逃したこと。

アルミンほどじゃないが、何年も水晶に引きこもるア二のもとに、ジャンもひっそり通っていた。

怒鳴り散らして恨み言をぶつける日もあれば、壁外人類を殺したと懺悔する日もあった。

その言葉に、ア二が答えることはもちろんなかった。

だが、今はちがう。

俺の言葉が直接届く。

今ならまだ届く。

本当のア二を、これから知ることができる。

彼女が置いたヘアゴムを、ジャンは手に取った。

「お前が選んだんだ。ちゃんとミーナに渡せよ」

「人の話聞いてた？ もういいって言ったでしょ」

「嘘つくな。この店に戻ってきて、真っ先に手に取ったろ。これが一番良いって思ったんだろ？」

ア二は少し沈黙して、

「……ミーナが気に入るかわからないよ。趣味じゃないもの貰ったって、あの子も困るでしょ」

「そうか？ ミーナなら、お前からのプレゼントなんて飛び上がって喜びそうだけだな」

「だったらなおさらだよ。ただのお返しなのに、後々変に絡まれるようになっても面倒だから」

面倒なのはお前の方だ。

まだ何か言いたげなジャンを無視して、ア二が踵を返し、店を出て

いく。

それでいいのかよ、アニ。

ミーナは死ぬんだぞ。

「お前のせいで、巨人に喰われて死ぬんだ。」

何の意味もなく、地獄のような恐怖を味わって、臭<sup>くせ</sup>え巨人の口の中で何を恨めばいいかもわからずに死ぬんだ。

もう一度同じことを繰り返す気かよ。

俺はごめんだぜ。

あんな地獄は、もう終わらせなきゃならねえ。

## 十一話

トロスト区の大通りの市場では、店主たちの大声が飛び交い、一つでも多く売ってやろうという活気が溢れていた。

野菜や果物はもちろん、所狭しと並ぶ屋台には兵舎じゃ絶対に出ないようなめずらしい料理が販売されている。

壁外とは違う、独自の食文化。

焦がし醤油の香ばしい匂いがいっぱい漂う。

兵舎の食事の一週間分ぐらいに相当する塩分が、鼻を通って胃袋に届き、ベルトルトはごくりとのを鳴らした。

質素で窮屈な訓練兵舎から賑やかな町に出ると、つい開放的な気分になる。

食べたばかりでお腹はいっぱいなのに、あれやこれやと心惹かれる気持ちにもなる。

なるんだけど、やっぱり彼女は異常だと思うよ。

まるで獣だ。

高い位置で一つに結われた髪を、尻尾のようにびゅんびゅん回す。

獲物を狙う目は爛々と輝き、大きく開いた口からよだれが滴って、干し肉を守るガラスケースを濡らしていた。

止めないと！

そう思うのに、足が動かない。

ベルトルトのでかい図体は固まったまま。

サシャに飛びかかったのは、やはりライナーだった。

「やめろおおおおサシャ！ 干し肉なんて買う金はねえだろ！」

「ウウウウウウアガアアアアアッ！」

「落ち着け！ 思い出すんだ！ 飯ならもう十分食っただろ!?!？」

「グルルルルギアアアアア！」

暴れるサシャを羽交い締めにして、ライナーが叫ぶ。

「黙って見てないで、こいつを抑えるの手伝ってくれ！」

「バカ言うなよ。そういう手荒いのは男の仕事だろお？ あと、目離

すとあぶねーぞ」

ユミルが忠告した瞬間、サシヤがするりと拘束を抜ける。

と、四つん這いになって、人混みに飛び込んだ。

あつという間の出来事。

真つ青になったライナーが、血相を変えてサシヤの後を追っていた。

「ゴリラもたまには役に立つぜ。芋女のお守りがいるおかげで、クリスタとゆっくりデートできるんだからな」

「もう、そんな言い方よくないよ。せつかくみんなで来たんだから、みんなで仲良くしないと楽しくないでしょ？」

「……なんか二人とも慣れてるね」

ベルトルトがぼつりと言った。

「慣れたかねえけどな。町に出るたびにこうなるんじや、嫌でも慣れるね」

「驚かせちゃってごめんね、ベルトルト。でもね、ちゃんと解決方法があるから大丈夫だよ。すぐそこに美味しいパン屋さんがあるんだけど、こくんなに大きいパンがあつてね、とっても甘くて美味しいの！」  
クリスタは両手をいっぱい広げて、パンの大きさを伝えてくれる。

けれど、その大きいパンが今の状況にどう役立つかわからず、ベルトルトは首を傾げた。

クリスタは得意げに微笑む。

「サシヤもそのパンが大好きだから、ちぎって食べさせてあげるの。そうすると、暴れたりしないで、ちゃんと兵舎まで帰れるんだよ」  
それってどうなんだろう。

目の前にニンジンぶら下げられる馬みたいな扱いなんだけど……。  
にこやかなクリスタに、ベルトルトはなんとも言えない気持ちになる。

呑気に遊びに来て、よかったのかな。

男2、女2（獣1）なんてダブルデートみたいだし、浮かれてるみたいでなんか嫌だ。

ア二にバレたら、すごく気まずいよ。

僕になんの相談もなく、ライナーが勝手に決めちゃうから……。額に汗を浮かべて、ベルトルトは溜息を吐く。

新しくできた喫茶店は、こじんまりとして可愛らしい感じだった。薄いピンク色の店内。

ショーウィンドウに並ぶカラフルなスイーツ。

意外と女の子らしいア二が、いかにも好きそうな感じ。

どうせ出掛けるんならア二と行きたかったと、ベルトルトはお土産の袋を握りしめて思う。

「あれって……ア二じゃない?」

え? ア二?

まさかの名前が登場して、ベルトルトは弾かれたように顔をあげた。

クリスタが指差す先には、小柄な少女。

屋台の端っこで、人混みから避難するようにひっそりと佇んでいる。

ユミルが目を細める。

「あの目付きの悪さは、間違いなくア二だな」

「声かけてくるね! セっかくだからア二ともっと仲良くなりたいもん」

え、嘘。

ちよつと待ってよ!

内心焦る。

しかし、止める理由が見つからない。

ああ、どうしよう!

これってちよつとまズいよ!

不用意に僕たちが絡むのもどうかと思うし、何よりこの状況をア二に知られるのは嫌だ!

こんな時に君は何をやってるんだライナー!

ぴしりと体は固まったまま、ダラダラと汗が流れる。

頭の中で思考がぐるぐる回る。

もうダメだと、諦めかけた時だった。  
アニに駆け寄ろうと数歩行った先で、クリスタがぴたりと止まる。  
どうしたんだろう？

クリスタの視線の先を追うと、ちょうどアニが歩き始めたところ  
だった。

行き交う人たちで、彼女の姿が点滅するように見え隠れする。

そして、人混みの隙間から見えた。

彼女の隣には、ジャンがいた。

「なんで、アニとジャンが……」

衝撃のあまり、ベルトルトが呟く。

もしかして二人きり？

でも、アニに限ってそんなことあるのかな……ジャンだってミカサ  
のことが好きはずだし。

他に誰かいるんじゃないの？

でも、アニは屋台の隅で立ち止まっていた。

誰かを待ってたってこと？

ジャンを待ってたの？

それって、デートなんじゃ……。

「そっか。先約の相手ってアニだったんだね。……邪魔しちや悪い  
し、声はかけないほうがいいよね？」

クリスタが振り返る。

「ユミルとベルトルトはここで待っていて。すぐに買ってくるから」

そう言って、彼女は小走りにパン屋に入ってしまった。

頭がぼんやりして、うまく働かない。

喧騒が遠のく。

ベルトルトは、呆然とアニがいた辺りに視線を戻した。

だが、人混みの中に、彼女の姿はすでになかった。

「あーあ。何だよ、この湿っぽい空気は。めんどくせーなあ」

めんどくさいと言う割に、ユミルは楽しそうにニヤつく。

「まあ、そんなに落ち込むなよ」

「何のこと？ 意味がわからないんだけど」

突然、ユミルが唇を寄せる。

ベルトルトの耳たぶに、熱い息がかかった。

「好きなんだろう？ アニのこと」

なんで知って——近いって！

こそばゆい耳を押さえて、思わず飛び退いた。

「だははははッ！ 何だよその反応！ そりゃ肯定してるのと同じだぜ、ベルトルさん！」

ユミルが腹を抱えて笑った。

よほどツボつたらしい。

ベルトルトの背中を笑いながらバシバシ叩いて、「みんなには黙ってやるから！」と上機嫌だ。

ベルトルトは、その痛みに耐えながら、いつまで経っても戻らないライナーを恨むしかなかった。

\*\*\*

『ねえねえ、知ってる？ 聞いたことある？ 104期のあの噂』

『あの噂？ 七不思議とか、そういうもの？』

『ちがうよちがうの。本当にいるんだよ。愛の伝道師ってやつ。目をつけられたら最後、運命の人と絶対くっつけられちゃうんだって』

『なんだかロマンチックだね』

『ちがうよちがうの。ちゃんと代償があるんだよ。大きな代償。辛い代償。辱めを受けて、体はどんどん衰弱して、逆らう気力もなくなつて、最後に残るのはあら不思議……』

まことしやかに囁かれる。

104期のあの噂。

『愛の伝道師』の前では、誰も逆らえない。

逆らえば、殺される。

従えば、飼い殺される。



ほら、君の後ろにも――。

暗い兵舎の廊下を、二人の男が歩いていった。

一人は、104期を代表する冴えない男。

トーマス・ワグナー。

成績は中の上。

特筆すべきことは、もみあげが長い。

その程度の男。

その背後に続くは、顔色の悪い男。

ダズ・クーパー。

成績は中の下だったが、最近になってメキメキ実力を伸ばしている。

しんと静まる廊下に、二人のブーツの音だけが響いていた。

沈黙を破ろうと、トーマスは何気なく口を開く。

「そういえば、最近やたらとカップルが増えてないか？」

「ああ、そうだな。増えたかもしれないな」

「絶対増えたって！ どいつもこいつも恋愛にうつつ抜かしやがって」

トーマスは吐き捨てるように言った。

後ろを歩くダズの表情はわからない。

だが、モテたこともない野郎だ。

自分と同じように、さぞ腹を立てているだろうとトーマスは思った。

しかし、ダズは言う。

「実は、俺も彼女ができたんだ」

「はあ？？ お前に？？ 老犬みたいな顔面のダズに？？ どういうことだよー！」

「ハハッ……俺はただ選ばれただけさ。愛の伝道師に」

「愛の伝道師？ ああ、最近よく聞くな。暇な訓練兵が流した、ただの噂話だろ」

ダズの方を振り向きもせず、トーマスは歩を進める。  
なんだよ、ダズのやつ。

いつのまに彼女なんて……。

そういや、最近やたらと立体機動も上手くなったよな。

俺の成績じゃ、もうすぐダズに追いつかれる。

クソ！

女作るような浮ついた野郎に、成績まで負けてたまるかよ！

トーマスは苛立ち、背後で蠢く影には気付かない。

ダズが慰めるように言った。

「気を落とすなよ」

「くだらないんだよー。そんな子供騙しの噂なんて」

月明かりに照らされて、影が濃く深くなる。

何本もの黒い手がトーマスに伸びる。

彼はぶつぶつ文句を言いながら、ずんずん先に進んでいく。

そして、ダズが言った。

「おめでどう、トーマス。お前は選ばれた」

次の瞬間、一斉に襲いかかる。

トーマス・ワグナーの叫び声は、複数の影に吸われて消えた。

どれぐらい気を失っていたのか。

トーマスが目を覚ますと、目の前は真っ暗だった。

手足の自由が効かない。

イスの上で縛られ、麻袋を被せられている。

呻き声が聞こえたのだろう。

にわかに人の気配がすると、乱暴に袋を剥がされた。

「やっと起きたか。トーマス・ワグナー」

ランタンが、トーマスを囲むように置かれている。

四方から照らされ、まるで生贄の儀式のような異様な雰囲気。

その周りに、複数の影が揺らめいた。

「静かにしてろよ。でかい声を出せば、困るのはお前だぜ」  
奴らが姿を見せる。

現れた五人組に、トーマスは目を見開いた。

104期の落ちこぼれ集団。

寄り集まって、人を蹴落とすことしか考えていない、クソみたいな連中だ。

「俺に何の用だ。このふざけた真似は——説明しろ！」

牙のような犬歯が特徴的な男——リーダー格のアイザック・テイラーがクツクツと笑う。

「テメーは選ばれた。愛の伝道師にな。噂ぐらい聞いたことあるだろ？」

愛の伝道師？

バカな、まさか本当にそんなことが……。

アイザックは続ける。

「愛の伝道師は、すべての訓練兵に愛をもたらす。トーマス、お前には好きな女がいるな？」

「まさか！ 訓練で手一杯だ。恋愛なんてしてる暇——」

「ミーナ・カロライナ」

一人の女——オリビア・フロレスが進み出る。

「トロスト区出身。おさげの黒髪があざとい。自らを豚小屋出身の家畜以下と評する、正真正銘のメス豚。トーマスとは、先月に第一倉庫室の掃除当番がかぶり、急接近する。その後、トーマスは、絵が得意なラリー・クツクにミーナの絵を依頼。夜中になると、ミーナの絵を持って、誰も寄り付かない最奥のトイレへ——」

「うわあああああああやめろやめろやめろやめてくれ！」

「どうやら、やっと自分の状況がわかったらしいな」

アイザックが楽しそうにトーマスを見下ろした。

「ああ、クソ……俺に何をしろって言うんだ」

「テメーがすることは、たった二つ。一つ目は、立体機動の朝練に参加し、愛の伝道師の指導を受けること。二つ目は、ミーナと付き合え。以上だ。簡単だろ？」

その要求に、トーマスは驚愕する。  
立体機動の朝練？

なんでそんなことを。

それにミーナと付き合えって、できるならとつくにやってるよ！  
というか、なんで他人に強要されなきゃいけないんだ！

「さっきから黙って聞いてれば、愛の伝道師って誰なんだ!?!? いるんだろ!?!? こそこそ隠れてないで、出てこいよ!-」

ランタンの灯りが届かない闇の向こう側へ、トーマスが叫ぶ。

すると、呼びかけに応えるように、土を踏み締める音が聞こえた。  
闇の中から、風が吹き込む。

ランタンの火がちらちらと揺れる。

ゆっくりと歩み寄ってきた人物の顔が、ようやく灯に照らされて、  
トーマスは言葉を失った。

「そんな……お前なのか、ジャン」

目深にフードを被って、ジャンは冷たい視線を向ける。

「諦めろ。104期のほとんどは、既に俺の手中にある」

極悪と言われていた104期の落ちこぼれ集団を従えて、ジャンは  
悪役面を歪ませる。

「安心しろよ。俺の言うことを聞いてりゃー、悪いようにはしねえか  
ら」

そう言って、愛の伝道師はニヤリと笑った。

## 十二話

『俺は調査兵団に入る——人類を救うのはお前じゃねえ、俺だ』  
思い出す度に、胃がムカついてくる。

ジャンは、ことあるごとに嘔み付いてくる駄犬のような男だった。  
恥ずかしげもなく、ただ生きることだけに執着する。

今夜の残飯が、昨日よりほんの少し多いならいい。肉の欠片でも  
入ってれば上等だ。

ボロ雑巾のような布が、薄汚れた毛布に変わる。それだけで満足そ  
うに眠れる。

他のクソ共が、自分よりも粗末な暮らしぶりをしてれば最高だ。

志もないくせに吠えることだけは得意で、首輪や鎖に疑問を感じた  
こともないんだろう。

そんな男だった。

よりによつて、お前が言うのかよ。

誰よりも憲兵団にこだわってた腰抜け野郎のお前が。

『たしかに俺は間違ってたけどな。そりやお前も同じなんだぜ、エレ  
ン』

俺が間違ってるだつて？

何を言つてやがる。

巨人は駆逐すべきなんだ。

この憎しみは、奴らをぶつ殺すまで終わらねえ！

ジャンに宣戦布告された日から、エレンの頭は怒りでいっぱいだつ  
た。

巨人の恐怖も知らない男に、積年の恨みを否定された。

目の前で母親を喰われた恨み。

自由を奪われた憎しみ。

燃える憎悪が、エレンの頭を溶かし、時間をかけて灼熱のマグマと  
なった。

決して冷めることはない。

ジャンに理解できるはずがない。

たった一晩で熱した決意に、どれほどの価値がある？

どうせまた一晩経てば、元の駄犬に戻るだけだ。

エレンは、そう思っていた。

しかし、その予想は大きく外れ、ジャンに対する怒りすら吹き飛ばすことになる。

ジャンの変化は、驚異的だった。

立体機動も対人格闘技も座学も——全てにおいてまるでレベルが違う。

身体能力や格闘経験の差が響き、超えられない壁と言われていた三強——ライナー、ベルトルト、アニを置き去りにする成長ぶり。

数週間も過ぎれば、ミカサに次ぐ二番を疑う者はいなかった。

元来素直な性格のエレンは、ジャンの快進撃に感嘆せざるを得なかったのだ。

すげえ。こんな短期間で変わるのかよ。

こいつの決意は本物で、それが爆発的な成長に繋がったってことか？

信じられねえが、そう思うしかない。

ジャンの決意を認めると同時に、エレンの中で対抗心が燃え上がる。

意思の力で強くなれるなら、俺が負けるはずがねえ！

そう思いながら、以前より一層訓練に力を入れていた。

ジャンに負けたくない一心だった。

なのに、当の本人は——

「最近、おかしいよな……」

思わず漏れた心の声。

パンをかじろうとしていたアルミンは、ぽかんと口を開けたまま、エレンの言葉に首を傾げた。

そして、少し考えてから「ああ」と頷く。

「そうだね。なんかわざと手を抜いてるって感じがする」

「……わざと？　なんでそう思うんだ？」

「だって変だよ。さっきの立体機動の試験も、獲物を見つかるまでは先導するのに、いざ目の前にすると減速してた。まるで先に行けって言ってるみたいだ。立体機動だけじゃないよ。馬術や座学も不自然に成績が下がってるしね」

「へえ。よく見てるんだな」

「はは。まあね。良くも悪くも、ジャンって目立つから」

その言い方に、エレンは少し引つ掛かりを覚えた。

「悪いって何だよ？」

「えっ……あーちよつとね」

アルミンは困ったように笑う。

何か誤魔化す時に、彼がよくやる表情だ。

聞き出そうと口を開く前に、真向かいに座るミカサが口を挟む。

「エレン。食事が冷めてしまうから早く食べて。それに噂話はよくない。アルミンが困っている」

「なんだよ、ミカサ。お前は関係ねーだろ」

彼女の眉間が微かに動く。

「そんなことはない。エレンよりは、私の方が理解している。答えは簡単。ジャンは成績の操作をしている。それだけ」

「ちよつとミカサ！」

アルミンが慌てて声を上げるが、もう遅い。

エレンは不愉快そうに、

「はあ？　自分の成績が落ちてるのに、不正してるってのか？　意味わかんねーよ」

「ちがう。成績が上がってるのは、ジャンと一緒に行動している人たち。ジャンの成績が下がるのと反比例して、彼らの成績は上がっている。どうやっているのかは、わからないけれど」

彼女の言葉に、エレンはハツとした。

反射的に射るような視線をジャンに向ける。

一人きりの背中。

大して広くもない食堂で、浮き出るようにジャンの周りには誰も座っていないかった。

何で気付かなかった？

言われてみりや確かにそうだ。

最近ジャンとつるんでる奴ら——開拓地送りになりそうだった落ちこぼれ組。

さっきの立体機動の試験も、ジャンは奴らと同じ班だった。

「何のためにそんなこと……」

「わからない。何にせよ、関わるべきじゃない。エレンまで悪い噂がついてしまう」

ミカサは長い睫毛を伏せる。

「ので、あなたは別の話をすべき。噂話がしたいなら、いい話がある。……私もさっき聞いたのだけれど、愛の伝道師という人がいるらしい。愛し合う男女を結ばせるという、素晴らしい活動を」

エレンが立ち上がる。

アルミンの静止の声も聞かず、まっすぐ進んだ。

肩をいからせ、和やかな食堂を突っ切って、ジャンに近付くと胸ぐらを掴み上げる。

ちようどスープを飲んでいたジャンが、その衝撃に頭からスープをかぶった。

一拍置いて、怒声が響く。

「テムエエエエエエエ！ 何すんだよ死に急ぎ野郎が！ ビツチャビツチャじゃねえか！」

「今はスープなんてどうでもいいだろ！」

「まだ午後の訓練があんだよ！ 次は馬術の試験がある！ 巨人以下の脳味噌しかないテメーに言っても仕方ねえが、いつもと違う臭いが付けば馬に嫌われんだろうが！ ふざけてんじゃねえぞ！」

ジャンが激昂する。

自ら言い出した試験の話題に、エレンは低く唸った。

「ふざけてんのはテメーの方だろ、糞野郎」

「あっ」



「わざと手を抜いてるくせに、何が試験だ！」

ジャンは一瞬目を見開いた後、ふんと鼻で笑った。

「言いがかりはやめろよ。俺は一生懸命やってるんだぜ。それとも、証拠でもあんのか？」

「それは……」

予想外の反応に、エレンは不意を突かれて言い淀む。

こいつは何を考えてる？

憲兵団を捨て、成績を捨て、その先に何かあるっつーんだ。

混乱するエレンを押しつけて、ジャンは言い捨てる。

「吠えるのはいいが、俺の邪魔だけはすんなよ」

吠えてんのはお前の方だろ！

言い返したかったのに、なぜか言葉が出てこない。

まるで噛みつきこうとするのを抑えるように、エレンはギリギリ歯を食いしばっていた。

\*\*\*\*\*

猪突猛進バカのエレンにまで気付かれるとは思わなかった。

正直、肝が冷えた。

ジャンは手汗を洗い流し、そのまま頭を蛇口の下に持ってくる。

ひんやりと冷たい流水。

塩っぱいベタつきと、糸のような野菜が流水の勢いに乗って排水溝に消えていく。

ガシガシと頭を洗い流し、犬のように頭を振って水滴を飛ばした。作戦は順調だ。

ビビることはねえ。

バレても、尻尾さえ掴まれなけりや問題ねーんだからな。

キュツと蛇口を閉めて、鏡の中を睨みつける。

キラキラ光る双眼が、自信たっぷりなジャンを見返していた。

約一ヶ月前。

人目を忍んだ倉庫裏。

落ちこぼれ組のリーダー格、アイザックを呼び出した。

ジャンの話を通り聞いた後、男は驚愕に叫んだ。

「はあ!?? 成績を売るだつて!??」

ああ。俺はもう憲兵団に行くつもりはねえ。だから成績にも興味がない。売ると言うよりは、点数稼ぎに協力するって言ったほうが近い。

協力つて……どうする気だよ?

やり方はいくらでもある。立体機動試験なら獲物を譲るし、座学ならレポート書いてやるよ。

けど、そんなこととして教官にバレたら……。

大丈夫だ。成績の操作なら、すでに水面下でやってる奴もいる。そう難しいことじゃねえよ。見返りは十分だろう? 頼む。力を貸してくれ。

アイザックにそう答えたのは、ハツタリじゃなかった。

104期で成績の操作があったことは、兵団卒業時の成績上位者を見ればわかる。

——10番、クリスタ・レンズ。

まさかの番狂わせだった。

たしかにクリスタは優秀だったが、10番以内に入るのはユミルだと、誰もが思っていたからだ。

ユミルはクリスタを憲兵団に行かせるために、成績を操作したんだろう。

それ自体は別にいい。

彼女のクリスタに対する執着を見ていれば、容易に想像がつく。

問題は、誰の目から見ても不自然な順位だったことに、教官方が何も言わなかったことだ。

つまり、キース教官はユミルの不正を黙認したことになる。

疑わしきは罰せず。

証拠を掴まねけりや、問題ねえつてことだ。

ジャンは鏡の前で大きく息を吐き、両頬をパンと叩いた。

気合を入れてから、馬小屋へ向かう。

次の試験は馬術。

さつきエレンとの小競り合いで余計目立つちまったからな。

無難に30位以内ぐらいに入るときやいいか。

まだ試験まで時間はあるのに、そこそこの数の訓練兵が準備に取り掛かっていた。

ジャンも挨拶がわりに、愛馬のブーフヴァルトの鼻をなでる。

彼は満足そうにブフンと鼻を鳴らして、手のひらに擦り付いてきた。

似ていると言われるわりに、あまり懐かれたことのなかった愛馬。

馬術に関しては、タイムリープする前よりも上達した気がする。

これも天使のおかげだなと思っていると、ふと鋭い視線を感じた。

馬越しにさりげなく見やる。

アイザックがこちらを伺っていた。

心配すんなって、わかっている。

彼にだけ伝わるように、ジャンは合図を返した。

実際、アイザック率いる落ちこぼれ組はよく働いてくれた。

成績を見返りに、立体機動訓練の参加と104期のカップル量産の手伝い。

立体機動の方は、ジャンの厳しい指導にも反発せずについてきてくれた。

それだけじゃない。

手段はともかく、朝練に参加するメンバーを集めてくれるようになったのは有難い協力だ。

そしてもう一つ、嬉しい誤算があった。

絶望的かと思われたカップル量産が、案外順調なことだ。

同期の想い人を調査し、弱みを握って告白を強制させるというなかなかエグい方法。

だが、きちんと手順を踏ませて、ストーリーを作り上げれば案外うまくいった。

毎日の挨拶と会話を積み重ね、デートに誘って手を握るところまでいけば成功率8割。

場合によって、ちよつとしたスパイス（三角関係や輩に絡まれるという仕込み）を加えてやれば、かなりの確率でハッピーエンドだ。

しかし、もちろん恋に敗れる男たちもいる。

怪我の功名というべきか、失恋のおかげで、彼らはより強靱な兵士となった。

ミカサに無謀な片思いを続けるジャンの言葉は、哀れな男たちの胸にまつすぐに届く。

人は何故恋を思うと思う？

好きな女と付き合いたいからか？

ちがう！

好きな女と触れ合いたいからか？

ちがう！

思い出せ！

俺たちはただ……好きな女の笑顔を守りたかっただけじゃねえのか!??

ある者は笑い、ある者は俯き、ある者は怒る。

俺たちならできる！

いや、俺たちにしかできねえ！

必ず守り通すんだ！

この胸の苦しさに……心臓を捧げよ！

そして最後には、嗚咽混じりの野太い歓声が響く——愛の伝道師、爆誕の瞬間である。

「……どうかしたの？ そろそろブラッシングしてあげないと、ブー

「フヴァルトの機嫌損ねちゃうよ?」

と、クリスタが肩口からひよつこり顔を出して、心配そうにジャンの顔をのぞき込んだ。

途端に、ジャンはハツと我にかえる。

「いや、ちよつと考え事だ」

「本当かなあ……もしかして体調悪い? 試験まで休んでた方がいいんじゃないかな。ブーフヴァルトのお世話なら私がやっておくよ」

青い瞳が、気遣わしげに見上げる。

彼女の優しさに、ジャンは笑顔で対応した。

現時点で、104期の間には十分恋愛ムードが流れている。

愛の伝道師に出会えば運命の人と結ばれる——なんてジंकスマで出回ってるぐらいだ。

何にせよ、条件はそろった。

これでヘタレなライナーもクリスタをデートに誘うぐらいするだろう。

余計な手間掛けさせやがって……!

もう雰囲気ないから誘えねえなんて言わせねーぞ!

ジャンは唇を歪ませてニヤつく。

やつと運が向いてきたみてえだな。

これでアニとベルトルトも、良い方向に向かうはず——

そこまで考えて、ジャンはピタリと動きを止めた。

視界の端で、ノツポとチビのセットが通り過ぎた気がしたのだ。

声を潜め、クリスタに問う。

「……俺の見間違いかもしれねーが、いま出て行ったのってアニとベルトルトか?」

「えーつと、そうみたいだね。二人ともさつきまでいたのに、姿が見えないから」

「悪い。やっぱりブーフヴァルトのブラッシング頼めるか? ちよつと野暮用ができた」

早口に言うと、クリスタの返事も聞かずにジャンは走り出した。

虫の知らせか。

とてつもなく嫌な予感がする。

どこに行った!?!?

二人で抜けるなら壁外の話かもしれないねえ……ここから一番近くて、今の時間は誰も寄り付かないような場所——焼却炉!?!?

一足飛びに駆ける。

第一倉庫、第二倉庫を大回りに走り抜け、雑木林の中を突っ切る。

焼却炉が近付くと、ジャンは気配を消して木の影に身を寄せた。

何か聞こえる……誰かが言い争っている声だ。

慎重に顔を出して、確認する。

そこにはアニとベルトルトの姿があった。

よっしゃ!

予想通りだ。さて、こいつら何の話を——

「だから！僕はアニのことが好きなんだってば！」

時が止まった。

きつと104期の誰も聞いたことがないに違いない。

ジャンも思考を忘れ、ベルトルトの大声に呆気にとられていた。

そして、一拍遅れて正常な思考を取り戻す。

……この腐れ腰巾着超大型昼行灯野郎オオオオオオオオ!!!

何勝手に告ってんだよぶざけんなアアアアア!!!

主体性のなさが唯一の長所だったろオオオオオ!!!

## 十三話

「報告なら手短にして」

アニは周囲を警戒しながら、早口に言った。  
目すら合わない、刺のある口調。

いつもはライナーがいるから、彼女と二人きりなんて久しぶりで、額に汗がにじむ。

押し潰されそうな曇天の下、くたびれて俯く雑草の中に、煤けた石造りの焼却炉があった。

殺風景な場所で、掃除の時以外は誰も近寄らない。

内緒話をするには、うってつけの場所だ。

自分から呼び出したくせに、何から話せばいいのかわからなくなつて、ベルトルトは乾いた唇を湿らせた。

「ご、ごめん。話って任務のことじゃないんだ」

「じゃあ、何？ 極力話しかけない約束でしょ」

冷たさを増す口調に、慌てて言いつのる。

「ええっと、直接任務とは関係ないんだけど……ちよつと気になつたっていうか、確認したいことがあつてさ」

「ハッキリしないね」

「その……ジャンのことなんだ」

アニが眉をしかめた。

ベルトルトは思い切つて、

「僕の気のせいかもしれないけど、アニって最近ジャンと仲良いよね？ 仲良いっていうか、よく話してるなつて思つて」

「だから？」

「その……ジャンつて良くない噂があるし、目立つからさ。ほら、さつきもエレンと喧嘩してたし！ だから、アニもあんまり近付かない方がいいんじゃないかなーつて、ちよつと思つてさ」

ベルトルトは乾いた笑みを浮かべた。

ああ、喉が乾く。

我ながら嘘っぽい、どんどん上滑りしていく話だ。

話しながら、彼女のオーラがみるみる刺々しくなっていくのを感じていた。

「は？……私は誰にも近付くつもりなんてない。アンタたちと違ってね」

やっとこちらを向いた双眼は、鋭かった。

険のある眼差しに、ベルトルトは萎縮して身を縮める。

やばい……怒ってる。

どうしよう。

僕はただあの日のことが聞きたかっただけなのに！

汗がどつと吹き出た。

黙り込んだベルトルトに、彼女は「話はそれだけ？」と言って背を向けた。

そんな！

ここで聞けなかったら、もう機会なんてない——ツ！

焦って呼び止めようとして、「でも、ジャンと二人で出掛けてたじゃないか！」と言ってから後悔した。

アニが立ち止まる。

立ち止まったまま、振り返ってくれない。

そのまま沈黙。

彼女が動き始めるまで、動いちゃいけないと本能的に思い、反射的に呼吸すら止めた。

凍りついた空気の中に閉じ込められて、少しでも身動きすれば粉々に砕けてしまいそうだった。

失言だったとすぐに気付いたけれど、どうすればいいのかわからない。

様々な考えが頭の中で飛び交い、浮かんでは消え、結局、時間が過ぎ去るのを祈るような気持ちで見守っていた。

ベルトルトが我慢しきれず息を吐いたころ、ようやくアニが振り返った。

その瞳に、冷たい怒りを宿して。



「二人で出掛けたら、何？ 何を想像してるの？ アンタの糞みたいな妄想に、私を当てはめないで」

「……ごめん。僕はただアニのことが心配で」

「アンタに心配される筋合いはないよ」

アニが鋭く言う。

「楽しそうに訓練してるアンタたちに、言う必要もないと思ってた。けど、胸糞悪いから説明してあげる。最近のジャンは、おかしいよ。目立つとか、噂とか……そんな表面的なことじゃない。対人格闘で組んだ時、ジャンは私と互角に戦った。あの格闘術は、短期間で身につくものじゃない。相当の経験が必要になるはず。——まるで別人みたい」

「ちよ、ちよつと待つてよ！」

捲したてる彼女に、ベルトルトは困惑した。

唐突に始まったジャンへの不信感。

途端に、きな臭い雰囲気が漂う。

一体何の話？

話の流れがわからないんだけど……。

とりあえず、デートじゃなかったってことでいいんだよね？

しかも、アニの様子からして、ジャンに好意を持っているようにも見えない。

ほっとしかけたベルトルトに、アニが呟いた。

「私たちのこと、勘付してるかもしれない」

「……え？」

彼女の言っていることが、一瞬理解できなかった。

勘付してるかもしれない……？

言葉をなぞる。

その瞬間、衝撃が身体中を走った。

走り、駆け抜け、心臓に到達する。

大量の血液を排出して脈打つのを、感じた。

「そんな……まさか！ そんなわけないよ！ バレるなんて有り得ないだろッ！」

そうだ。有り得ない。

混乱する一方で、冷静な自分が言う。

そもそも壁内では、人間が巨人化できることすら知らないんだ。

たとえ僕たちの会話を聞かれたとしても、荒唐無稽すぎて信じられないはずがない。

「落ち着きなよ。私もバレてるとまでは思っちゃいない。もし本当にそうなら、殺意や敵意を隠しきれないはず。けど、ジャンから感じたのはもつと別の——」

アニは逡巡して、

「確証はない。ほとんど勘みたいなものかも。でも、不審なことは間違いないよ。二人で出掛けることも、ジャンの方から誘ってきたから。今までの関係を考えれば、不自然でしょ？」

「じゃあ、アニはそれを確かめるためにジャンと……?」

「何か探りを入れてくるかと思っただけだね。特に変わったことはなかったよ。今のところは大丈夫だと思う。しばらく泳がせるつもりだから、ライナーにはまだ言わないで」

ベルトルトは呆然と、「ああ」とだけ相槌を打った。

気が抜けたのかもしれない。

いや、逆かも。

急激に緊張しすぎてぼーっとするのかも。

どちらにせよ頭が回らない。

「勘付かれたかも」って、アニがこんなことを言うのは初めてだ。

彼女なりに、引つかかることがあったんだろう。

「ほとんど勘だから」って言うけど、君の勘って結構当たるじゃないか！

……ライナーに相談すべきじゃないのか？

けど、気のせい……考えすぎの可能性もあるし。

というか、ほとんど考えすぎだと思うけど。

卒団式が近付いて、僕らの二度目の襲撃は目前だ。

アニも過敏になってるんだろう。

だって、どう悪く転んだって、僕らの正体や計画がバレるってこと

は、やっぱり有り得ないと思うし。

もしかしたら、僕らに対する不信感とか違和感とか……そういうちよつとしたことを、ジャンは感じ取ってるのかもしれない。

その場合、ライナーはどうする？

ジャンを殺すのか？

ライナーなら、たぶん殺せつて言うと思う。

だから、アニはライナーには報告したくないってこと？

それってジャンを庇つてることになるんじゃないの。

けど、僕だつて同期を殺したくなんかない。

混乱するベルトルトの耳に、またもや衝撃的なセリフが飛び込んだ。

「わかつたでしょ？ 私は故郷に帰るために、ここにいる。呑気にダブルデートしてるアンタたちと一緒にしないで」

ダブルデート!?!?

急激な話題の変換。

その落差に、ベルトルトは精神的につんのめつた。

頭部を狙われたハイキックをやつと受け止めたのに、死角から飛んできた蹴りが急所に当たつた、みたいな感じ。

頭がクラクラしてくる。

ちよつと待つてよ!

何でアニが知ってるんだ!

というか、あれは別にデートじゃないし、僕はライナーに無理矢理付き合わされただけで——ッ!

「ま、アンタたちが何しようが、任務さえ忘れなければいいけどね」

「誤解だよ! あれはデートじゃ——」

「やめて。どうでもいい。興味ない」

アニは吐き捨てるように言った。

踵を返し、彼女の背中が迷いなく遠ざかる。逃げていく。

なんだよ……。

まるでバイ菌じゃないか。

何も聞かずに、勝手に決めつけて。

僕の気持ちも知らないくせに！

収まりのつかない苛立ちが、急激にベルトルトを襲った。

「だから！ 僕はア二のことが好きなんだってば！」

気付けば、叫んでいた。

今まで出したことのない大声で。

喉が痛い。

頭が痛い。

心臓が痛い。

耳の中の奥の方で、洪水みたいな音がして、水が入った時みたいに  
変な感じだ。

え……？

今のって本当に僕が言った？

もしかしてア二に聞こえた？

もう少しで壁の向こうへ、消えしまいそうだった彼女が振り向く。

ざあつと風が吹いて、雑草が順に揺れ、ア二の綺麗な髪の毛を吹き

上げ、かき混ぜていった。

故郷の風だ。

ベルトルトは思う。

温度も、匂いも、湿り気を帯びて肌を撫でる感覚も——故郷と壁内  
じゃ全然違う。

なのに、そこにア二がいるだけで故郷の風だと思えた。

ア二がいれば、僕はいつだって故郷を感じる事ができた。

だから、怖くても今日まで乗り切れたんだ。

美しく乱れた金髪を、ア二は丁寧に手櫛で整えた。

そして、まっすぐに目が合う。

冷たくも温かくもない、奇妙な色の眼差しだった。

「私は嫌いだよ、ベルトルト」

ア二は無表情で、そう言った。

\*\*\*

なんだか頭が重い。

目の奥がずんとして、だるくて仕方なかった。

寝不足のせいもあるが、精神的に鬱々としているのも一つの原因だろう。

人が振られる瞬間を、初めて見てしまった。

しかも相当ヘビーな振られ方だ。

「好きだ」って告って、シンプルに「嫌い」なんて返ってくることあんのかよ？

……いや、あるか。

っーか実際見ちまったしなあ。

ジャンは溜息を吐く。

のろのろと洗面所に向かって顔を洗い、そのまま水でざつと髪を撫で付ける。

こうしておくで、勝手に乾いて寝癖が多少マシになる気がする。

洗いすぎてクタクタのシャツに腕を通して、一つ一つ数えながらボタンをかけた。

時間ギリギリまで粘って、ジャンはようやく食堂へ向かう。

なんで俺が気まずい思いしなきゃいけないーんだよ。

結果的に、振られてくれて良かっただろ。

そうだ。手間が一つ省けたと思えばいい。

自然、足早になる。

朝の食堂のざわめきが近づいてくる。

というより、なんかリアルなんだよ。

他人事とは思えねえっーか……。

まー、あんだけハッキリ振られてくれれば、次に行きやすいだろ。

恋愛の傷は、恋愛でしか癒せねえって言うしな。

ここが愛の伝道師——腕の見せ所だ。

待ってるよ、ベルトルト。

俺がバッチリお前の運命をプロデュースしてやるぜ！

意気揚々と、食堂の扉を開く。

すると、訓練兵たちの歓声がジャンを出迎えた。

度肝を抜かれて辺りを見渡すと、一つのテーブルを囲むように人だかりができている。

興奮した様子で、ある訓練兵が大声で言った。

「ユミルとベルトルトって、いつから付き合いはじめたの!?!」

人だかりの隙間から見える。

賛辞と祝辞の声を存分に浴びながら、ユミルとベルトルトが並んで朝食を食べていた。

「……………は?」

## 十四話

……待て待て待て。

俺は寝ぼけてんのか？

いくらなんでもありえねーだろ！

ベルトルトが振られたのは昨日だぞ!!？

それで次の日には彼女いるってどういう状況だよ！

んで、相手がユミルって！ ユミルって！ ユミルだぞ!!？

あのガサツで、口も性格も悪くて、男か女かわかんねえぐらいで――

――マジでなんでだああ!!？

激しく目眩がした。

お、落ち着け。

とにかく現状を正しく理解しねえと。

これは何かの間違いだ。

ああ、そうに決まってる。

ジャンは、そつと目を開く。

視線の先では、変わらぬ現実。

ギャラリーに煽られて、ユミルがベルトルトに「あーん♡」して

るところだった。芋を。

頭の中の何かがぶつとぶのを感じた。

突き動かされるようにずんずん歩いて、人混みをかき分け、ちよう

ど芋を食べさせ終わったバカカップルの真横に立った。

ものすごい剣幕で。

ただならぬオーラに驚いて、二人が弾かれたように顔を上げる。

目を丸くしたユミルが、ジャンの顔を見て安堵した。

「つたく、驚かせんなよ。すげえ勢いで来るから、教官様かと思っただ

ろ?。」

へらりと笑うユミルを無視して、ジャンはベルトルトを凝視した。

彼はまだ目を見開いたまま、驚きで固まっていた。

額に浮かぶ汗もデフォルトだ。

ベルトルトラしいと言えば、らしい反応。

驚いて、固まって、冷や汗の三点セット。  
いつものベルトルトだ。

しかし、よく見ると、目の辺りが腫れてほんのり赤いことに気付いた。

薄らクマもあり、どんよりしている。

恋人ができて幸せというには、憔悴しきった顔だ。

そりやそうだ。

長年の片思い相手にこっぴどく振られて、そう簡単に立ち直れるはずがねえ。

やっぱりユミルと付き合ってるなんて、何かの間違いだ。

ジャンはホツと胸を撫で下ろし、馬鹿げた話を笑い飛ばそうとした時、ベルトルトの首筋に目が留まった。

首筋のある一点に。

逞しく太い首。

少し日に焼けた褐色の肌。

そこに、一点の赤い印があった。

ピシャーリーン！

ジャンの脳に、電撃が走る。

まさに電撃的に、赤い印——その意味が脳裏に焼き付いた。

にも関わらず、まだ事実を受け入れられない。

おいおいおい。

なんだよ、これ。

……虫刺されか？

そうだ！ そうだよな！ 虫に刺されたんだよな！

それ以外なんだよっつー話だろ！

そうだろ、ベルトルト！

ジャンの視線に気付いたのか、虚な瞳をしていたベルトルトがハツとして、赤い印を手で隠した。

彼はすぐに俯いてしまい、その表情は分からない。

が、赤い印から滲み出るように、みるみる首筋が染まっていく。

おい……嘘だろ。



それ、まさか……本気なのかよ。

ジャンは狼狽えて、よろよろと後ずさる。

もう疑いようがない。

決定的証拠だ。

ベルトルトてめえええええええ!!!

やりやがったな!!!

この裏切り者が!!!

この糞みてえな世界で、104期のほとんどが夢叶わぬまま散っていったつーのに!

俺だつて……俺だつてなああああああ!!!

ジャンの目が、血走る。

心の中で血の涙を流しながら、殴りかかりたい衝動をギリギリ抑え込み、代わりにユミルの手首を握った。

突然の行動に、彼女は一瞬驚いたが、すぐにニヤついて、

「おいおい。人の女に気安く触るなよ。ベルトルさんが黙っちゃいねーぞ?」

「……いいから。ちよつと来い」

絶賛インタビュー中だった野次馬共のブーイングを置き去りにして、なんとかユミルを人気がない廊下へ引つ張り出す。

訓練兵たちの喧騒が遠のく。

朝日の中でキラキラ光り落ちる塵埃が、唐突に現れた侵入者によって、再び宙に飛散した。

ようやく解放されたユミルが、不満げに言う。

「何のつもりだよ。せつかく楽しく飯食ってたつてのに」

「本気でベルトルトと付き合ってたのか? いつから付き合ってる?

いや、何でだ? つーか、どっちから告白してどういう流れであんなったんだよ?!?」

矢継ぎ早の質問に、めずらしくユミルがたじろぐ。

切れ長で鋭い目が、限界まで開かれた。

白目の面積がぐつと広がる。

意志の強さを凝縮した黒目。

この油断ならぬ三百眼を、ジャンは苦々しく思っていた。ユミルは、信用できない。

性格が悪く、気まぐれで、利己的な人間だ。

平気で仲間を裏切り、嘘をつく。

彼女について断言できるのは、クリスタを大事に思っていることぐらいだろう。

ベルトルトと付き合ってるのだから、正直かなり疑わしい——いや、待てよ。

ちよつとした引つ掛かりを覚えた。

本当にそうだろうか？

ユミルにとって、ベルトルトは無価値なのか？

渾沌の時代に兵士となった104期訓練兵は、そのほとんどが壮絶な死を迎えたが、中でもユミルの最期は特殊だった。

彼女は自らの意志で、ライナーとベルトルトについて行き、巨人の力を渡して死んだ。

しかも、クリスタと共に生きる未来を捨てて。

あれだけ異常な執着を見せていたのに、クリスタを選ばなかった。

ユミルが最後に選んだのは、ベルトルトだ。

正確に言えばベルトルトとライナーだろうが、ヤツの「助けて」という叫びに、ユミルが応えたのは明白。

そう考えるなら、ずっと前からベルトルトに好意を持っていた可能性が高い。

少なくとも、気にはかけていたはずだ。

この間のダブルデートで、二人の仲が急接近する何かがあったんだ。

それしか考えられねえ。

そりゃ、つまり……俺の努力がついに実を結んだってことだろ！

ジャンの胸に、熱いものがこみ上げる。

「おめでどう。本当におめでどう。ああ、ユミル。俺はどうすりゃいい？ とりあえず赤飯は炊いた方がいいよな？」

「遠慮しておく。とりあえず離れる。気持ち悪いんだよ」

勝手に盛り上がるジャンを冷めた目で見下して、彼女は肩に置かれた手をあつさり振り解く。

「私の恋愛事情に、よほど興味があるらしいな。いいぜ。少しだけ答えてやるよ」

声質は高いのに、不思議な低音。

本人を知らなければ、そこそこセクシーに聞こえる低音ボイスで、思いつきり皮肉っぽく言われた。

ユミルは刺々しい視線をついと逸らし、張り詰めた空気を幾分か緩める。

「こう見えて、私は弱くてずるい人間なんだ。選ばれないことがむなしいって、普通に思ったりする」

投げやりにも聞こえる。

適当さを演出しようとしてうっかり本気すぎた、みたいな声色。

今更何言ってるんだよ。

お前が弱くてずるいってことぐらい、俺らの間じゃわりと有名な話だったぜ。

酒を飲むたびに、ヒストリアがくだを巻いてたからな。

「ユミルは本当は優しい」とか「ちよつと不器用なだけ」とか「寂しがり屋」とか——まあ色々言っていたが、「そりゃ、お前限定の話だろ」と俺は思ってたけどな。

だけど、本人からストレートな弱音を吐かれて、いきなりで、動揺した。

「じゃあ、良かったじゃねえか。付き合ってるんなら、ベルトルトに選ばれたってことだろ？」

動揺を隠そうとして聞く。

ユミルはいつもの調子に戻って、「ミカサに選ばれないお前は、さぞ惨めだろうな」と笑った。

うるせえよ！

嫌なこと思い出させんな！

ミカサを思うと、死の間際のことを思い出す。

『エレン』

蘇る声。

呪縛のような声。

拷問のような声。

嫉妬でどうにかなくなってしまいそうだ。

選ばれないってことは、その他大勢だ。

選ばれなかったすべての一部だ。

ミカサにとつて、俺は何でもなかった。

俺が死んだ瞬間、その事実が転がっただけのことだ。

「関係ねーだろ」と答えた。

そうだ。

俺はやり直す。

そうすれば、あの未来は跡形もなく消える。

この苦しさも消えるはずなんだ。

耳をすませば、いつのまにか訓練兵のざわめきは静まっていた。

代わりに、慌ただしい靴音が床の振動と共に伝わってくる。

ユミルが呟く。

「つまり、私もお前と一緒にだ」

「は？ ……どういう意味だよ」

「惨めな思いをするのも、惨めなヤツだって思われるのも、馬鹿らし

いっつーことだ」

そう言つて、踵を返す。

ジャンは呼び止めようとして、やめた。

どうせ聞きたいことには答えないだろうと思つたからだ。

彼女はそのまま立ち去るように思えたが、ふいに立ち止まって、肩

越しに振り返る。

「私と違って、クリスタは手強いぞ。なんせあいつは、自分から傷付きにいく馬鹿だからな」

カカツと軽い笑い声を立てて、今度こそユミルは振り返らなかった。

\*\*\*\*\*

両思いなんて、本当に存在するのかよ。

好きなヤツが、同じように自分を好きになるなんて奇跡すぎるだろう。

バシヤバシヤ水滴を飛ばして、顔を洗う。

早朝の水はやたらと冷たく、毛穴を刺激して皮膚が突っ張る感じがした。

マルコとコニーはまだイビキをかいていて、ジャンは起こさないように注意しながら、手早く準備を済ませ、静かに部屋を出た。

まだ少しボーツとする。

ユミルの言葉が頭に残っていたせいか、昨晚は寝付きが悪かった。卒団式も近付き、ターゲットの恋愛模様もいよいよ動き出したというのに、いまいちシャキッとしない。

廊下はしんと静かで、朝の冷気が漂っていた。

立体機動の朝練のための早起きだったが、それにしたって早すぎたみたいだ。

音を立てることさえ忍びなく、ジャンはゆっくりと足を進める。

やがて長い廊下の奥の方に、少女の後ろ姿が見えた。

可愛らしい小柄なシルエット。

まだ薄暗い明け方の微かな光を集めて、美しい金髪に天使の輪ができています。

「クリスタ」

控えめに名前を呼んでみた。

反応はない。

聞こえなかったのか？

不審に思いつつ、ジャンは小走りに駆け寄って、彼女の肩を軽く叩いた。

セミロングの髪が波打つ。

「何?」

「……は?」

目が覚めた。

完璧に。

唾然とするジャン。

少女の瞳が、凍りつく。

背筋に冷たいものが走り、ジャンは反射的に身を引いた。

次の瞬間、眼前を過ぎる彼女の靴先。

ジャンはバランスを崩し、尻餅をつく。

壁に頭を強打、目の前にブーツの裏が迫り——それを紙一重で首を傾げて躲した。

顔の真横を、ブーツが凄まじい音を立てて踏み抜く。

「へえ。よく避けるね」

壁に足をかけた状態で、アニが感心したように言った。

「お、お前なあ！——ッ殺す気かよ!?!?」

「アンタが悪いんですよ？ 女の子の顔を見て、幽霊でも見たみたい  
な反応。失礼なんじゃない？」

「だからってやりすぎだろうが!」

まだ心臓がバクバクいつてる。

アニは何事もなかったように足を下ろして、乱れた髪を手で払う  
と、金糸のような髪がさらりと踊った。

「それで、感想は？」

「は？」

「だから、今日の私に感想はないのって聞いてるんだけど」

出会い頭の無差別殺人女型巨人。

なんて本音を言えば、本当に殺されることだけはわかる。

こんなにわかりやすい正解があるのに、心理的な抵抗がものすご  
い。

ジャンは怒りを抑えて、立ち上がる。

「その髪型、似合ってる……な」

絞り出すように言った。

「……ありがとう」

女型の巨人の瞳が、氷からシャーベットぐらいになって、その視線  
がまだ寒いんだけど結構柔らかく感じて、途中から普通の女の子みた

いに変わった。

ストレートに下された髪と、微かな微笑み。

ちよつと、マジでかわいいな。

「愛の伝道師さんに褒められると、自信がつくよ」

世間話みたいに言われて、反応が遅れる。

「……何で知ってる」

「怖い顔しないでよ。大丈夫、チクるつもりなんてないから。私は、ただ相談に乗ってほしいだけ」

「俺に相談？」

ア二はこくりと頷き、「恋愛相談だよ」と微笑んだ。

## 十五話

私とベルトルさんの馴れ初め？

まあ、自然と……って感じだな。

勘弁してくれよ。

二人だけの思い出ってやつだ。

シャイな男なんだよ。

赤くなっただかいいだろ？

わらわら集まってきた同期たちに囲まれて、適当な惚気話を口先で答え、心の中では舌を出した。

アニがこちらを見ているのに気付き、ユミルはすかさずベルトルトに擦り寄る。

鼻腔に広がるウイスキーの微かな香り。

「もつと水飲んどけよ。匂いでバレるぞ」と囁いた。

慌てて水をあおる彼氏が、バカワイイ感じで笑える。

ちやうど食堂に入ってきた馬面野郎は、巨人でも見たような顔で驚愕していた。

「あーん♡」

ユミルはにっこり微笑んで、ベルトルトの鼻先に芋を突きつける。

顔面蒼白。

男は虚な目で、機械的に口を開けた。

被害者面とは、感心しねえな。

覚えてないだろうが、そもその責任は、お前にあるんだぜ。

ベルトルさんが悪い。

じゃなきや、こんな茶番もなかったんだからな。

昨晚は、盗みやすい夜だった。

月夜で目はきいたし、教官の見回りも少なかった。

食料庫には何度か忍び込んでいるが、芋女と違って、バレたことはない。



手に馴染むボトル缶に、教官方専用の上等なウイスキーをなみなみと注いで、ユミルは気分良く寮に戻るはずだった。

帰路の途中で、ベルトルトを見つけた。

一人でふらふら歩いて、明らかに挙動がおかしい。

いつもなら声なんてかけないのに、酒が手に入って気が大きくなっただろう。

「よーお」なんて声をかけると、ボトル缶の中身を聞かれた。

華麗な盗みの手口を武勇伝混じりに話してやると、突然、ヤツは貴重な酒を奪い取って一気にあおり、そして、泣き崩れた。

流れるような暴挙。

あつという間の出来事にしばし呆然とするが、後の祭りだ。

もともと沸点の低いユミルが、怒りで震えたことは言うまでもないが、それも数時間続けば虚無感に落ち着く。

「ううっ……だから、ぼくはつきあいたいか……！　ぜっんぜんおもってなくてええええええ」

「そうだな。勢いってあるよな」

「ああああそうそう！　ヒック、う……なのになのにあああバカか！　うえッ……ちよーしにのって——きえたいいいいいあああ！」

「奇遇だな。私も早くここから消えたい」

「でくのぼう……よくいきてるな！　ああああア二がなんで——」

「そりゃーひどい女だな」

「アニはやさしいよ！　きみにアニのなにがわかるんだ！」

「私はどうすりゃいいんだよ」

酔っ払いが、めでたく何度目かの吐瀉物を樹木にぶちまける。

帰りたい。

が、これを放置すれば私の盗みもバレるだろうな。

アホみたいにならば喋っちゃまって、こりや明日になったら記憶飛んでるだろ。

木に背中を預けて、男が座り込む。

かしづくように項垂れた。

無防備なつむじが晒されていて、それを恨みを込めてグリグリ押しやる。

無反応。

強めに、堅い短髪を引っ張る。

無反応。

デコピン。

無反応。

いつも見下ろされてるから、ちよつと気分がいい。

「ぼくは」

やがてベルトルトがぼそりと呟いた。

ユミルはつむじを見つめながら、「何だよ」と尋ねる。

「いちばんに、なりたかつたんだ。アニの……いちばんに」

消え入るような声だった。

さつきまでギヤーギヤー騒いで泣き喚いてたくせに。

力なく投げ出された両足と、だらりと垂れ下がる両腕。

頭部は深く沈み、落ち込んでいた。

一番か。

いかにもガキ臭い、くだらない悩みだと思った。

なのに、困った。

こいつの気持ちだが、ほんの少しだけわかってしまう。

好きの意味が違うけれど、それとよく似た感情ならユミルも知っていた。

金髪碧眼の美少女が、脳裏に浮かぶ。

ユミルは屈み、至近距離からベルトルトの顔をのぞき込む。

痛々しく泣き腫らした目。

また一つの涙が、彼の頬をつたう。

「じゃあ、ベルトルさん。私の一番になるか？」

「……………え？」

彼の瞳に、ぼんわりとした光が灯る。

「ずるくて、偽物の一番でも、ないよりマシだろ？　少なくとも、今よりは惨めじゃないはずだ」

ユミルは彼の頬を軽くつねって、  
「その代わり、ベルトルさんの一番にも私を置いてくれよ。それぐらい、いいだろ？」

一番の意味をわかってるのか、いないのか。

ベルトルトは、へにやりと笑った。

答えになってないが、まあいいか。

……酒が抜けてから、言い逃れされてもつまんねーな。

ふと思いついて、無防備な彼の首筋に証拠を残した。

赤い印——ちよつとした契約だ。

正気に戻って慌てふためく姿が目には浮かび、耐えきれずに吹き出す。

せいぜい慌てろよ。

私だって迷惑かけられたんだ。

これでイーブンだろ？

\*\*\*

最近の私は、変だ。

ユミルとベルトルトが付き合ってるって聞いた時から、胸の奥がもやもやして、うまく笑えない。

なんでこんな気持ちになるんだろう。

自分のことなのに、よくわからない。

「お前さー、何で怒ってるの？」

だから、ユミルにそう問われた時、クリスタは面食らった。

自分でもわからなかった胸のつかえを、ぴたりと言い当てられた気がしたからだ。

水汲みの当番は、ユミルと二人きりだった。

彼女が話しかけてくれないから、自分から口を開くのも気まずくて、黙々と作業を進めてようやく終わりに差し掛かったところに、こ

の質問。

動揺して、危うく桶をひっくり返すところだった。

水が桶の中で飛び返って、波打ちながら次第に静かになる。

それを見守ってから、クリスタは答えた。

「私……怒ってるように見えるかな？」

「ああ、見えるな」

石造りの井戸に腰掛けて、ユミルがため息をつく。

「私のこと避けてるだろ。バレバレなんだよ」

「避けてるなんて——」

否定しようとして、言葉につまった。

クリスタはかぶりを振って、

「ごめんなさい。避けてるつもりはなかったの。ただ……その、話しづらくて」

「何で？」

「なんでって……」

「つまり、私と話すどころか、顔も見たくないぐらい怒ってんだろ？  
何でだよ」

「……わからないの」

クリスタは長い睫毛を伏せる。

自分のことなのに、わからない。

私だって、ずっと困ってたよ。

クリスタはいい子だから、いつも笑顔で、誰にでも優しいから。

なのに——そっか。

私、怒ってたんだ。

ユミルのこと、ずっと怒ってた。

一方的に避けるなんて、ユミルはどんなに傷付いたんだろう。

悪いことをしている自覚だけはあつて、なのにどうしても彼女の前に立つと喉がきゅつと締まる感じがした。

私の中身は、空っぽだ。

クリスタならああする。

クリスタならこうする。

心の中の大半を占めている偽物の人格は、まるで綿菓子のように柔らかくて大きい。

その周りに塵芥の——本当の自分がある。

風が吹けば、舞い上がって鬱陶しく主張してくる。

捨ててしまいたいのに、それもできなくて、ずっと見えないフリをしてきた。

ユミルに怒っているのは、たぶんその部分。

汚くて触りたくない、掴みどころのない塵芥。

俯いてしまったクリスタを見つめ、ユミルが意地悪く言う。

「当ててやろうか。お前は、私がベルトルさんと付き合ってるのが、気に入らないんだよ」

「ち、ちがう！ そんなこと思ってるわけないよ！」

「裏切られたって、思っただろ？」

「……え？」

ユミルの射抜くような視線が、心臓に刺さる。

「要するにお前は、私に恋人ができるなんて納得いってないんだ」

「ちがう……」

「いいや、違わないね。性格が悪くて、愛されたこともなくせに、誰かを愛せるはずねえって、そう思ってるんだろ？」

「ちがうってば！」

思わず、声を荒げた。

頭が真っ白で、うまく息ができない。

苦しい。

なんで？

なんで私は、こんなに苦しいの？

「なあ、クリスタ。お前の生き方に、口を出す気はねーけどな。お前が思うよりも、世界つてのはいい加減だ。いい子も悪い子も、人間性なんて関係ねえ。自分勝手に、誰かを好きになったりするんだよ」

ユミルは寂しそうに、そう言った。

## 十六話

彼女のブーツが、高飛車な音を立てて歩む。

歩調に合わせてブロンドが波打ち、前髪の隙間から涼やかな目元が見え隠れした。

たむろしていた男たちは、自然、左右に分かれ、道を開けていく。

彼女は凛と背筋を伸ばして通り、その後ろ姿を、男たちは熱い視線で見送った。

「お待たせ。悪いね、席取ってもらって」

「ああ、問題ねえよ」

「……何？ そんなしかめ面されると、さすがに傷付くよ」

「あー、わりい。まだちよつと慣れてねえだけだ」

ジャンが気まずそうに目をそらす。

アニはこぼれた髪の毛の束を耳にかけ、

「そんなにこの髪型が気に入った？ 遠慮しないで、毎日褒めてくれたっていいのに」

アニの流し目が艶っぽくジャンを見つめた。

背中に突き刺さる男たちの嫉妬が痛い。

ベルトルト×ユミルカップルが104期を盛り上げたのも束の間、

アニのイメチェン騒動が話題をかっさらった。

イメチェンというか、ほとんど別人レベルだ。

髪型が変わっただけではない。

信じられないことに、彼女はよく笑うようになった。

話しかけたって三語返ってくれば機嫌が良い方と言われていた、あのアニが！

デレという最強の武器を手に入れた彼女の評判はうなぎ上りで、クーデレ最高だの、叱られたいだの、ブーツに踏まれたいだの——しまいには女王様なんて呼ばれて、すっかり注目の的だ。

本当に女王様になるのは、クリスタの方なんだけどな。

……なんつーか、ややこしい話だ。

教官の解説を、訓練兵たちが必死にノートに書き写していく。座学は決して点数の低い科目ではない。

教室の後方に座るジャンは肩肘をつきながら、皆にならって、板書をさらさらと書き写した。

右前方に視線をズラせば、ユミルとベルトルトが並んで座っている。

先日のユミルの発言は気になるものの、とりあえずは仲良くカップルをやっているらしい。

あいつらは、ひとまず様子見しとくしかねえな。

今の問題は、こつちだ。

左に視線をズラす。

世界一かわいい幼馴染を隣に置いて、死に急ぎ野郎が座っていた。

……けっ、またエレンかよ。

なんでこいつばかりモテるんだ！

女ってわっかんねーなあ。

憎たらしい背中を睨みつけて、思わず舌打ちをする。

ふいにシャツの袖を引っ張られた。

ちらと視線を向けると、アニがノートに書いた一文を指差す。

『私の好きな人が、気に入らない？』

意外と可愛らしい丸文字。

本人の性格もこれぐらい丸ければ、苦労はねーのと思う。

彼女は軽いタッチで、書き足した。

『エレンのこと』

『あいつのことは元から嫌いだ』

『そう？ 嫉妬してるように見えた』

はあ!?？ んなわけねーだろ！

小さく息を耐える音が聞こえた。

彼女が口元に手を当てて笑いを堪えている。

ジャンは怒りを込めて、返事を書き殴る。

『バカ言ってるんなよ。俺は協力するだけで、結局はお前の頑張り次第なんだからな』

『わかってる。アンタが味方なら、心強いよ』

その後も、アニは教官の目を盗んで、

『今日は私から挨拶した』

『そうか』

『ちよつと話せた。午後の対人格闘技、一緒に組みたいってさ』

『よかったな』

『その後、ミカサが誘ってたけど断られてたよ』

『すげえな』

彼女はメモでもするように、『エレンが——』または『エレンは——』の書き出しで始まる文を、いくつも書いていく。

ぶつちやけ、どうでもいいことばかりだ。

報告するまでもない、くだらない内容。

それだけならまだマシなレベルで、彼女は一通りの報告を終えると、もう何千回も聞いたエレンとの嬉し恥ずかしエピソードをつらつらと並べ始める。

正直、どう答えればいいのかわからない。

苦しまぎれに、『そうか』『よかったな』『すげえな』の三語を使い回していたのだが、彼女は気にしていないようだった。

たぶん返答には、さほど興味がないんだろう。

恋愛相談にのってほしい。

そうやってきたのはアニの方からなのに。

具体的な策を練るでもなく、こうして惚気話になる前のぐずぐずした話を延々と聞かされる日々だ。

あと三ヶ月。

こんな調子で、交際まで到達できるのだろうか。

彼女に気付かれないうちに、ジャンは息を吐いた。

しかし、アニが変わったことは確かだ。

雰囲気は柔らかくなつたし、エレン以外の奴とも楽しそうに話してる。

難攻不落に思えた彼女の突然の変化。

それは喜ばしいはずなのに、なぜかジャンを落ち着かない気持ちに



させた。

一言で言うなら、アニらしくない。

一斉に教材を閉じる音がして、ジャンは我に返る。

何事もなかったように、アニはツンとすまして席を離れていった。ようやく解放されたか。

ジャンがホツと胸を撫で下ろした時、突然、肩を掴まれた。

驚いて顔を上げる。

と、そこにはそばかす面。

最近色々とありすぎて、絡むのはずいぶん久しぶりのような気がした。

「驚かせんなよ、マルコ。なんだよ急に——」

「おい、バカ。ちよつと来い」

低い声が、唸るように言った。

返事をする暇もない。

ジャンは胸ぐらを掴まれ、無理矢理引っ張られる。

引っ張られるというより、ほとんど引きずられた。

いつも温厚な彼の暴挙に、訓練兵たちはギョツとして、二人を見送った。

教室を出て、角を曲がり、人気のない廊下にたどり着く。

そして、勢いのまま。

マルコは、壁に叩きつけるようにジャンを押しさえつけた。

骨に衝撃が響く。

ジャンは苦痛に顔を歪ませて、

「いつてーな！ 何すんだよそばかす野郎！」

「黙れよ。恥知らずめ。お前は何をやってるか、自分でわかっているのか!?？」

額には青筋を張り、物凄い剣幕で。

怒鳴るのを抑えきれず、語気を荒げ、マルコが詰め寄る。

その剣幕に、ジャンは息を呑んだ。

真面目くんと、抜き身すぎる性格。

衝突することは多かったが、ここまで彼を怒らせたことはなかった。

た。

そして、察する。

ジャンはマルコの手首を掴み、押し戻す。

「ああ、俺は十分わかかってるつもりだ。平和ボケの真面目くんに諭されなくたってな」

「お前——ッ」

マルコが声を潜める。

「成績を売るなんて、バカなことは今すぐやめるんだ。どういう事情かは知らないが——いいや、どういう事情にしろ、許されないだろ」  
彼は、さらに何か言おうとしたのを飲み込んで、

「ジャン。お前が何かしようとしていることは、わかっている。なぜ僕に相談しない？ 何を焦っている？ 僕は、お前のふざけたところは気に入らないけど、お前の信念には一目置いてるんだ。お前のやることには、一本筋の通った考えがある。どんな噂があっても——」  
「いいから離せよ」

マルコの言葉を遮り、その手を振り払った。

「その噂、言つとくが全部本当だぜ」

ジャンは、マルコを睨みつける。

「理解はいらねえ。ましてや、協力も必要ねえ。お前は、憲兵団に入れるかどうかだけ気にしてりやーいい」

そう言い捨て、背を向けた。

あと三ヶ月で、人類の運命と、同期の生死が決まる。

アニとライナーを意地でもなんとかしねえと。

同期の立体機動のレベルも、十分とは言えねえ。

まだやることは腐るほどある。

悪いな、マルコ。

残念だが、テメエと話し合う時間はねえんだ。

加えて、相談したとして、解決できる問題とも思えねえ。

第一、俺の考えにお前はついて来れねーよ。

## 十七話

正直、ライナーとクリスタのことは、ある意味では諦めていた。当初は、万が一付き合うこともあるかもしれない、なんて安易に考えていたが――。

今となつては、ジャンは別の期待を寄せている。

ライナーが、片思いを拗らせることを。

ライナー攻略において、そもそも交際は絶対条件ではない。

大事なことは、故郷を捨て、任務を放棄するほど大切な人間を、壁内に作ってもらうことだ。

その点で言えば、片思いは強い。

圧倒的だ。

むしろ両思いよりも、相手への執着心を強くさせる。

いわば愛の牢獄。

盛りのゴリラを入れるには、ちょうどいい檻だ。

ジャン・キルシュタイン――愛の牢獄に囚われた、不憫な男がなせる発想だろう。

クリスタのヒロイン力なら、ライナーを狂わせることすら可能だ。

つか、もうそこに賭けるしかねえ。

クリスタを絶対死なせたくねえってところまで、とにかくベタ惚れさせてやればいいんだ！

「……ジャン？ どうかしたの？」

天使の顔にぴったりな、可愛い声。

クリスタの呼びかけに、ジャンは「悪い……聞いてなかった」と気まずそうに頬を掻いた。

第一倉庫前、夜の時間。

暗がりの石段に、一人分の間隔を開けて、二人は座っていた。

地面に置かれたランタンが、下側からぼうつと照らして、二つの影をチラチラと揺らす。

クリスタとは、立体機動の訓練が朝練に変わってからも、度々ここ

で落ち合っていた。

彼女はある程度の事情を知った上で、もちろん成績を売っていることには眉をひそめたものの、104期の立体機動レベルを上げたいというジャンの思いに協力してくれていた。

有難い相棒だ。

ジャンは、揺れるランタンの火に見入る。

灯火に吸い寄せられて、遠くの暗がりから、蛾や羽虫がすーっと飛んできては、飛び込んで焼け死んでいく。

そのうち、微かに聞こえるようになった虫の音も絶えてしまうんじゃないかと思えた。

クリスタは僅かに身動きして、遠慮がちに口を開く。

「もしかして、何か悩んでるの？ ……今日の座学するとき、マルコと言いつ争ってみたいだけだ——」

「関係ねえだろ」

冷たく遮った。

そして、すぐに後悔する。

ああ……クソ。

こんなの、完全に八つ当たりだ。

「あー、いや、違うんだ。クリスタが悪いんじゃない……すまねえ。ちよつと疲れてて、俺が勝手に……イラついてただけだ」

言葉がつかえて、うまく出てこない。

彼女は静かに微笑む。

「謝らないで？ 大丈夫だよ。ジャンは、すつごく頑張ってるもんね」

「……頑張ってる？ 俺が？」

そうは見えねーだろ。

彼女の意外な言葉に、ジャンは目を白黒させた。

自分では、人類を救うために頑張ってるつもりだ。

精一杯、やってるつもりだ。

最善を尽くしているが、それじゃ足りねーことも理解してる。

アルミンやエルヴィン団長のような突飛なアイデアは、俺には浮かばねえ。

その分、足使って、身を切って、器用貧乏に立ち回ってきた。

まあ、それも結果が出なけりや何の意味もねえが。

こいつらから見れば、俺の行動は意味不明だろう。

成績は下がり、愛の伝道師なんてバカなことを言い出して、人の色恋沙汰に首をツッコミまくる。

どう見たって、ふざけた野郎の間違いだ。

クリスタは少し考えて、考えながら、ゆっくりと話し出す。

「私には、ジャンが何をしようとしているか、よく分からないんだけどね。でも、ジャンが頑張っていることだけは、すつごくわかるんだ。えーっと……わかるって言うのは、ちよつとおこがましいかな……うん、伝わってくる。そんな感じ」

そして、あどけなく笑う。

「私は、ジャンにたくさん助けてもらってるから。私も、あなたの助けになりたいの」

ストレートな言葉だった。

火明かりに照らされて、彼女の頬が染まって見える。

実際、染まっているのかもしれないと思った。

「……じゃあ、さっきのもう一回言ってくれねえか？」

「え？ さっきのって？」

彼女は、きよんとんとして聞き返した。

ジャンは明後日の方を向いて、「あー、だから……頑張ってるってやつ」と小声で呟く。

クリスタは長い睫毛をハタハタさせて、それから急に立ち上がった。

「ジャンは、頑張ってるよ！ ものすつごく頑張ってる！ 毎朝大変なのに一番早く準備しに来たり、一人一人の練習メニュー作ったりとか！ あと厳しいこと言う時は、必ず私にフオローしといてくれってお願いするし、でもそういうこと皆には言わないし！ 伸び悩んでる子には、真剣に話聞いてあげて、ちゃんと具体的な解決方法考えてあげて——そういうところ本当にすごいと思う！ 私はとっても尊敬してるよ！ このあいだも——」

「わかった！ もう十分だよ！」

ジャンが大声で遮る。

片手で顔を覆って、俯いた。

俺はバカか！

甘えてんじやねえ！

褒めてほしいとか、どんだけガキなんだよ！

こんなに一生懸命に、いざ正面から言われると、情けねえわ痛々しいわ——そして自分の単純さが嫌になる。

とても顔はあげられそうになかった。

「……元氣出た？」

「ああ、おかげさまで……ありがとな」

顔を覗き込もうと近寄ってきた彼女の髪を、ジャンが乱暴に混ぜる。

クリスタは、「わわ！」と叫んで大袈裟に慌てたり、らしくない軽口を叩いたりして、それが結構おもしろくて笑えた。

そういや、ユミルが言ってたっけ。

クリスタは手強いとか、自分から傷付きにくとか……。

今みたいに他人の心配ばかりして、たしかに自己犠牲の強いヤツだとは思うが。

ジャンはふと思いついて、聞いてみる。

「お前はどうかなんだよ」

「え？」

「悩みとか、ないのか？」

彼女は少しためらって、

「悩んでるってほどでもないんだけどね。ライナーから二人でご飯行こうって誘われちゃって……ジャンはどう思う？」

「行ってこいよ！」

食い気味に答えて、慌てて言い直す。

「とりあえず飯ぐらい行ってやれよ。同期で親睦深めとくのもいいもんだろ」

「うん、そっか！ ジャンがそう言うなら、行ってこようかなあ」

クリスタは、形の良い唇で微笑んだ。

次の日、マルコとは目すら合わなかった。

また次の日、心配したコニーが話しかけてきたが、それも適当に追いついた。

そして数日が経ち、朝の立体機動訓練の時だった。

いつものように訓練兵が整列する。

キース教官が立つと、皆は一斉に敬礼をした。

教官の大声が響く。

「訓練の前に——ジャン・キルシユタイン！」

「ハッ！」

突然、名前を呼ばれた。

反射的に返事をするが、内心焦る。

なんだ、急に——。

「貴様には、開拓地に移ってもらおう！」

教官は、厳しい表情でそう言った。

## 十八話

頭が真っ白になった。

汗がどつと噴き出る。

呆然とするジャンに構わず、教官が命じた。

「独房にぶちこめ。開拓地に戻るまでの間、己の未熟さをせいぜい見つめ直すことだ」

弁解する間もなく拘束され、ジャンは連行された。

馬小屋を通り過ぎ、備品庫をなぞるように進むと、教官方が事務作業や泊まり込みで使用する宿舎が見えた。

何かまずいことをすれば、決まって呼び出される——訓練兵にとってはなるべく近寄りたくない場所だ。

長い廊下の突き当たりに、地下に降りる階段があった。

言動はともかく、優秀なジャンがこの階段を降りるのは初めてのことだった。

一段降りるごとに、空気は寒く、湿っていた。

レンガ作りの壁は劣化してヒビ割れ欠けていて、そこから覗く土壁のせい、水分を含む土の臭いが主張するように漂っていた。

独房の中には、小さなベッドが一つ。

それだけで破裂しそうな檻の中にジャンは詰め込まれると、背中で錠を下ろす音が無機質になった。

気配が上階に消えると、明かりはなくなり、暗闇に閉ざされる。

どのくらいココに入れられるかは、教官方のさじ加減次第だ。

当人に知らされることはない。

なぜなら、その方が効果的だから。

朝なのか夜なのかすらわからない暗闇で、時間の感覚を無くし、終わりの見えない恐怖が精神を追い込む。

ジャンは、ベッドに腰を下ろす。

頭の中では、様々な考えが巡っていた。

成績の操作がバレたんだ。



俺ほどの実力で開拓地送りなんて、それ以外考えられねえ。だが、なぜだ!?!?

証拠を残すようなヘマはしなかったはず——ッ!

一体何が起こった!?!?

開拓地送りを言い渡され、それが覆った者は今までいない。

今までと言うのは、104期だけでなく、訓練兵団発足後からずっとという意味だ。

要するに、詰んでいる。

「畜生! どうしろっつーんだよ!」

怒りに任せて、思いきり壁を殴る。

拳の皮がめくれたのか、液体が指をつたう感覚があった。

冷静になれ!

何か策があるはずだ!

なんとかしねえと——ッ!

……そうだ。

このまま俺が開拓地に送られたらどうなる?

激情にかられた頭が、急速に冷えた。

自分のいない未来を想像して。

もしかしたら、いや、間違いなく、壁内人類は世界の真実を知らぬまま滅びることになるだろう。

ジャンがいなければ、調査兵団は憲兵団との抗争に負ける可能性が高いからだ。

あの一件は、エレンとヒストリアを奪還する少数精鋭の作戦が肝だ。

よって、各々の役割は重く、誰が欠けても成功率はグッと下がる。

さらに言えば、マルロとヒツチを引き込んだのはジャンだ。

彼らの働きがなければ、二人の救出に間に合わない。

となれば、行く末は二択。

ヒストリアがエレンを喰って壁の中は再び初代王の思想に支配される、もしくは巨人化したロッド・レイスにエレンを殺され、壁内の切札がなくなる。

どつちに転んでもバッドエンドだ。

怒りを忘れ、絶望的な現実にはジャンはよろめいた。  
崩れるようにベッドに腰を落とす。

こんな形での終わりは、予想だにしていなかった。

次の一手を考えなければならぬのに、そんな力はどこにも残っていない気がした。

「ジャンー！ 起き——き——ッー！」

いつものまに眠ってしまっただろう。

自分の名を囁く声に、ジャンは飛び起きた。

反射的に声の方を見やると、明かりに目が眩む。

鉄格子の向こうで、フードを目深に被った人物がこちらを伺っていた。

「クリスタか!?？」

ジャンが呼びかけると、そいつは飽きたように言った。

「寝ぼけるのもいい加減にしてくださいよ」

ランタンを床に置いて、フードをさっと外し、サシヤが顔を見せる。

「なんでお前がここに!?？」

「私だって、好きで来たんじゃないやありません。クリスタがどうしてもジャンの様子を見に行くつてきかなくて……ユミルに脅されて、仕方なくです。私の隠密スキルは、すべて食料確保のためであって、馬の世話のためじゃあないですよ！ まったく……」

彼女は不機嫌そうに不満を漏らした。  
なるほど。

ユミルの入れ知恵か。

たしかにここまで忍び込むには、サシヤじゃないと無理だ。

わざわざ来たつてことは、現状を打破する妙案があるつてことだよな!?？」

思わぬスケツトの登場に、ジャンは近寄って鉄格子を握りしめた。しかし、サシヤは厳しい表情でジャンを睨みつける。

「……なんでクリスタだと思ったんですか?」

なんだよ、その無意味な質問。

「別に理由なんかねーよ。なんとなくだ」

サシヤは舌打ちをして、

「どこまでも最低な馬面野郎ですね」

「……は?」

「ミカサのことが好きなくせに、クリスタにまでちよつかい出して。最近、アニにご執心じゃないですか。有名な話ですよ。アニを女にしたのは、あなただって」

「ぜんぜんちげーよ! どんな噂だ! つーか今はどうでもいいだろ!」

「そんな話してる場合かよ!?!?」

「そんな話!?!? さすが自分に正直な男はちがいますね! 三股——いえ、四股とは恐れ入ります」

サシヤは声を震わせ、

「そうやって……私のことも弄んだんでしよう!?!?」

「マジで何しに来たんだテメエは!?!?」

小声で怒鳴り返すと、彼女はボロボロ泣き出した。

ジャンはギョツとして、

「な、泣くことねえだろ!」

「あなたが約束を破るから! 兵団卒業まで、毎朝パアンをくれるって約束だったじゃないですか! なのに、勝手に開拓地送りなんて——ッ自分勝手にもほどがあります! 卒業まであと三ヶ月もあるんですよ!?!? 三ヶ月分の私のパアンが……どうしてくれるんですか!?!? あんまりです!」

「あんまりなのはお前の頭だ」

同期に対してパン以上の感情はねえのかよ。

このバカに期待する方が悪いって、わかってたのに……。

俺はなんてアホなんだ。

ジャンはガツクリと肩を落とす。

やつと落ち着いたのか、サシヤが鼻をすすって思い出したように言った。

「……ああ、そうでした。ユミルが」

「ユミルが!?」

「田舎に帰っても元気でやれよジャンボって言ってました」

「サシヤ。頼むから帰ってくれ」

「まあまあ、今までののはちよつとした冗談です。パアンとユミル以外は」

「ほとんど本気じゃねえか」

本当に何しに来たんだよ、こいつは！

サシヤはごほんとかげ払いを一つ。

急に真面目な顔を作ると、今さら忍ぶように周囲を伺って、「クリスマスから伝言を預かってきたんです」と囁いた。

「……クリスタが？」

「ジャンのことは、私が絶対助けるから。心配しないでね……とのことです」

サシヤはドヤ顔で、ふふんと笑みを浮かべた。

「クリスタは頑張ってますよ！ ジャンを擁護する嘆願書を教官に提出するって、同期全員に署名をお願いしてるところです」

「それで、成果の方は？」

「え……あああくまあ、それは……こ、これからですよ！ ほら、私も手伝いますし！」

「つまり、全然集まってねえんだな」

そう確認すると、サシヤは気まずそうに目をそらす。

ジャンは今度こそ深いため息を吐いて、鉄格子に寄りかかった。

サシヤは、「大丈夫ですよ！」とか「なんとかかなりますつて！」とか、散々期待させて裏切っておいて、今さら必死にフォローを入れてくる。

嘆願書か……そりゃ、誰も賛同しねえだろ。

俺なら絶対に署名なんてしないぜ。

へたなこととして、巻き添えくらって仲良く開拓地送り……なんてことになったら今までの努力が水の泡だ。

だいたい訓練兵からの嘆願書で、教官の命令が覆るはずもねえ。そして、悟る。

万事休すだ。

もう、どうにもならねえ。

開拓地送りになる現実を、ジャンは受け入れるしかなかった。

判断の速さは、調査兵団の指揮官として自然と身についた。

諦めが肝心だ。

しかし、彼の目はまだ死んでいない。

大事なことは、まだ最悪の状況ではないということ。

どんなことがあっても死ぬよりはマシで、生きている限り、抗うことはできる。

ジャンの右手は自然と己の心臓を掴み、灰汁色のシャツが苦しそうに歪んでいた。

……未来のことを、仲間伝えよう。

たとえこの心臓が破裂するとしても。

ジャンの瞳には、まさしく調査兵団としての使命が宿っていた。

どうやって伝えて、何を残す？

書くのもダメ、話すのもダメ。

だが、幸運なことに、前に試した時は即死じゃなかった。

痛みに耐えて死ぬまで話せば、一言、もしくは二言ぐらいなら伝えられる。

けれど、たったそれだけで、何を残せるだろう。

しかも、残したところで誰が信じる？

こんな突飛な、未来の話。

ジャンは、ちらりとサシヤを観察した。

落ち込んだ同期を励まそうと、百面相を続けている。

平和ボケしたアホ面と緩んだ眉。

そこに、未来のサシヤの面影が被って見えた。

……サシヤだったら。

こいつはアホでバカだが、勘は鋭く、情に厚い。  
サシヤなら、気付く。

今は無理でも、超大型巨人の二度目の襲来の後。

俺の奇妙な言動を思い出すだろう。

意を決して、大きく息を吸った。

「サシヤ。これから人類にとつて重大な話をする。俺は本気だ。信じられねえと思うが、真剣に聞いてほしい」  
死ぬ。

俺は、また死ぬのか。

一瞬だけ、まぶたの裏に、ミカサの後ろ姿が浮かんだ。  
再び口を開こうとした時、鋭い痛みがジャンを襲う。

心臓を握られるような感覚。

氷のような手で優しく包むように握られる——激痛だ。

耐えられず、ジャンは呻き声をあげてその場に倒れ込んだ。

「ジャン!?? どうしたんです!?? 痛むんですか!??」

サシヤは慌てて、

「待っててください！ 今すぐ、教官を——」

驚愕し、走り出そうとした彼女の足を掴む。

「いいから聞け！ 俺は」

激痛に構わず、声を振り絞ろうとした時だった。

口の中に、何かが飛び込んだ。

次々に飛び込んだ何かは、一瞬にして増殖し、喉奥から体内へ入り込もうとする。

声を出すどころじゃない。

強烈に迫り上がる嘔吐感。

蛇口でもひねったように、ジャンは吐瀉物をぶちまけた。

「えええ!?? ちよつと！ 本当に平気なんですか!??」

サシヤに返事をする余裕もなく、ジャンは口元を手で覆ってえずく。

言葉を発するどころじゃない。

おいおい、前より判定厳しくなってるーか!??

ズルは許さねえってことかよ！

未来の情報——訓練兵時代の俺が、知らなかったことは話せねえってことか。

こんなんじや、未来なんて知ってても意味ねえだろ！

サシヤは、ジャンの背中をさすりながら言う。

「無理しないでください！ キース教官は、必ず説得しますから！

ほら、なんか弱みでも握って……そうですね！ 愛用の育毛剤とか証拠を見せてやって、ハゲ気にしてるのバラしてやるゝとか、ちよつと脅せば一発ですよ！ だから、ジャンは何も心配せず、大人しくて寝てて——」

思いつくままに、サシヤは適当な慰めを垂れ流す。

ピクリと、ジャンの肩が震えた。

彼は鋭く問う。

「いま……なんつった？」

「へ？ だから、寝てくださいと……」

「その前だ！」

「キース教官は必ず説得します？」

「バカ！ 戻りすぎなんだよ、その後だ！」

「弱みでも握って？」

「その次だ」

「ええーつと、愛用の育毛剤とか証拠を見せて……？」

「それだ」

「ええ!?? ……あの、確かに私も勢いで言っちゃいましたけど、さすがに無理だと思いますよ？ とうか、そんなことしたら教官に殺されます」

サシヤは真つ青になって言う。

「ちげーよ。証拠が必要なのは、俺の方だ」

ジャンは瞳をギラつかせ、

「喜べよ、サシヤ。あと三ヶ月分のパンを、お前にやれる算段がついた」

「マジですか!??」

俺の考えた通りなら、キース・シャーデイスと取引ができるはずだ。取引材料は、俺の頭の中。

それを引つ張り出すには――。

ジャンは口元を拭って立ち上がり、サシヤに向き直る。

「お前に頼みがある。書庫室から持ってきてほしい本があるんだ」

「こんな状況で、読書ですか？ まあ、それぐらい構いませんが……」

「あと、エレンに聞いてほしいこともある」

「エレンに？」

本の名前とエレンへの質問内容を告げると、サシヤは不審そうに首を傾げ、渋々うなずいた。



## 十九話

子供の頃は、恐ろしいものなんて腐るほどあった。

悪さをすれば烈火の如く怒り出すババアは鬼に見えたとし、ベッドに潜り込んで明かりを消すと必ず聞こえる物音に震えていた。

けれど、それらは歳を重ねる毎にいつのまにか克服しているものだ。

口煩いババアは息子を心配する母親で、夜に聞こえる物音は家鳴り。

なんてことはない。正体を知れば、その程度の恐怖だった。

正体を知つてもなお恐ろしい、いや知つてからこそ震えるような恐怖は、もう身に染みている。

木造りの長い廊下を黙々と歩く。

予算の少ない訓練兵団の扉はどれも同じ形状で、木の板に安っぽい鉄のドアノブがあり、それらをいくつも越えていくと、ジャンは目当ての扉の前で立ち止まった。

訓練兵だった頃は、この扉だけは魔界に続く入り口のように思えて、足が震えたことをよく覚えていた。

「入れ」

空きつ腹に響く、テノールの低音がくぐもって聞こえた。

「失礼します」と声をかけ、扉を開く。

思えば、いつもこの部屋は緊張感に満ちていた。

分厚い書物が壁一面に突き刺ささるようであって、やたらとデカイ机は権威を見せつけるように主張し、そこには部屋の支配者が着座していた。

「この威圧感は何人レベルだろ！」なんてビビりまくってたな。

無駄に背筋伸ばして、目が合わないように斜め上を見ていたものだ。

だが、なんてことはない。

ただの老いぼれが座っているだけのこと。

ジャンは敬礼し、挑むように見据えた。

男が椅子を軋ませて立ち上がる。

ゆつくりと歩み寄り、頭二つ分も上の高みからジャンを見下した。「どうだ。独房にぶち込まれて三日間。己の愚かさを少しは自覚できたか」

「はい。成績の操作により、罰を受けたことは理解しています」「ほう。認めるか」

キースは、教え子の頭を踏みつけるように威圧する。

「しかし、わからんな。自身の成績を上げるのならともかく、なぜ周囲の手助けをした。貴様は、利己的な人間だと思っていたが。そのくだらん行為のせいで、訓練に支障をきたしている。どんな高尚な理由があつたのか、説明してみろ」

「全ては、人類のためです」

眉一つ動かさず、ジャンは言った。

「……そうか。答える気はないか」

キースは冷めた目を細め、

「感謝しろ。巨人の餌になるよりも、よほど重要な仕事に就けるんだからな。とつとと荷物をまとめて、開拓地に移れ。話は以上だ」

そう言つて、男は背を向けた。

その背中に向かつて、ジャンは静かに言う。

「いえ、開拓地には行きません」

男は踏み出した足を置いて止まると、一呼吸吐いて、振り返る。

「……何？」

「私には、人類を救う使命があります」

臆せず、よく通る声で。

ジャンは真つ直ぐに前を見つめて、言い放った。

途端に重くなる空気。

男が大股で歩み寄ると、あつという間にジャンの横につく。

そして地を這うような声が、左耳の鼓膜を揺らした。

「なまじ優秀だったばかりに、勘違いをしているらしい。いいだろう。最後に教えてやる」

キースは、鼓膜を破らんばかりの大声で怒鳴りつける。

「貴様のような虫ケラは、誰一人救えない！ いざとなれば怖気づき、仲間を死なせるだろう！ 貴様が殺すも同然だ！ ジャン・キルシュタイン……貴様にできることは、大人しく開拓地に移ることだけ——それが人類のためだ」

ジャンは答える。

「お言葉ですが、教官。勘違いをしているのは、あなたの方ではないですか。エレン・イエーガーを陥れたことが、間違っていたように」

男の気配がピタリと止まった。

「……なぜだ。なぜそこで、エレン・イエーガーが出てくる」

「お忘れですか。立体機動の適正判断の際、エレンの使用したベルトが破損していました。おかげで、奴は危うく開拓地送りになるところだった。ベルトに工作し、エレンが兵士になることを阻止しようとしたのは、キース教官。あなたですね」

ジャンは淡々と話す。

が、内心では自身の心臓の違和感を慎重に探っていた。

……よし。

思った通り。

ここまではセーフだ。

あの痛みが訪れないことに、ジャンは安堵した。

未来の知識は話せない。

その判定基準は、知っているかどうか、だ。

未来で明かされるキースの独白は、エレンの両親と旧知の仲であったこと。

そして、自分は特別ではなかった、という諦念に留まった。

彼の話を聞けば、エレンに対して複雑な感情を抱いていたことにはすぐに気付いた。

しかし、「エレンのベルトに細工をした」という話は、本人から直接聞いたわけではない。

あくまでジャンが予想した——つまり、ただの推測にすぎない。

推測は推理であり、知識とは異なる。

「面白いことをいう。脅しているつもりか？　なぜ私が一人の訓練兵を陥れる必要がある？　当然、証拠はあるんだろうな」

証拠なんざねーよ。

それが分かっているから、テメエはふんぞり返ってられるんだろ。

あれから約3年。

証拠隠滅なんて、とつくの昔に済ませているだろう。

だから、ここからは駆け引きの勝負になる。

ジャンは、さも当然のようにさりりと言った。

「それは、あなたが前任の調査兵団団長だったことに関係しています」

「——なぜ知っている？」

さすがに動揺したか。

眉をピクリと動かして、キースは聞き返す。

しかし、ジャンは答えない。

沈黙を味方につけて、想像を煽るんだ。

あの夜、サシャに頼んだことは二つあった。

まず一つ目は、書庫室から本を持つてくること。

その本とは、調査兵団壁外調査報告書。

調査兵団は壁外調査から帰還した後、報告書を作成することが義務付けられている。

ただし、それが重要視されるようになったのは、超大型巨人の二度目の襲来以降。

つまり、エレンという切り札を手に入れ、世界の秘密が次々と明らかされるようになってからだ。

エレン・イエーガーの巨人化実験、知性巨人、敵の目的——内容は濃く、報告書は厚い。

それに比べて、平和だった100余年の報告書は薄かった。

一度の壁外調査につき、たった一枚の紙切れで足りる。

そこに何を書くべきかは、決まっていた。

出発時の編成人数、死者数と致死率、そして最高責任者——調査兵団団長の署名だ。

成果のない報告書は一冊にまとめられ、訓練資料として書庫室の片

隅に置かれていた。

ジャンは、それを読んだ。

視界に入れた。

調査兵団団長「キース・シャーデイス」の署名を。

焦るな。

ここが肝心だ。

たつぷりと間をとって、キースが痺れを切らすころ、ジャンはゆっくりと口を開いた。

「エレンの父親は、グリシャ・イエーガーという名で、街でも評判の医者だったそうです。母親は、カルラ——昔は居酒屋の看板娘だったか。……私が何を言いたいのか、理解して頂けますね？」

ついに、キースが息を呑んだ。

ジャンの心臓は痛まない。

なぜなら、キースが調査兵団前団長だということも、エレンの両親についても、既に未来の情報ではないからだ。

サシャに頼んだ二つ目は——エレンに質問をすることだった。

彼の両親の名前と、かつての職業を。

それらは、訓練兵時代のジャンは知らない情報だ。

知らないことは、話せない。

だが、逆を言えば、知ったことなら話せるということ。

ジャンは未来という結果だけを知っていて、そこに至るまでの過程がすつぽり抜けている状態だった。

それなら、過程を埋めてやりやーいい。

未来の結果に繋がる証拠が、俺には必要だった。

ここまでは順調だ。

だが、すべてのカードは切られ、これ以上未来の情報は使えない。なぜなら現在手に入る情報は、ココが限界だからだ。

キースとエレンの両親が旧知の中であつたことを明らかにするには、聞き込みでもする必要があるし、たとえ上手く聞き出せたとしても、キースの胸中にある葛藤なんて本人に語ってもらうほかない。

だから、決定的な証拠なんてない。

ほとんどハツタリで、これは賭けだった。

心臓に押し当てる拳は、自然と硬さを増した。

敬礼を緩めることなく、ジャンは男のデカくてちっぽけな背中を睨みつけていた。

男はゆつくりと机に向かって歩き、ため息と共にドカリと椅子に沈み込む。

「どうやって調べたかは知らんが、たいした好奇心と観察力だ」

そう言った男の表情には、教官としての厳格さは消え失せていた。

「そうだ。あの日、私がエレン・イエーガーのベルトに細工をした」

——ツよっしやあああああ！

いま、認めたな!?？ 認めたよな!?？

勝利を確信し、興奮で上擦りそうになる声を抑えて、ジャンはまくし立てる。

「それでしたら話は早い。今の話を密告すれば、あなたは責任を取って教官を辞することになるでしょう。そこで取引です。開拓地送りの処分を撤回して頂けるなら——」

「その必要はない」

キースが遮る。

といつても、いつもの辛辣な物言いとは違い、穏やかな声色だった。

「言いたければ、言えばいい。貴様の処分は変わらん」

ジャンは絶句し、声を詰まらせた。

落ち着き払った様子の子のキースに、思わず語気を荒げる。

「ただの脅しだと思いですか!?？」

「そうではない。私にとつては、どちらでもいいのだ。脅しだろうと、本気だろうとな。……簡単な話だ。己の正義に従えばいい。その密告によって、私は教官の職を辞し、貴様は予定通り開拓地に送られる。ただそれだけのことだ」

キースは、あの時と同じ傍観者の瞳をしていた。

クソが——ッ！

己の正義だと!?？

そんな矮小な話じゃねえんだよ！

人類の未来がかかってんだぞ!!?

畜生ツ——何が傍観者だ!

ジャンは拳を震わせながら、敬礼を解いた。

こんな男に——自分の出番を諦めて傍観者を気取る野郎に、必要なと思えた。

命を捧げる覚悟を示す——敬礼は必要ないと。

ジャンは、耐えるように自身の前髪を掴む。

「そうか。それがアンタの答えかよ。——なら、俺の考えを言わせてもらうぜ。よく聞けよ? 俺はアンタとは違う。俺は運命に選ばれたんだ。こんなマヌケな理由で、リタイアなんてできねえんだよ——俺の目を見る、わかんたろ!!? この目に見覚えがあるだろおが! 地獄を見てきた目だ! 腐っても調査兵団前団長だろ!!? そんなことも見抜けねえのかよ老いぼれが!」

自分が何を言いたいのかもわからず、口先にのぼる言葉を次々とぶつけていく。

「成績なんていらねえ! 憲兵団なんてどうでもいい! まだやるべきことが——ツ使命があるんだよ、俺にしかできねえんだ! テメエには何も求めてねえ! 助けも理解も必要ねえ! ただ黙ってりゃいいんだ——なのに、クソ……俺の邪魔してんじゃねえよ!」

散々怒鳴り散らして、呼吸は荒く、肩を揺らした。

頭の中は真っ白なまま。

そして、キースの色のない瞳を見た瞬間、自分の失敗を悟った。

男は冷酷に処分を言い渡す。

「もう一度言っつてやろう。ジャン・キルシュタイン——今すぐ荷物をまとめて、開拓地に移れ。そこが貴様の居場所だ」

## 二十話

冷酷な判決に、ジャンの怒りは絶望に変わった。  
終わりだ。

もはやどうすることもできない。

俺は開拓地に行つて、役立たずのまま――

耳鳴りと共に、ザアツと音が遠ざかつていく。

鼓膜がイカれたんじゃないかと疑い始めた時、扉を叩く音がかろうじて聞こえた。

キースは青ざめるジャンから視線を外し、いつもの調子に戻つて「入れ」と高圧的に命じる。

もはやジャンなど、この場にはいないかのような振る舞い。

立ち去るしかないとわかつていても、ジャンの足は未練がましく固まっていた。

にわかに背後で、気配が近付く。

「何の用だ」

「ハッ。恐れながら、ジャン・キルシュタイン訓練兵について嘆願があり、参りました」

聞き覚えのある、抑揚のない声色だった。

反射的に振り向いて、ジャンは驚愕する。

張り付いた喉が剥がれるように動き、「お前……なんで？」と掠れた声を漏らした。

彼女の美しい黒髪が、鎖骨をくすぐつて揺れる。

冷静沈着ながら意志の強さを秘めた瞳は、ジャンを見ることはなく、真つ直ぐに教官へ向かつていた。

「ミカサ・アツカーマンか。意外な人物が来たものだ。……だが、今しがた結論は出た。貴様らがどう動こうが、何も変わりはない」

教官の突き放すような物言いにも動じず、彼女は無表情で歩み、机の上にくつつかの書類を置いた。

「彼は愚かにも成績の操作を行い、訓練の妨害をしたことは事実です。



しかし、その愚行を裁くならば、平等に彼の功績も評価すべきではないでしょうか」

ミカサは機械的に述べる。

「その資料は、ここ数ヶ月のジャン・キルシュタインの功績をまとめたものです。彼は立体機動の技術を独占することなく、104期に広く、その知識を分け与えました。結果、訓練兵の立体機動技術は、目に見えて向上しています。彼の指導力は群を抜いている——その限りにおいて、教官も認めざるを得ないのではないですか」

キースがパラパラと資料をめくる。

グラフや数値を用いてまとめられた資料は、各訓練兵ごとに実績と考察を並べており、何ページにも渡っていた。

その詳細さに、ジャンは目を見張る。

「なるほど。つまり、貴様はこう言いたいわけか。今まではこちらの指導力不足であり、この男のおかげで訓練兵は実力を伸ばしている、と」

「概ね、その通りです」

ミカサは平然と肯定した。

「おいおいおい！」

「挑発してどうすんだよ!?!」

「お前まで罰則食らったって、プラスになることなんて一つもねえだろ！」

ジャンは乾燥した喉に唾液を送り、恐る恐る様子をうかがう。

男は無表情のまま、口を開いた。

「元同期への思いやりはたいしたものだが、立場を弁えろ。今すぐ退出すれば、上官に対する無礼な発言は聞かなかったことにしてやる」

「その必要はありません」

彼女は無機質に答える。

「ほう。罰を受ける覚悟は出来ていると?」

「はい。ジャン・キルシュタインの処分が覆らない場合、私も開拓地へ移る覚悟です」

彼女の言い分に、ジャンだけでなく、キースまでも言葉を失った。

ツ——はあ!?!?

何言ってるんだよ!

お前がそこまでする理由なんてどこにもねえだろ!?!?

だがしかし、案外いい手かもしれない。

万が一、彼女が本気なら、104期は卒業目前で首席を失うことになる。

しかも、ミカサ・アツカーマンといえば訓練兵団始まって以来の天才だ。

彼女の名は既に訓練兵だけに止まらず、卒業後はどこに所属する気なのか——上官方の注目を集めている。

そんな人類の希望が、開拓地送りにでもなってみろ。

並の追求じゃ、収まりがつかないはずだ。

「貴様は……自分が何を言ったか、わかっているのか? 脅しや、冗談では済まされないと——理解してるだろうな」

「はい」

ミカサは即答した。

迷わない姿勢に、キースは問う。

「なぜだ。……なぜそこまでして、この男を庇う」

「人類の未来のために、彼の指導力——いえ、ジャン・キルシュタインの存在は必要不可欠だからです」

キースが値踏みするように、睨みつける。

彼女の美しい敬礼は崩れない。

しばし両者の睨み合いが続いた後、ついにキースが折れた。

「……わかった。その嘆願を検討しよう。提出された資料にも、目を通しておく」

ミカサは「ありがとうございます」と初めて人間らしく、息を吐いた。

……え? は? いまなんだった?

ジャンは固まったまま。

二人のやりとりに完全に置いていかれ、頭がついていけない。キースは渋い顔で、唸るように言う。

「ジャン・キルシュタイン」

「は——ハイッ！」

「貴様の処分は、再検討することになった。両名とも、早く退出しろ」  
ジャンは気の抜けた返事をする、ミカサに連れられて部屋を後にした。

彼女が、颯爽と目の前を歩いていく。

久しぶりのような——けれど見慣れた光景に、ようやく緊張の糸が緩んだ。

代わりに訪れた別種の緊張に顔を紅潮させて、ジャンはハネた声を出す。

「おつ、おい。待てよ、ミカサ！ 俺は——」

「お礼なら後にした方がいい。私よりも先に言うべき人たちが、あなたにはたくさんいるはず」

ミカサはめずらしくジャンに微笑んだ。

\*\*\*

外に出ると真つ暗で、夜だったことに気付いた。

キースによると、独房には三日間入っていたはずだ。

ということは、たしか今日は非番で、明日の早朝には訓練がはじまる。

にも関わらず、食堂には多くの訓練兵が集まっていた。

ジャンが姿を見せると、まるで一切れの干し肉がもらえるぐらいのテンションで、ワツと集まってくる。

「どうなった!?？」と口々に問い詰められ、その熱量に、ジャンはポカんと立ちつくした。

面食らって押し黙るジャンに、業を煮やしたんだろう。

アルミンがミカサに噛み付くように問いたです。

「上手くいったの!?？ まさかミカサまで本当に開拓地送りになったんじゃ——ッ!?？」

「落ち着いて、アルミン。問題ない。あなたの計画通り、全て上手く

いった」

ミカサが答えると、アルミンはホッと胸をなでおろした。

次の瞬間、訓練兵たちが歓声を上げ、ハンカチやら帽子やらカップやら——様々なものが宙を舞った。

その光景を、ジャンは呆気にとられて眺めていた。

それは不思議な光景だった。

以前の彼では、見たことのない景色だった。

かつて訓練兵だった頃のジャンは、口が悪くて、自己中で、正直者で、だから敵も多く、まあそこそこに嫌われていた。

超大型巨人が襲来した日——ろくに話したこともなかった大勢の同期たちと、死に別れた。

そいつらが、ジャンの肩をバシバシ叩きながら、処分の撤回を喜んでいる。

ひとしきりもみくちやにされた後、ジャンはようやく輪の中心から抜け出した。

主役がいなくなっても気付いた様子はなく、宴のような不思議な熱が盛り上がっていた。

どこから調達したのか、料理も並んでたりして、ちよつとしたパーティー状態だ。

火種が消えても、燃え移った炎はなかなか消えない。

まあ、集団とはそんなもんだろう。

他人事のように観察して、思う。

壁際に避難して、やれやれと溜息を吐くと、その音が被って聞こえた。

いつのまに隣にいたのか。

金髪のおかつぱ頭——アルミンと目があう。

タイムリープ後、彼との絡みは立体機動のアドバイスぐらいだった。

こうして穏やかに話すのは、ほとんど初めてだ。

「ははっ……すごい人気だね」

「バーカ。どこがだよ。場の空気に酔ってるだけだよ」

「そうかな？」

「こっちは知ってたんだよ。嘆願書の署名、ほとんど集まらなかったらしいじゃねえか。つたく、調子いいんだよな。どうせ余興ぐらいに思ってたんだろ。当事者はマジでギリギリだったつーのによお。訓練の鬱憤を、騒いで解消したいんだろーぜ。もしくはハゲ教官に一泡吹かせてやったのが、よほど嬉しいんだろ」

「そのわりには、ジャンも嬉しそうに見えるけど」

笑い混じりに返されて、ジャンは無言でアルミンを見やる。

と、慌てて目を逸らされた。

見るからに気弱そうな少年だ。

この時点では、調査兵団で大活躍する未来なんて嘘みてえだな。

「お前が、作戦の立案者だつて？」

「え!?? ああ——うん……実は僕なんだ。ハハ……上手くいったからよかったけど、僕なんかの案じゃ、ジャンも不安だったよな」

軽く握った拳をアルミンの左胸に押し当て、ジャンは語気を強める。

「何言ってたんだよ。お前の作戦なら、俺が一番に命をかけられるぜ。

……ありがとな、アルミン」

彼は一瞬目を見開いて、「あはは……ジャンに褒められるなんて、意外だよ」と照れ臭そうに笑った。

にしても、よくやりきったな。

駆け引きなんだろうが、下手すりゃ、ミカサまで開拓地送りになるところだった。

たしかに首席様を引き合いに出せば、教官もこちらの要求を飲むしかねえか……。

上手くいきすぎたように感じてしまうのは、調査兵団ゆえの悪癖か。

ネズミのようにちよこまか動きながら、料理を摘んでいくサシヤの姿が見えて、気が抜けた。

「もちろんアルミンも頑張ったけれど、同じぐらい感謝すべき人間が、あなたにはいるはず」

「ああ、そうだな。お前もありがとな」

ふらつと現れたミカサに、とりあえず礼を言うと、彼女は首を振った。

「まだ私の番じゃない。アルミンが考えた作戦だけど、あの詳細な資料を作ったのはマルコなんだから」

「ちよつとミカサ！ それは言わない約束じゃ——」

「……なぜ？ 仲直りなら早くしたほうがいい」

ミカサはキョトンと首を傾げた。

訓練兵が騒ぐ中心部から外れて、食堂の端の卓に座る後ろ姿があった。

誰が見てるわけでもないのに、ピンと背筋を伸ばして、クソ真面目がダダ漏れている。

同時に、「ああ、ピリついてんな」も思った。

普段大人しい奴が怒ると怖いという通説は、どうやら本当らしい。

マルコという男が、まさにそれだった。

表面上は、不機嫌そうに見えない。

むしろいつもよりニコニコしているぐらいだが、不思議と誰も話しかけられなかった。

すると、なぜか決まって、ジャンに苦情が来た。

何も知らないくせに、早く謝れだの、どうせお前が悪いだの、好き勝手に言われて辟易したもんだ。

そばかす野郎はジョッキを片手にぐい呑みしていて、酒でもねえのにと思つてムカついた。

その頭をパンと叩くと、顔面を水浸しにしてマルコが叫ぶ。

「ぶはっ！ ——ッ何するんだよ！」

「やり方が気に入らねえんだよ。聞き耳立ててんのバレバレだぜ。

……どつかのクソ真面目が暇だったおかげで、俺は明日からも訓練に打ち込めるらしいな」

マルコは舌打ちをして、「どうやら、そうらしいね」と答える。

ジャンは鼻で笑い、

「まあ？ 俺ほどの頭脳がありやー、ハゲ教官なんて余裕で説き伏せ

てやったんだけどなあ。今回は、お前に花を持たせてやったついで——」

バシャリと、顔面にぶっかけられた。

ぽたぽた滴る水滴。

ジョツキをこちらの方に傾けて、マルコがにっこりと笑う。

「ほら、祝い事があると酒をかけるって言うじゃないか。水が代わりに申し訳ないけど、おめでとう、ジャン。無事に親友と卒業できそう  
で、僕は嬉しいよ」

親友とか言ってるんじゃないよ。

「どうしたの？ 二人して水浸しで……またケンカ？ ジャンは仲直りしに来たはずでは……」

「ああ、ミカサか。大丈夫。ジャンが謝ってくれてさ。無事に和解したところだよ」

マルコは、なあ？と楽しそうに同意を求めてくる。

俺は謝ってねえよ！と言いたかったが、今回ばかりは分が悪い。

仕方なく黙っていると、そばかす野郎にまたニヤつかれた。

「そう。なら、丁度良い。そろそろジャンは、私にお礼をする番だと思う。なので、私の話を聞いてほしい」

目をキラキラさせて、ミカサは言う。

正直、嫌な予感しかなかった。

## 二十一話

「場所を変えよう」

彼女はそう言って歩き出すと、そのままドアを開けて食堂を出ていった。

ジャンはのろのろ立ち上がって、彼女の後を追う。

外に出ると、湿ったままの髪が夜気に晒されて、急速に冷えていく。それを心地よく感じながら、ジャンは目の前の手すりに背を預けた。

思い出深い場所だった。

惚れた瞬間、失恋を悟った場所だ。

ここから見ていた。

エレンに「髪を切れ」なんて簡単に触れられて、迷いもなく頷いたミカサ——ガキだったからか、あの時の絶望はよく覚えている。

窓越しに、コニーが暴れるサシヤを押さえつける様子が見えた。

ジャンは、目を細める。

これから聞かされるだろう話を思うと、胸のあたりが気持ち悪かった。

「——ジャン」

綺麗な声に呼ばれた。

ミカサの頬はつるんとして、ふっくらとして、少女らしい。

これからその頬に傷がつくんだと思うと、なんとかして未来変えらんねーかなあと思う。

彼女は強いから。

気にした素振りは見せなかった。

けれど、エレンの前でだけは、時折美しい黒髪を引っ張って頬に当たっていた。

そういうところを目撃しちまうと、ああああああってなるし、何にも気付かねえエレンをぶん殴りたくなる。

生きてるうちに、言ってやりやーよかった。



傷があつたつて、お前が一番綺麗だつて。

——まあ言つたところで、コイツには伝わらなかつたと思うが。そんなことを思案して、ぼうつと端正な顔を眺めていた。と、彼女の瞳が急速に暗く沈んだ。

「まずは、互いの立場をハッキリさせよう」

彼女の両手に、ブレードの幻覚。

内地の豚を追い詰めるように、ミカサは重く一步の距離を詰める。

「私が助けなければ、今頃あなたは開拓地にいただろう。作戦の立案者はアルミンだった。けれど、首席の立場である私が協力しなければ、成功はありえなかつた。……ちがう？」

ジャンは顔を引きつらせ、「だろうな」と頷く。

「さらに言えば、私にはリスクがあつた。アルミンのことは信用していたけれど、やはり開拓地に送られる可能性もゼロではなかつたはず。ので、ジャンは私に感謝すべき」

ミカサは念を押して、

「もう一度確認しよう。ジャンを助けたのは、私。あなたは私に多大な恩があり、そして受けた恩は返すべきだと、私は思う」

相変わらず、まどろっこしい話し方だ。

「待て待て。落ち着けよ。お前には感謝してる。だから、俺ができることなら恩返しだつてする。言いたいことがあんならスツと言えよ。お前の残念な言語力に付き合つてたら、いつまで経つても話が進まねーぜ」

少しの沈黙の後、ミカサが呟く。

「噂に聞いた。その……ジャンは——恋の魔術師だと」

「愛の伝道師だ」

反射的に訂正する。

「そう……愛の伝道師。たしか男女の仲を繋ぐとか」

やっとそこまで言つて、ミカサはそわそわと、マフラーで口元を隠した。

赤いマフラーから、少し覗いた頬がほんのり色付いている。

うっわマジでかわいい——じゃねーよ！

「つまり、エレンと恋仲になりたいってことか」

「つっけんどんに、ジャンは言った。」

「マジでふざけんよ。」

「何で聞きたくもねえこと、催促しなきゃなんねーんだ。」

「恋仲!?!? そ、それは違う! 私とエレンは家族!」

「へえー、家族愛ね」

「そう」

「お前、エレンにウザがられてるもんなあー」

「そんなことはない! エレンは素直になれないだけ」

「その絶対的な自信はどっから来るんだよ。」

「じゃあ、お前以外のやつに、エレンは冷たいのか? 俺から見れば、どっちかつつーと素直な方だと思っただけだな。少なくとも、アルミンに対しては普通に仲良くしてんだろ」

「それは……少し……私も思い当たる節がある」

「ミカサは目を伏せた。」

天井から下がるランタンの灯に照らされて、彼女の長い睫毛が影になる。

「ジャンはため息を吐いて、」

「ご要望通り、率直にアドバイスさせてもらうが。まず、お前は人の話を聞かねえのが欠点だ。エレンが絡むと、冷静な判断ができなくなる。だから、嫌がられていることにも気付かず、過剰に世話を焼くんだけだ。その裏で、アルミンがどんだけ気遣ってるかわかってんのかよ? それだけじゃねえ。エレンと話すとき睨まれるって、同期の女子はみんな怯えてるぜ。周りの迷惑も少しは考えろ」

「そんな……エレンは、私のことが嫌いなんだろうか」

「本当そういうところだぞ」

「ミカサが涙ぐむ。」

「みんな恋人ができて、とても楽しそう。……私たちは家族。誰よりも絆は強い。なのに、最近は一——」

「彼女の声が、尻すぼみになって消えた。」

「まさか104期の恋愛ムードが、ミカサにまで影響するとはな。」

たしかに最近のミカサは変だった。

エレンに対する過保護がエスカレートしていくのが傍目にもわかったし、それに比例して、当然エレンの拒絶も激しくなった。

ミカサは無表情に見えるが、無感情じゃない。

付き合いが長くなると、だいたいこのことは察せられるようになった。

日に日に落ち込んでいくのも気付いていたが、その原因がエレンだと思うと、フオローする気にもならない。

が、こうして潤んだ瞳で頼られると――。

ジャンは乱暴に頭をかいて、

「ああー……わかった！ 恩は返す。協力してやる。だが、一つだけ条件がある」

「条件？」

「俺のやり方に従ってもらうぜ。こっちだって暇じゃねえんだ。いちいちお前の反論聞いてらんねえよ」

ミカサは少し考えると、

「……わかった。愛の伝道師の力を信じよう」

こくりと頷いた彼女に、不覚にもキユンときた。

他の男との恋愛相談されてるつつーのに、アホすぎる。

なんつーか、心臓がおかしい。

手すりに背中をグツと預けて、夜空を仰ぐつもりでのけぞった。

でも、頭上に広がるのは薄汚れた天井で、夜空なんか視界の上の方にチラツとしか見えない。

それすらも、ランタンに群がる羽虫が飛び回るせいで、ろくに拝めやしなかった。

つってもなあ、俺って本当バカだな。

安請け合いしちまってどうすんだよ。

エレンはアニとくつつける予定だろーが。

長期的に見りゃ、エレンを孤独にさせないってのも悪くない案だ。

地ならしの選択をする前に、止められるかもしれないねえ。

けどなあ、その場合を考慮したって、エレンとアニのカップリング

の方が、手っ取り早いというか、一石二鳥というか。

正直に言くと、エレンとミカサが、今から恋人つてのが想像つかねえ。

あんだだけ好意ダダ漏れのミカサが隣にいたのに、本来、ここから4年間進展のない二人だぞ。

「単純にいくなら——押してダメなら、引いてみるか」「というと?」

何となしにこぼした声に、ミカサが反応した。

「エレンが恋愛に興味ないっつーのもあるが、そもそもお前が鬱陶しい母親ポジションなんだよなー」

「う、鬱陶しい母親……」

「もしくは小姑?」

「こ、こじゅーと……」

震えた声が復唱する。

「要するに、距離が近すぎんだよ。まずはエレンから離れることだな」

「それは無理。エレンには、私がいないとダメ」

「なら、一生今のままだな」

予想できた答えに、ジャンは素直な感想を述べた。

よほど衝撃だったんだろう。

ミカサは虚ろな表情で、「一生」という単語を口の中で繰り返す。

まるで呪いの呪文みたいに何度も何度も唱えてから、やっと彼女は承諾した。

「わかった。ジャンが言うなら、そうしよう」

目が死んでいる。

殺人鬼の眼力だ。

背筋が寒くなり、ジャンは誤魔化そうと慌てて付け足す。

「あとは嫉妬を煽ったりとかな! 自分だけに優しかった女子が、他の男に取られるって思うと案外焦ったりするんだよ」

「そう。それなら、私はジャンに尽くそう」

「……は?」

唐突な宣言だった。

意味がわからない。  
彼女の瞳は死んだまま、じつとこちらを見つめていた。

## 二十二話

つまるところ、教官という職に執着がなかったのだろう。

「エレンへの行いを密告する」というジャンの脅しに、キースの心臓は動揺の一つもしなかった。

それが何よりの証拠だ。

しかし、その事実がキースにとってさほど意外なことではなかった。

調査兵団団長を自ら辞した後、流されるままに行き着いた居場所。

目の前に並ぶ若者を、兵士として使い物になるように鍛えてやるだけがいい。

自ら考え、選択し、いたずらに兵士を死なせてきた仕事と比べれば、なんと楽なことか。

特別じゃない、無価値な自分を諦観した。

空っぽな自身を教官の職務で埋めることは、彼の精神を安定させていた。

言い換えれば、キース・シャーデイスは教官を演じることで、自身を慰めていたにすぎなかった。

問題は、なぜジャン・キルシュタインの処分を取り下げの気になったのか。

本来ならば、早急に開拓地送りにすべき事案だった。

一発退場に相当する不正行為。

独房に入れる必要もなく、とっとと追い出してやれば済んだ話だ。

それが教官として当然の判断だった。

けれど、そうしなかった。

しかも、訓練兵たちがジャンのために画策していたことを知った上で、彼らの準備を待つかのようなタイミング――。

そういった一連の行動を、キースは自分でも上手く説明できそうになかった。

どれだけ思案に暮れていたのだろう。

万年筆の先端——金色のステンレスが光り方を変えたのを見て、キースは顔を上げた。

早朝の陽が、執務室へ差し込んでいる。

ああと思つて、ランタンの灯を吹き消すと、今度は思ったより暗くて書面が読めなくなった。

男は眉間に皺を寄せ、もう一度灯をつけようかと逡巡する。

時計の針は、4時30分をさしていた。

コーヒーでも飲んでいる間に、日も昇りきるだろう。

湯を沸かし、挽き立てのコーヒー豆をドリップする。

豆の香ばしい匂いが鼻腔をくすぐった。

マグカップを片手に窓辺へ寄ると、太陽がようやく半分ほど顔を出したところだった。

執務室で夜を明かしたのは、久しぶりだ。

愚か者が夜な夜な悪さをしないように当番制の見回りはあったが、それ以外に仕事と呼べる残業はなかった。

もちろん探せば、やるべきことはあるだろう。

だが、それほどの熱意を抱いたことはなかった。

104期訓練兵は、まもなく卒業する。

彼らは生き残れるだろうか。

訓練兵を怒鳴りつける度に、キースは枯れた心臓で問いかけていた。

「お前はどんな風に死ぬのか」と。

——ジャン・キルシュタイン。

昇りゆく陽を薄く見つめていると、彼の名が浮かんだ。

数ヶ月前までは普通の、才能ある若者だった。

優秀ゆえに器用貧乏で、利己的な性格は憲兵団向きであった。

だが、彼は変わった。

その急激な成長は、才能云々では説明のつかない境地にまで達しているように思えた。

普通の男が、ある日突然「特別」に変化するなど有り得るのだろうか。

あの日の私のように、呪いにかかったただけではないのか。

一晩中、そんなことばかりをまんじりと考えていた。

コーヒーを飲み干して、朝日が昇り切った頃、ようやくキースは決断した。

まだ日が照り始めたばかりの早朝。

少し涼しくなった初秋の風に吹かれながら、104期訓練兵——総勢218名が整列した。

「ジャン・キルシュタインについてだが……開拓地送りの処分は撤回することになった。よって、別の処分を言い渡す」

訓練兵たちの気配がさざめく。

104期の中に埋もれる爛々とした眼光を見据えて、キースは宣言した。

「貴様を、立体機動教官補佐に任命する。教官の真似事をしたいなら、願ってもない話だろう。その指導力、存分に人類のために捧げろ」

奴の鋭い目が揺らぎ、驚愕に開かれた。

キースは続ける。

「もちろん訓練兵としても今まで通り従事してもらおう。成績上位10番以内に入らなければ、卒業は許さん。その時こそ、貴様が開拓地送りだ」

男は瞳を輝かせ、「ハイッ!」とスタツカートの返事をした。

この男は、特別な人間に変わるだろうか。

それとも、私と同じように呪われただけなのか。

わからない。

少なくとも、それを判断するのは私ではないのだろうか。

\*\*\*

「好き嫌いはしないで」

ミカサが言う。

「朝食はしっかり食べないと、訓練に障る」

「お、おう」



スプーンを片手に、ジャンは頷いた。

「口元にソースが付いている。こつちを向いて」

ミカサが身を寄せたので、ジャンは慌てて避けようと、

「いいって！ それぐらい自分で——」

「ダメ。私に任せて」

気付けば、至近距離に綺麗な顔があった。

頭が沸騰して、ジャンは魔法にかかったようにピシリと体を硬直させる。

彼女にされるがまま。

クリーム色のハンカチで、口元を優しく撫でられた。

こんなに幸せでいいんだろうか。

圧倒的僥倖。

幸せすぎて怖い。

幸せすぎて死ぬ。

あ？ そういや俺って一回死んでるんだっけ。

そうか天国か夢の世界なのか最高じゃねえか。

俺はきつとこの瞬間のために生きてきたに違いねえ。

食堂は、騒然としていた。

同期たちは食事をするのも忘れ、信じられない光景に見入っていた。

「おい……誰か答えろ。私はまだ寝ぼけてるらしい。エレンはあんなに馬面だったか？」

ユミルが尋ねた。

「何言ってるんですか。エレンなら、あつちに座ってるじゃないですか。ほら、いつものようにアルミンとミカサが」

サシヤは答えようとして、

「……おかしいですね。ミカサって金髪でしたっけ？」

と疑問形で投げ返す。

「何言ってるんだ。あれはアニだろ」

そう言ってから、ライナーは確認するように聞き返した。

「……アニだよな？ ベルトルト」

「ああ。そうだよ、ライナー。あれは間違いなくアニだ」

ベルトルトは静かに肯定した。

「なあ……俺はバカだからわからねえが、ミカサは頭がおかしくなっちゃまったのか？」

「めずらしく冴えてるね。僕も同じことを考えてたよ」

コニーの言葉に、マルコは無表情で頷いた。

どうしてこうなったか？、なんて本人たちが一番理解していないだろう。

ジャンは思考停止でこの状況を楽しんでいる。

ミカサは彼の世話を焼きながら、「これはエレン。これはエレン。これはエレン——」と呪詛のようにぶつぶつ唱えていた。

あの日。

「エレンから離れろ」というジャンのアドバイスを受け入れたミカサは、限界突破をしていた。

やけくそ。やぶれかぶれ。そこまでやるなら、徹底的にやるべきという謎のスイッチ。

エレンが絡むと暴走しがちなミカサらしいと言えば、らしい行動。

偽装恋人の提案をしてきたのは、彼女の方からだった。

振り向いてくれない男の側を離れ、嫉妬を煽る——なかなか効果的な作戦だ。

脳内が花畑に染まっていく一方、ジャンは冷静に打算してもいた。

ミカサがエレンから離れることは、同時にアニのチャンスになるだろうと。

一足飛びで、さっそくアニに事情を説明すると、彼女は驚愕して「アタナかなかゲスなこと考えるね」と言われた。

が、エレンの隣で嬉しそうにパンをかじってるんだから、お前も同罪だろと思う。

一番気の毒なのは、スープを啜りながら胃を押さえているアルミンだ。

エレンはどう思ってるのか。

アニと談笑する姿は、むしろいつもより楽しそうに見える。

糞鈍感駆逐野郎のことだ。

特に疑問にも思わず、ミカサの干渉がなくなったことに清々しているのかもしれない。

これは、もしかするともしかするんじゃないやねえか？

このまま上手くいって、エレンとアニが付き合うことになったら……ミカサが振られるってことだろ？

そんで、傷心のミカサを俺が必死に支える——つまり結婚!!？

ジャンの脳裏に走馬灯のごとく妄想が流れる。

失恋に落ち込み、涙を流すミカサ。

ジャンが必死に慰めても、なかなか立ち直れないミカサ。

一輪の花を渡すと、初めて微笑んでくれるミカサ。

初めてのデートでふいに手が触れてそのまま繋いで。

プロポーズは湖の水面に映る光を眺めながらサラツと言って、彼女は嬉しそうに微笑んで。

結婚式は、白いドレスがいい。

シンプルなシルクのドレスに、繊細な刺繍。

かすみ草のブーケは彼女の可憐さを引き立て、ベール越しの彼女は世界一綺麗だ。

最高かよ!!？

人類を救い、長い片思いを成就させる。

その気になりや、今の俺なら全部手に入るんだ！

食事を終え、ぼわんとした心持ちでふわふわ歩く。

いつもは気を引き締めてくれる立体機動のベルトも緩んでる気がする、ジャンは何度も皮のベルトを調節していた。

「ちよつといいかな？ 昨日話してた班編成なんだけど、少しバランスが悪いような気がするの。ジャンの意見を聞きたくて……」

遠慮がちに声をかけてきたクリスタの表情は、緊張で強張っていた。

無理もない。

先日、キースから言い渡された異例の処分。

立体機動教官補佐。

一訓練兵に課すには前代未聞の責務だ。

といっても、当然だが全ての訓練指揮を任されるわけでもなく、あくまで補佐として訓練内容に提案をしたり、一部の時間をもらって指揮を取ったり、その程度のことだ。

本日の訓練から、ジャンはその責任を担うことになっていた。

もちろん表舞台で指揮を取るのはジャンになるが、今までの流れから自然とクリスタも手を貸すことになった。

補佐の補佐とでも言ったところか。

不安そうなクリスタに、ジャンは答える。

「昨日も言ったろ？ 細かいことはお前に任せるって」

「でも……」

「あんまり緊張すんなよ。いつも通りやりやーいいんだって！ 教官補佐なんて大層な役職に聞こえるが、やることは今までの延長線みたいなもんだしな」

ジャンは立体機動装置の箱をカンと叩いて、ニヤリと笑ってみせた。

教官補佐——渡りに船とはこのことだぜ。

これで堂々と、104期の立体機動力向上に集中できる。

どういう意図の処分かは知らねえが、俺にとっては良いことづくめだ。

「頼りにしてるぜ、クリスタ」

ジャンは上機嫌に、ぽんと彼女の肩を叩いた。

「ジャン。そろそろ行こう。何か準備があるなら、私も手伝う」

迎えに来てくれたミカサに感動しつつ、ジャンは「おー」とわざと気の抜けた返事をした。

ジャンの隣に、ミカサが並ぶ。

肩が触れ合う距離で、体温が伝わる気がした。

ずっと彼女の隣を歩いていたかった。

この距離を知ってしまったら、後ろから指咥えて見てるなんてもう無理だ。

かつてなく、強く思ってしまった。

今度こそ彼女に選ばれる男になりたいと。

## 二十三話

巨人と遭遇した時、どうすれば生き残れるか？

調査兵団に入ってから、考えない日はなかった。

壁外調査の度に喰われていく大勢の兵士。

仲間の死に慣れる反面、諦められるほど凶太くはなれなかった。

誰の選択を信じて、死ぬ時は死ぬ。

無慈悲に、無意味に。

ドラマチックな死は、その他大勢の兵士には用意されていない。

しかし、「生き残る」という一点を重視するなら、答えは簡単だ。

逃げればいい。

戦わずに、尻尾を巻いてさっさと逃げ出すこと。

言葉にするのは簡単だ。

が、初めて巨人と対峙した時、新兵は「逃げる」という難しさを実感するだろう。

粘りつくような恐怖。

頭の中から指先に至るまで、一瞬でそいつに支配される。

まずいと思った時には、巨大な手に掴まれて終わりだ。

104期のほとんどが初陣で死んだのも、恐怖心のせいだとジャンは考えていた。

壁が破壊され、考える間もなく戦地に立たされた。

その動揺と恐怖の中、巨人の手を掻い潜って立体機動装置を操れる

新兵はそういない。

ビビっちゃうのは、しょうがねえ。

問題は恐怖心をどう飼い慣らすかだ。

結論を述べるなら、慣れるしかない。

恐怖の場数を踏むこと。

だが、どうやったって訓練兵が経験を積むのには限界がある。

目の前に巨人を連れてくるわけにもいかないだろう。

そしてもう一つ。

104期には「回避力」が圧倒的に足りない、ジャンは感じていた。

訓練兵は、最初から憲兵团や駐屯兵团を目指し、成績のポイント稼ぎに必死になっている。

動かない巨人型模型を探し、その頸のスポンジを削ぐことが目的だ。

巨人を狩るハンター目線。

その訓練には、自分が襲われるという想定が存在しない。

恐怖心の克服と回避技術の向上——それらをどうやって訓練に落とし込むか。

立体機動教官補佐として、ジャンが一番に考えたことはそれだった。

「そこで、今日の訓練は鬼ごっこをしてもらおう」

104期の面々を見回して、ジャンは言った。

「制限時間は、1時間でいいか。とにかく全員、立体機動装置を使って逃げてもらう。鬼にタッチされた奴はアウト。罰ゲームだ」

「鬼ごっこ……なるほどな。お前の言う回避行動の訓練にはなると思う。が、恐怖の克服はどうなる？ 罰ゲームって、子供の遊びじゃねえんだぞ」

眉間に皺を寄せて、ライナーが真面目ぶって尋ねた。

ジャンはニヤリと笑って、

「罰ゲームが怖けりやいいんだろ？ そこで、用意したのがこいつだ」

「……なんで私？」

ジャンが親指でグツと示すと、アニは低い声で言った。

最近柔らかくなったと評判だったのに、以前の彼女に戻ったような剣幕だ。

「そう怒るなよ。捕まった間抜け共は、アニと対人格闘をしてもらおう。お前に制限はねえから、遠慮せずに思いつき蹴りまくってくれ」

空中戦の鬼ごっこには、参加しなくていい。

暗に示して言うと、アニは満更でもない様子で納得してくれた。

対照的に、他の訓練兵たちがみるみる青ざめていく。

「どちらかが地面に背をつけるまでやってもらおうかな。お前らも遠慮するなよ。別にアニを倒したっていいんだから。——ただし、相手が巨人だと思って取り組め。知性がないとはいえ、巨人の体は人間とほぼ同じ構造だ。どういうモーシヨンから、どんな攻撃が予測できるのか、よく観察しろ」

後ろの方で気怠げに立っていたユミルに、ジャンは声をかける。

「俺とアニとミカサを抜かした成績上位者10名が鬼だが——ユミル、お前は鬼で入れ」

眉をピクリと動かし、ユミルは舌打ちで返事をした。

「8名が鬼だから……そうだな。一人頭、最低25名は捕まえろ。ノルマ不達成なら、アニの刑だ」

「そんなあ！ 25人なんて絶対無理ですよ！ 奪い合いみたいになるじゃないですか！」

真っ先にサシャが不満を言う。

「文句言ってるじゃねーよ。俺は立体機動教官補佐だぜ？ つまり、俺の指示は教官様の指示だ。それでも逆らう奴はいるか？」

誰も答える者はいない。

静まり返った面々を眺め、ジャンは意気揚々と命令した。

「それでは……始め！ 鬼は100数えてから行けよー」

成績上位者とユミルを残し、訓練兵たちが一斉に飛び出していく。その顔色は一様に悪く、中には青い唇を震わせている者までいた。アニを使った罰ゲームは、恐怖心を掻き立てるのにかなり役立っているらしい。

結果を見てから、明日以降の訓練は組み直しか。

とにかく逃げるための立体機動の扱いを覚えてもらわねえと、話にならねえ。

朝練参加してた奴らには、善戦を期待したいところだな。

一区切りついて、ジャンは息を吐く。

と、ふいに視線を感じた。

——ベルトルトだ。

デカイ図体のわりに、薄い存在感。



大人しい大型犬のような男が、じつとこちらを見ていた。声をかけようとする絶妙のタイミングで、ふつと視線を外される。

……何だ？

「ジャン。どうして私は外されたの？」

ミカサが不思議そうに聞いたので、ジャンは慌てて振り返る。

無表情に、首を傾げる仕草が可愛らしい。

「お前が鬼役に入ったら、訓練にならないだろうが」

「私だって、手加減ぐらいできる」

ミカサは微かにむすつとして、声色を変えた。

「この訓練は、手加減したら意味ねえんだよ。互いに必死になる、緊張感が必要なんだ」

ジャンの説明にも、いまいちピンとこないのだろう。

ミカサは少し間を空けて、「私はどうすればいい？」と重ねて質問した。

「お前には聞きたいことがある。あー……、俺と……二人きりでっつーか。いや、別に変な意味じゃなくてだな。あくまで訓練のために、二人で立体機動をやる必要があつてな」

「そう。なら、行こう」

話の落とし所がわからず、ごによごによ言い淀むジャンに、ミカサは短く答えた。

クソ……ミカサの前だと、なんで情けねえ感じになるんだよ。

微かに耳が熱い。

照れ臭さを隠し、ミカサを連れてその場を離れようとしたところで、ジャンは大事なことを思い出した。

クリスタに駆け寄って、声をかける。

「訓練の結果と、みんなの様子をよく観察しといてくれ。今晚、いつもの場所で報告を頼む」

早口にそう言って、彼女の返事も聞かずに背を向けた。

ミカサが待っているのは、エレンじゃない。

俺なんだ。

そう思うと駆け寄りたくて仕方なくて、自然と頬が緩むのをジャン

は懸命に耐えていた。

## 二十四話

ミカサの凄さは、無駄な動きがないところだ。  
迷いが無い。

乱れない。

まるで彼女のために敷かれたレールを滑るように、優美な曲線を描きながら飛んでいく。

美しいのに、力強く。

烈しいのに、静かで。

強者たる圧倒的な存在感と、一瞬で視界から消えるスピード。

それは、ジャンが頭に描く理想的な立体機動だ。

いつだって追いつけなかった。

自分には到底届かない領域。

彼女の飛ぶ背中を見ていると、たまにどうしようもなく胸が熱くなつた。

強烈な渴きを感じた。

恋慕ではない。

これは、兵士としての憧憬と見苦しい嫉妬だ。

ギョルルルルルルルツとワイヤーを巻き取る音が風を切り裂く。

トップスピードにブレーキをかけて、ミカサは枝の上にふわりと着地した。

重力を思い出した黒髪が、彼女の肩に降りる。

「どう？ 何か参考になった？」

ミカサが振り返る。

その頬に傷はなくて、一瞬驚いた自分にジャンは苦笑した。

「本当変わんねーな」とため息まじりにこぼす。

こいつは完璧だ——今も未来も。

「立体機動で飛んでる時、何を考えてる？」

さりげなさを装って、ジャンは尋ねた。

ミカサは不思議そうに「何を……」と呟く。

「気をつけてることでいい。そうだな……例えばガスを吹かすタイミング、重心の移動、どこにアンカーを刺すか」

ジャンの言葉に、彼女は少し考えてから口を開く。

「考えはしない。強いて言うなら、イメージすることだろうか」

「イメージ？」

「こんな風に動きたいとイメージすれば、自然と体が動く」

彼女は大真面目に、無表情で言った。

おおよそ予想できた答えに、それでもガクリときて、ジャンは脱力する。

俺がバカだった。

恥を忍んで聞いてるつつーのに、ぜんぜん参考にならねえじゃねーか。

立体機動が得意といっても、ジャンはミカサに張り合ったことはなかった。

どうせ勝てないから。

挑むのも馬鹿らしい。

実力差を見せつけられ、惨めな思いをするだけだ。

もちろん自分には指揮官という役割があり、前に出過ぎるわけにはいかない。

特攻隊長のミカサを上手く操縦して、戦況を読む立場にある。

そんなことは分かった上で、だ。

理屈は置いといて、好きな女より弱いなんて情けないに決まってる。

今の俺なら、こいつに追いつけるかと思っただがな。

天才と秀才の差はでつけーなあと、心の中でぼやいた。

ジャンは頭の回転は悪くない。

視野も広く、判断力には自信があった。

周囲を確認、情報を整理、取捨選択して、最善の判断をください。

そういうプロセスを通じて、ジャンは動いている。

しかし、ミカサは違う。

ごちゃごちゃ考える必要はなく、彼女は直感でどうすべきかがわ

かかってしまう。

最善のゴールへ一直線に向かえるのがミカサなら、地図を見ながらたどり着くのがジャンだ。

ジャンが必要とするのは、最善を見極めるための一瞬の間。

だが、その一瞬の差が致命的にデカイ。

どうやったって普通の人間には無理だろ。

そういや、同じアツカーマン姓のリヴァイ兵長も厨二病発言してたしな。

なんだったか。

「ある日突然、力に目覚めた」とか「自分の体を完璧に制御できるようになる」とか。

何なんだよアツカーマン。

俺みたいな野良犬には、血統書なんてわかんねーつつの。

訓練で悩んだことなどない天才は、森の奥の方を眺めて立ち尽くしていた。

そっちの方からは時折絶望に満ちた叫び声が聞こえてくる。

鬼ごっこは順調に進んでいるらしい。

顔を見なくても、何を考えてるかなんて容易に想像がついた。

「髪、だいぶ伸びたな」

口をつけて出た脈絡のない話題に、ジャンは焦る。

もう少し気の利いたことを言えればと、すぐに後悔した。

魂が戻ってきたばかりのように、彼女はぎこちなく振り返った。

伸びきって目に入りそうな前髪が揺れ、鬱陶しそうに目を細める。

「切った方がいいだろうか」

「なんで俺に聞くんだよ」

「ジャンが言った。エレンだと思って接してみろと」

……この鈍感女アアアアアア！

ああ言ったぜ、たしかに言った！

お前があんまりにもウジウジしてうざかったからな！

だからって俺と二人の時に言わなくてもいいだろ！

「長い方がいいんじゃないの？ 切ったらもったいないねーよ」

綺麗な髪だから、って言うのはムカつくから省いた。

「前髪だけ切ればいいだろ。次の休みとかどうだ」

「わかった。空けておこう」

前髪を一房摘んで、ミカサはこくりと頷く。

……あれ、え？ は？

何、俺も一緒に行く感じ？

\*\*\*

とうとう俺にもツキが回ってきた。

今までの苦労を丸ごと消しちまえるぐらいの幸運が、俺を待っている！

「ぐふ……ククツ」

「ど、どうかしたの？」

奇妙な笑い声を吹き出したジャンに、クリスタは身を引いて驚く。

「ああ、気にすんな。悪いいな」

「そんなに嬉しいことがあったの？ 顔、ずっとニヤけてるよ？」

クリスタは小さく笑って言う。

立体機動教官補佐として、無事に初日を終えた。

夕飯の後に、恒例の反省会。

肌寒くなってきた夜の中、ぽわんと明るいランタンの前に、クリスタがちよこんと膝を抱えて座っている。

寒さに身を縮めているせいか、彼女はいつもより小さく見えた。

緩みまくった顔を見られたくなくて、ジャンはしかめ面に、腕を組んで突っ立っている。

「ごほんと、咳払いをして取り繕う。」

「とにかく初日の訓練は上々ってことだな。しばらくは同じ訓練を続けるってことで」

「あはは……みんなが聞いたら落ち込んじゃいそうだね」

「まだ言うんじゃないぞ？ 毎回希望持たせて、直前に地獄に落とすつーのがメンタル訓練にもなるからな」

「そっか。ちよつと可哀想だけど、みんなのためだもんね」  
クリスタが苦笑いで言った。

「そうだな。最低でも、次の休みまでは様子みるか」

「一週間とちよつとぐらいだね」

「そうだな。一週間とちよつと……」

また緩んでくる口元を、ジャンは手で押さえる。

一週間とちよつとで、初デート。

俺と、ミカサが！

脳内は花畑だ。

本来の目的を忘れるんじゃないやねえぞ！と自分を戒めても、油断すると笑いが込み上げてきて困る。

二人で出掛けることが、こんなに楽しみになるとは知らなかった。

挙動不審なジャンを、クリスタは不思議そうに見上げてから、視線を落とす。

「ごめんね」

唐突に、彼女は言った。

ジャンは面食らって、「ごめんって何が？」と聞き返す。

「本当はずつと謝りたかったの。ジャンが開拓地送りになりそうだったのに、私は何もできなかったから」

「何言ってるんだよ。嘆願書作ってくれただろ？」

「あんなの意味ないよ。結局、署名は集められなくて、提出すらできなかったもの」

「あー、そりやお前のせいじゃねーよ。俺の人望がないからだ。気にすんな」

しょんぼりと沈むクリスタに、ジャンは言った。

別にフォローしてるわけでもない。

客観的な事実を伝えたまでだ。

それでも、彼女は力なく首を振る。

ジャケットの袖口から少しだけ覗かせた指先を、温めるように擦り合わせた。

「ミカサはすごいなあ。あんなに簡単に、カツコよく助けちゃうんだ

もん」

「まあな。ミカサは別格だろ。……それも、気にすることじゃねーよ」  
ジャンは独り言のように呟いた。

クリスタも同じかもしれないなど、ふと思う。

自己評価の低い彼女のことだ。

みんなに好かれたくて自分を偽るくらいには、劣等感を抱えている。

彼女の愛されたい症候群は理解できなくても、その類の劣等感なら、ジャンは痛いほどよくわかった。

視線を下に向けると、彼女のつむじ。

丁度いい位置にあったそれに、なんとなく手を伸ばす。

指先が、金色の髪に触れた。

そのまま掌を乗せてみる。

いつのまに手先が冷えていたのか。

掌がじんわりと温かくなって、気持ちよかった。

クリスタって体温たけーな。

子供体温ってやつか？

微妙な感想を持ちながら、ぐりぐりと撫でる。

撫でる。

撫でる。

——ツいや、なんか言ってくれよ！

最初は、落ち込んだ小さな子供か小動物を落ち着かせるような感覚だった。

なのに、沈黙が続くと、急に恥ずかしくなってくる。

反応してくれたら笑って終わらせることもできるのに、クリスタは黙ったままだ。

何だよ、この微妙な間は!?!?

怒ってんのか？ 実はブチギレてんのか？

頼むからなんか言ってくれ!と、天に祈る。

祈りが届いたのか。

クリスタが身動きした。



その拍子に真つ赤になつたうなじが見えて、ジャンは居た堪れず、彼女の頭を軽く小突く。

「あと、謝るなつつつたる」

「あ、あはは……そうだよね、ごめんね」

変な調子に明るくなつた声に、クリスタも上擦つた声で返した。

どちらからともなく、そろそろ解散するかという流れになる。

ばつが悪く、ジャンが立ち去ろうとしたところで、「あのね」と呼び止められた。

クリスタは、ランタンを手を下げていた。

その明かりは足元ばかり照らして、彼女の表情はよくわからない。

「私とライナーが付き合うことになったら、どう思う？」

ジャンは目を見開く。

そして、少し沈黙してから答えた。

「すげーお似合いだと思ふぜ」

## 二十五話

四季の中で、秋が一番好きだなとジヤンは思う。  
暑過ぎず、寒過ぎないところが好きだ。

ジャケットやカーディガンをさらりと羽織って快適に過ごせる気温。  
温。

訓練するにも、散歩するにも、今日以上にナイスな天候はない。  
腹の底から活力みたいなのが湧いてくる気がする。

こんな日は、何て表現すればいいんだったか。

ああ、そうか——これがデート日和ってやつか。  
からりとした秋晴れだった。

日差しは暖かいのに、ひんやりとした秋風が刈り上げた襟足をくすぐっていく。

ミカサの行きつけだという美容院は、綺麗好きの婆さんが住んでいそうな小さな家で、「ベルナルール」と書かれた表札の下に看板がかかっていた。

表札よりも小さな看板は、普通なら見落としてしまうはずだ。

なのに、ミカサの後にも数人の女性が入っていったところを見ると、隠れ家的な美容院なのかもしれない。

小さな看板の隣に並んで、ジヤンは突っ立っていた。

両手はジャケットに出たり入ったりして、両足も立ち位置を何度も確かめている。

周りからはどう見えてるんだろうーな。

もっと待ってる感を出したほうが、それっぽいか？

美容院の出窓に映る自分をチェックしたり、ジャケットを整えたりしている、カランコロンと鈴の音が鳴った。

音の方に顔を向ける。

扉が開いて、赤いマフラーがまず目に入った。

白シャツにネイビーのカーディガンなんて地味な服装も、中身が一級品とかえって邪魔しなくていい。

グレージユのロングスカートは柔らかかそうにふわりと揺れて女子っぽい。

で、足元が黒のショートブーツ。

最後にキリツと締めた印象になるのが、彼女らしかった。

髪は……切ったのか？

もちろん美容院に行ったんだから切ったはずだが、正直どこを切ったのかよくわからない。

ジャンは目を細めて、彼女の髪型をじっくり観察した。

いつも通り綺麗な髪だが、艶が増してるような……。

前髪は、少し短くなった気がする。

1センチ、いや2センチか？

あとなんかすげえいい匂いする。

ジャンの視線に気付いて、ミカサは前髪を軽く手で押さえると「思ったより短くなった」と言い訳じみて言った。

「俺はいいと思うぜ」

ニヤつかないように注意して、ジャンは言う。

恥じらう姿が新鮮で、これがデートの醍醐味ってやつかとちよつと感動した。

「エレンに変に思われないうか」と彼女が不安そうに言ったのを、聞こえないフリをしてジャンは歩き出す。

その後ろを、ミカサがついて歩いた。

「どっか行きたいところあるか？」

「行きたいところ……」とおうむ返しに言って、ミカサは口を閉じる。  
今日の市場も盛況で、旬の味覚を売り出す声が盛んに飛び交っていた。

人通りはそれほど多くはないが、道の半分を境にして、蟻の行列みたいに人の流れができている。

ジャン達が歩いていくのと反対方面へ流れる左側の行列は、やけにカップルが目についた。

どいつもこいつも、縫いつけられたぬいぐるみみたいにピッタリくっついてるから、それで目立つんだろう。

俺らも本当に付き合ってたなら、手ぐらい繋いだかもな。

行き場のない左手をポケットに突っ込んで、ジャンは肩越しに振り返った。

「町なんてめったに来ないだろ。買いたいもんとかねーのかよ」

黙ったままのミカサに、もう一度尋ねた。

彼女はようやく口を開いて、

「本屋に寄ってもいいだろうか。あと雑貨屋さんにも、少し」

「了解」

ジャンは短く答えた。

数軒ある本屋のうち、ミカサは迷うことなく、一番小さな本屋に入った。

入った途端、古い紙の臭いがツンと鼻をつく。

古書がほとんどを占めるようで、立派な装飾の背表紙が本棚にずらりと並んでいた。

棚に入りきららない古書は無造作に床に積まれて、いくつかの塔になっっている。

そのせいで、ただでさえ狭い通路を体を横にして入らなければならなかった。

古書の一つ一つを、彼女は真剣な眼差しで眺める。

ずいぶん長い間悩んでから、ようやく一冊の本を手にとって、パラめくった。

美少女と古書のベストマッチ。

このまま絵画になりそうだ。

これだけで今日来た価値はあるなど、ジャンは大真面目に思う。

結局、ミカサは一冊だけ購入した。

深緑の表紙に金色の装飾。

知的な印象の美しい本だった。

内容を聞けば、ファンタジー世界を少年少女が冒険する話らしいと、ミカサは自信なさげに話した。

その足で、雑貨屋に向かった。

商品はすっかり冬支度が変わっていて、マフラーなどのニット製品

や膝掛け、湯たんぽといった防寒アイテムが出揃っていた。

ミカサはそこでも散々迷った挙句、紅蓮色の毛糸玉を買った。  
そろそろ昼か。

予約していたカフェに、どうやって誘導しようか。

雑貨屋から出て、自然と二人は立ち止まる。

ジャンが頭をフル回転させている時、ずっと黙っていたミカサが唐突に言った。

「不思議だ」

「ん？ 何がだよ」

「私は、人を不快にさせることが多いらしい」

何が不思議なのかも解決しないうちに、急に話が飛んだ。

別にめずらしいことでもない。

ミカサといると、度々こういうことが起こる。

本人の頭の中では繋がっているんだろうが、聞いている側からすれば意味不明だ。

ミカサは抑揚のない声で続ける。

「私にはエレンとアルミンがいる。ので、特に気にしたことはない。  
けれど、大抵の人は私っていると困るみたい」

「ああ。お前は無口っつーか、話すの苦手だもんな」

ジャンは正直に肯定した。

「苦手ではない。必要な時に話しているだけ」

「バーカ。くだらねえこと言い合うのがコミュニケーションってやつだ」

ミカサはぐぬぬと唇を噛んで、

「今日は、あまりうまく話せなかったと思う。エレンやアルミンと出かける時は、もっと話せる」

ジャンの目をしつかりと見据えて言った。

……それはアレか？

俺と話す必要を感じない、と。

遠回しに言ってるのか？

「私がかまく話せない時、相手は居心地悪そうにする。でも、今日は

違った。私が黙っていても、ジャンは嫌そうには見えなかった。それが不思議」

なるほど。

やっと何が言いたいかわかったぜ。

が、絶妙に答えにくい質問だ。

普通は、沈黙が続くと気まずいだろう。

男女で二人つきり——それがデートならなおさらだ。

しかし、ジャンはとつくに普通でない関係をミカサと築いてきた。

ミカサだけじゃない。

エレン、アルミン、コニー、サシャ、ヒストリア——。

何年も、何度も、互いに命を預けあつてきた仲間だ。

沈黙が気まずいなんて感覚、とつくになくなっている。

特にミカサの場合、沈黙には意味がない。

彼女は言葉は少ないが、寡黙なわけじゃない。

言いたいことがあると言えば言うし、なければ黙っている。

黙っている間は、何かしら考えているか、何も考えてないかのどちらかだ。

ジャンは頬をかいて、

「あー、それはだな。……お前がベラベラ喋る気分じゃねえと思ったからだ」

そう言つて、彼女が手に下げる袋を指さした。

「古書はアルミンで、毛糸の方はエレンだろ」

ミカサは何も言わなかったが、微かに驚いたのが雰囲気であつた。

やっぱりか。

ま、それしかねーよな。

予想が当たつても、ちつとも嬉しくない。

ミカサは幼馴染二人を特別に思っている。

ジャンがどんなに努力したつて入れない絆だ。

羨ましいし、妬ましい。

俺も幼馴染に生まれたかつたとか、無意味な願望だ。



## 二十六話

ジャンが訓練兵団に残るとは思わなかった。

それどころか教官補佐にまで任命されるなんて……キース教官は密告の手紙を信じなかったのかもしれない。それか、私の調査不足が原因か。

訓練兵舎の裏にある石造りの井戸で、アニは水を汲みながら思案に暮れていた。

今は理由なんてどうでもいい。

問題は、ジャンが何を考えているかわからないってこと。

今日はミカサと出掛けているみたいだけど、まさか呑気にデートつてことはないはず。

開拓地送りの処分取り消し、立体機動教官補佐——前代未聞が二つも重なるなんて、おかしい。何かあると考えるべきだ。

私たちの作戦を実行するにあたり、ジャンの存在は大きな懸念点になっている。

「おい。聞いてんのかよ?」

突然、男がアニの肩に触れた。

その感触にハツとする。

慌てて笑みを浮かべ適当に相槌を打つてやると、男は満足そうにマシガントークを再開した。

くだらない。

死ぬほどつまらない話。

よくもそんなに楽しそうに喋れるなど感心するぐらいなのに、未だに離れない男の手からじんわりと伝わる熱は不快ではなかった。

水汲みの当番は、持ち回り制だ。

だから運悪く休暇と被ることもままあって、地味に時間のかかる仕事にアニが顔をしかめていると、陽気に手伝いを申し出たのがこの男だった。

男の名前はよく覚えていない。



たしかジル……いや、ギルなんかだったか。

たった200名ちよつとの同期。

なるべく関わらないように、会話もしないように努力してきた。

だからといって、三年間も訓練を共にしたのに、名前すら覚えていない自分にちよつと笑えてくる。

「え、今の面白かった？」

「ああ、最高だよ。アンタっておもしろいね」

話も聞いてないのにそう返すと、男はヘラヘラ笑った。

顔はそこそこ整っていて、その笑顔は客観的に見れば素敵の範囲内に入るんだろうと思えた。

上滑りな会話が続く。

アニは口角を上げて頷いていると、ふと男の視線を感じた。

値踏みするような視線だった。

その視線が、自分の体——胸のあたりに集中していることもわかっていった。

こんなに簡単なのかと、アニは思う。

わかりやすい下心は良い。

気まぐれに踏み躪っても、お互い様な感じがするから。

男の魂胆と、私の魂胆。

どっちが汚いんだろう。

秋の空は青く晴れて、うろこ雲がところどころに漂っていた。

鳥たちが群れをなして町の方へ飛んでいく。

九月の空は、壁の内側も外側も関係なく綺麗で、地上のどこにいたってアニを惨めな気持ちにさせてくれた。

これは、努力の証だ。

我ながら涙ぐましい努力の賜物。

名前なんて、絶対に覚えてやらない。

「今度、町に行きたいな」

「マジかよ!?? いいのか!??」

オーバーリアクションで驚く男に、アニは綺麗に笑いかける。

「うん。その代わり、楽しいところに連れてってよ」

有頂天になった男が返事をする前に、穏やかな声が二人の邪魔をした。

「話の最中にごめん。アニに話があるんだ」

いつのまに近寄ってきたのか。

男の背後から、ベルトルトが気の弱そうな笑みを貼り付けて現れた。

無駄にデカいくせに妙に気配を消すのが上手い。

アニが舌打ちをする。

「悪いけど、席を外してくれるかな」

ベルトルトが言うのと、

「あ？ 邪魔すんなよ」

と男が凄む。

その威圧をベルトルトは意に介さず、今度は低い声で「どいてくれ」と静かに告げた。

一瞬で、男が怯む気配がした。

安い捨て台詞を吐いて立ち去る男の姿を見えなくなるまで見送ると、ベルトルトはふうつと肩の力を抜く。

そして気遣わしげな視線を、アニに向けた。

「あんな軽そうな男に……君らしくもない」

ずいぶんと抽象的な指摘に、アニは冷笑する。

「私らしいって何？ 愛想悪くて、可愛げなくて、いつも怖い顔で睨みつけてれば私らしいってこと？」

「アニは、エレンのことが好きなんじゃないの？」

真面目な顔で、ベルトルトが尋ねた。

一番触れられたくない話題だった。

無遠慮に切り込まれた荒い傷口から憤怒が溢れ、アニは無言でベルトルトを睨みつけた。

たまらず半歩引いて石化するベルトルト。

額に汗を浮かべてはいるものの、引く気はない様子で、健気に踏ん張っているところが余計に腹立たしい。

まるで調整役みたいな顔が気に入らない。

他力本願のヘタレなくせに。  
フオローでもしてるつもり？

「アンタには関係ないでしょ」

アニは怒気を込めて言った。

ベルトルトは宥めるように、必死に訴える。

「いいよ。エレンを好きなら好きで。僕たちは戦士だから……使命感さえ忘れなければ、アニの意思は尊重するよ」

「……やめて」

気持ち悪い。

吐きそうだ。

ベルトルトが「戦士」と口にする時の、光のないビー玉のような瞳が恐ろしかった。

表では兵士として仲間と過ごし、裏では同じ口で戦士だと語る。

それも全ては自分の意思ではなく、あくまでライナーの後をなぞるという体裁。

狡猾な自己保身だ。

慣れたと思っていたおぞましさに、アニは身震いした。

同時に、自分の醜さにも気付かされる。

こうして線を引いて、仲間を軽蔑したがる私は何様なのか——その薄汚さに眩暈がした。

「ギルバートとは、親しいの?」

「……ギルバート」

「さつき話してた彼だよ」

ベルトルトは平然と男の名を明かした。

「お節介かもしれないけど、やめたほうがいいよ。彼は悪い噂しか聞かないから」

「悪い噂って?」

「それは——」

「いろんな女と寝ることが、悪いこと?」

「……知ってるじゃないか」

「あいつが悪い男なら、アンタは大悪党だね」

おもしろい。

これはおもしろいジョークで、ククツと喉を鳴らして笑ってしまっ  
た。

ベルトルトは笑わない。

こういう時に、ノリが悪いところも嫌いだ。

まともぶって心配そうに話すところは、もっと嫌い。

「どうしたんだよ、アニ。僕は別に恋愛するなって言ってるんじゃないんだ。エレンを好きなら、変な男の相手をするのは——」

「好きだった女が尻軽だと、気に入らない？　ずーっと好きだった女に振られて、次の日には別の女と付き合って、毎日嬉しそうに腰振ってるアンタに説教する資格があるの？」

ギルバート。

ああ、覚えてしまった。

言われなくなたって、もう深く関わることなんてできない。

本当は長い髪に憧れていた。

引つ詰めたお団子頭じゃなくて、女の子らしくストレートにおろした髪に。

たまには友達同士で同じ髪型にして、お揃いの髪飾りをつけて。

デートの時には、好きな人の——エレンの好みに合わせたりしたかった。

ずるい。ずるいよ。

アンタたちだけ、楽しそうに。

友達作って、恋愛までしちゃうなんてさ。

そんな幸せなことが許されるなら、今までの私の我慢は何だったの？

積年の胸をえぐる痛み。

その痛みと上手く付き合う方法を、やっとアニは悟った。

つまり、全てに意味はない。

どんなに胸を痛めようと、罪悪感に苛まれようと。

結果は変わらない。

壁内を地獄に落とし、大勢の人間を殺す——その使命から逃れるこ

とはできない。

それなら、思い悩み苦しむことに何の価値があるんだろう？

その時が来るまで割り切って、楽しく過ごす方が利口な生き方に決まっている。

アンタたちにできるなら、私にだってできる。

好きに生きて、戦士として使命を全うする。

だけど、覚えておいて。

私はアンタたちとは違うから。

その時が来ても、無様に被害者ぶったり謝ったりなんかしない。

## 二十七話

その後の一週間。

アニがベルトルトと目を合わせることはなかった。

ライナーにも何か言われるんじゃないかと身構えていたが、それも杞憂に終わった。

ベルトルトは先日の一件を報告しなかったのだろう。

彼らしい気遣いに、苛立ちと安堵が彼女の胸を半分に分けた。

さらに数日が経ち、次の休暇が訪れる。

卒団式まで、使命を果たす日まで、あと何日あるんだろう。

訓練がないと、そんなことばかり考えてしまう。

被害者ぶって感傷に浸りたくなくて、その日、アニはデートの約束をしていた。

また別の男——いかにも軽薄そうで、都合が良さそうな男だった。

アニは支度をやる。

ブロンドの髪をストレートにおろし、丁寧に櫛を入れた。

控えめに花柄の刺繍のついた白シャツと、Aラインにふわりと広がる黒のスカート。

鏡に写った自分は、クラシカルな雰囲気のお嬢様みたいだった。

相手は好きな人ではないけれど、男の子とデートするのは初めてで胸が高鳴る。

そこまで考えて、はたと気付いた。

そういえば、初めてのデートはジャンが相手だったっけ。

普段着のパーカーで出掛けたら、わかりやすいぐらいガツカリしていたジャンを思い出して、アニはクスクス笑った。

名前も覚えていない男のために着飾るなら、ジャンのためにすればよかったと少しだけ思った。

「ありがとう！ このお花の飾りがすっごく可愛くて、一目で気に入っちゃったよ」

宿舎を出ると、運悪くミーナと会った。

めずらしくスカートなんて履いているアニを、「かわいい！」とひとしきり褒めちぎった後で、彼女は嬉しそうに言った。

覚えのないお礼の言葉に、アニは面食らう。

ミーナの髪はいつもの二つ結びではなく、引つ詰めたお団子頭だった。

彼女が上機嫌でくるりと後ろを向くと、黒髪をまとめたヘアゴムが目に入る。

小さなピンクの花飾り。

それはジャンと出掛けた時、ミーナにプレゼントしようと、アニが散々悩んで諦めたものだった。

「それ……なんで……」

アニは掠れた声で尋ねる。

「似合う!?? えへへへ、照れなくなっただっていいのに！ ジャンから聞いたよ。アニが一生懸命選んでくれたって。自分で渡すのが恥ずかしいから、ジャンにお願いしたんでしょ？」

彼女は悪戯っ子みたいに無邪気に笑って、

「実は、私からもプレゼントがあります！ って言っても、これもジャンから貰ったんだけどね。でも、かわいいからいいの。アニにも絶対似合うんだから」

悪い予感がした。

サツと血の気が引く。

アニは瞬きも忘れて、ミーナを見つめていた。

マジシャンのようなコミカルな仕草で、ミーナが手を開く。

そこには青い花飾りのついたヘアゴムが乗っていた。

「お揃いにしようよ」

ミーナは優しく、アニの髪にあてがう。

金糸の合間に咲いた青い花は、同じぐらい青ざめた肌にしたしかによく似合っていた。

その瞬間、アニの胸の奥で、何かが壊れる音がした。

今まで必死にせきとめていた思いが溢れ、正体不明の衝動に突き動かされ、アニはミーナの手を振り払った。

青い花が地面に転がり落ちる。

汚れたそれを奪うように拾い上げて、アニは走った。

どこに向かつているかもわからぬまま、逃げ出した。

恐ろしかった。

目の前の優しい少女を——友達を、踏み潰して殺すのかと思うと、頭がおかしくなってしまうそうだった。

——ちがう。

私はもうとっくにおかしくなってる。

何かが狂ってしまった。

間違えた。

誰とも関わるべきじゃなかったのに、仮面を被っても仲良くできるなんて勘違いしたんだ。

いつから？

どこから狂ったの？

そして、自分でもどこへ向かっているかわからなかった足が、誰かを探していることにアニは気付いた。

ジャンのせいだ。

ジャンが余計なことをしなければ、私は上手くやれていた。

戦士でいられたはずだったのに。

怒りの矛先が決まった瞬間、耐え難い激情がアニを支配した。

\*\*\*

ミカサとのデートから、一週間と少しが経った頃。

ジャンは今まで感じたことのない、大きな手応えを感じていた。

無口だった彼女がたまに冗談を言って、親しげに微笑む。

そのすべてが自分に向けられたものだと思うと、今度こそミカサの「特別」になれるんじゃないかとジャンは舞い上がっていた。

卒業まで残すところ約二ヶ月。



最終試験開始は二週間後にはじまり、約一ヶ月をかけて全教科の試験が行われる。

そして試験終了後は進路——希望兵団への準備を二週間かけて行い、最終的な成績が確定する。

ジャンは、立体機動の最終試験でミカサに勝つことを第一目標に掲げることにした。

もし彼女に勝てれば、男として箔がつく。

——告白のタイミングがあるとしたら、そこしかない。

そういった理由わけもあり、エレンとアニには早急にくつついてもらわなければ困る。

それこそが人類を救い、ヒロインとハッピーエンドを迎えるための最短ルートだと、ジャンは信じていた。

だから激怒したアニが現れた時、ジャンは面食らった。

彼女は兵舎の食堂に駆け込んでくると、息を切らして周囲を見渡した。

休日の食堂は、最終試験前のちよつとした自習室と化していて、まばらにいた訓練兵たちはアニの勢いにぎよつと目を剥いた。

射殺すような視線が、一人で座っていたジャンを捉える。

アニは履き慣れないスカートを揺らして近付くと、静かに切り出した。

「どういうつもり？」

「どうって……何の話だよ」

ジャンは戸惑って尋ねた。

彼女は答える代わりに、机に叩きつけるようにして置いた。

それはミカサとデートの最中を買ってきた、青い花飾りのヘアゴムだった。

アニのために用意したプレゼントを視界に入れて、ジャンは安堵する。

ピンクの方をミーナに、青い方をアニのために買った。

以前は、アニも頑なに一線引いているところがあつたが、今の状況ならむしろ好ましいイベントだと思った。

友達の一人でもできれば、精神的に安定する。

そうすれば、エレンとの恋愛にもさらに前向きになるはずだと。

「ああ、なんだ。話ってそれかよ。まあちよつと臭え演出しちまったけど、ミーナは喜んでたろ？ いいって別に礼なんて、俺とお前の仲だしな」

と、ジャンは茶化して笑う。

「余計なことしないで」

アニは感情のこもらない声で言った。

けれど、彼女の瞳には憤怒の光が宿っていて、ジャンはたじろぐ。

「余計なことって……何怒ってんだよ？ 俺はお前のためにだな——」

「それが迷惑だって言ってるんだよ！」

アニが大声で叫んだ。

怒りの鋭さに、ジャンは息を呑む。

「わからない？ アンタのせいで、めちやくちやだよ。すべて台無しにされた」

アニは真つ青な唇を震わせた。

「二度と私に関わらないで」

「は!!? ちよつと待てよ! ……エレンのことはどうすんだ」

語気を荒げそうになって、ジャンは慌てて声を潜めた。

何で急にキレてんだよ!!?」

今更アニの離脱は困る——プランの総崩れだ。

「どうでもいい。アンタの恋愛ごっこには、もう付き合えない」  
そう言つて、アニは背を向けた。

せつかくお前のために、好意でやってやったのに。

何が気に入らねえんだ!

ジャンは立ち上がり、彼女の背中に向けて怒鳴る。

「ふざけんなよ! テメエから相談して来たんだろが!」

しかし、アニが振り返ることはなかった。

## 二十八話

ジャンと一悶着あった夜。

自室のベッドの中で、アニは目覚めた。

ぼうつとする頭で身体を起こし周囲を見渡すと、窓から月の光が差し込んで、暗い部屋を仄かに照らしていた。

隣のベッドからは、ミーナの規則正しい寝息が聞こえてくる。

そうだ。

結局、デートには行かなかったんだっけ。

とてもじゃないが、そんな気分にはなれなかった。

誰の顔も見たくなくて、拗ねた子供のようにベッドの中で丸まっているうちに、眠ってしまったんだろう。

せつかくのデート服がしわくちゃになっているのを眺めていると、だんだんと思考がクリアになっていく。

寝過ぎた頭が痛む。

けれど、昼間の混乱よりかはいくらかマシな気分だった。

アニは息を吐くと、足先を床におろした。

ぎしりと床板がきしむ。

夜行性の鳥や虫の音にまぎれるように、無駄に終わった白いシャツとスカートを脱いで、パーカーとスキニーパンツに着替えた。

綺麗な金髪を低い位置で丸める。

自分らしさを取り戻していく儀式。

戦士に寄っていく自分を自覚しながら、ミーナを起こさないようにして、アニはそっと自室を抜け出した。

今夜は、戦士たちの最後の会合の日だった。

「アニには、任務から外れてもらうことにした」

唐突な宣告に、アニは耳を疑った。

急に垂れ込めた暗雲で、月が陰った瞬間の言葉だった。

立体機動訓練場の森は闇に沈み、それを言ったのがどちらの男か一

瞬わからなくなつたが、すぐにベルトルトの声だと思ひ至る。

久しぶりに口を開いたかと思えば、夕子の悪い冗談だ。

アニは眉をひそめ、

「冗談言つてる時間はないはずだよ。今日の報告から手短かに話して」とライナーがいるはずの暗がりには話しかけた。

が、返事はない。

アニは自分の心臓が大きく脈打つのを感じた。

嫌な沈黙に息が詰まる。

目が慣れてくると、木にもたれかかったライナーが、直立したベルトルトが、自分の方を向いているのが輪郭でわかった。

「……どういうこと？」

アニは呆然と尋ねた。

「僕が判断した。今のアニは、任務を遂行できる精神状態じゃない」

ベルトルトが言った。

毅然とした態度が鼻につく。

人の心を見透かしたような物言いに、アニは怒気を孕んで言い返した。

「バカなこと言わないで。私は冷静だよ」

「冷静？　昼間のはどう説明するの？　ジャンと派手に言い合つてた時は、とても冷静には見えなかつたけど」

「……少し疲れてただけだよ。もう大丈夫だから」

「大丈夫じゃないだろ。そんな言い訳で済むと思つてるなら、大間違いだ」

ベルトルトが力をこめて言った。

言い訳なんかじゃない。

何であんなことをしたのか、自分でもわからないだけだった。

わからないことを説明しろと言われても困る。

ふつつつとした怒りが腹の底から込み上げてくるのを感じた。

「ああ、そうだね。アンタの言う通りだよ。私は冷静じゃなかつた。

——とつくに狂つてる。当たり前でしょ？　あんなに大勢の人間を殺しておいて、まともな精神でいられるはずない」

アニは眼光鋭く、ベルトルトを睨みつけた。

「けど、だから何？ 私が狂ってるから、任務から外す？ バカじゃないの。作戦は目前に迫ってる。計画は変えられない。私が抜けた穴を埋めるなんて不可能だよ。故郷に帰るためには、やるしかないんだから」

改めて口にすると、ずしりと胸に来た。

自分の言葉に、意識しないようにしていた現実を突きつけられる。そうだ。

やるしかない——故郷へ帰るために。

彼女の決意に、しかし、ベルトルトはあっさりと首を横に振った。

「いいや、問題ないよ。壁を壊すのは僕とライナーの役目だ。壁さえ壊せば、壁内人類を滅亡させることができる。つまりアニは必要ないんだ」

予想だにしなかった返答に、アニは目を見開き、

「そんなこと——ツ座標はどうするの!?？」

と激しく詰め寄った。

至近距離で、男の顔を見上げる。

すると暗がりの中でも彼の目鼻立ちがくつきりとわかって、本当に久しぶりにベルトルトと目が合った。

その瞳にはアニが記憶していた弱々しい光はなく、暗く沈んだ狂気があるだけだった。

「僕とライナーでなんとかする」

彼は静かに言い切った。

雲が流れ、月の光が再び三人を照らしていた。

アニは青ざめて後退り、今度はライナーの方に顔を向けた。

精悍な顔立ちに落ちる影。

その影にはベルトルトと同様の狂気が潜んでいて、二人の結託した決意を感じさせた。

そして、アニは悟る。

もう何をしたらって無駄だ。

本気で私を——。

「……私を殺すの?」

正気のない顔で、アニは声を絞り出す。

「ち、ちがうよ! そんなことするわけないだろ!?!?」

ベルトルトはぶんぶん頭を振って否定すると、

「どうなつても僕たちは戦士だ。アニのことは仲間だと思ってるよ。だから、作戦がうまくいって故郷に帰れることになったら、一緒に帰ろう。あとは僕たちに任せるんだ」

「……それはアンタたちにだけ人殺しを押し付けろってこと?」

「そうは言つてないよ。ただアニが限界なら、僕たちだけでも殺しはできるんだ。アニが無理して手を汚す必要はないよ」

「自分だけ何もしないなんて、そんな虫のいいことできるわけない!」  
最悪だ。

いくつかある選択肢の内、ベルトルトから提示されたそれは、アニにとって最も受け入れ難い選択だった。

下劣で、狡猾。

糞野郎のやる所業だ。

しかし、それは同時に甘美な響きで彼女の胸を震わせてもいた。

「なら、殺せるか? エレンやミーナ——104期の連中を」

静観していたライナーが、鋭く問う。

「やれる。その時になれば、やるに決まってる」

口先で、アニは答えた。

薄っぺらい言葉。

頭の芯から指先にかけて痺痺したように痺れが走り、アニは何か言い足さなければと思つたが、今更何を言つても意味がないようにも思えた。

黙り込んだアニをじつと見つめて、

「じゃあ、証拠を見せてよ。殺せるって証明してくれば、アニを作戦に加えよう」

とベルトルトは提案した。

そして冷酷に告げる。

「ジャンを殺すんだ」

その瞬間、アニの頭の中は真っ白に染まった。  
ベルトルトの言葉が何度も何度も脳内で再生される。

殺す？ ジャンを殺す？ 私が？

そんなこと……一体何の意味があるの？

——いいや、わかってたじゃないか。

すべてに意味はないって。

何の意味もない。

私の苦しみも、誰かの死も。

ただ私は証明すればいいだけだ。

すべてが無意味だということを。

「わかった。それでアンタたちの気が済むなら」

そう言つて、アニは踵を返す。

もう何も考えたくはなかった。

考える必要もないことだと自分を納得させていた。

ジャンを殺す。

それだけでいい。

そうすれば私は戦士に戻れるんだから。

\*\*\*

「おい……聞いてないぞ。ジャンを殺せなんて、どういうつもりだ？

作戦前に目立つ行動はまずいだろ。お前がアニのことは任せてほ  
しいって言うから、俺も黙っていたが——」

アニの背中を見送った後、ライナーが渋い顔で言うのを遮って、

「ああ、悪かったよ」

とベルトルトはため息をついた。

「でも、大丈夫。見てただろ？ そんなこともわからないぐらい、アニ  
は混乱してるんだ。今の彼女にジャンを殺すなんて——もしそう  
なっても、僕が責任を取る」

「……お前ばかりが背負う必要はないんだぞ。ユミルと別れたのも、任務のためだろ」

「ははっ……ユミルのことは関係ないよ。単に僕が飽きられただけさ」

ライナーの追求を、ベルトルトは曖昧に笑って誤魔化していた。



## 二十九話

寒さが厳しくなると、めつきり夜が長くなった。

初秋の頃は六時や七時まで明るかったのに、今では五時に暗くなる。

夕焼けも短く急速に日が沈むせいで、立体機動の夜練は一時間も早く切り上げるよう教官に言われるようになり、ジャンはじりじりと心臓を焦がしていた。

焦燥感が嘔吐のように込み上げてくる。

ただでさえ時間が足りない。

同期の立体機動を監督し、自身のスキルアップも叶えようとする  
と、どうしても睡眠時間を削ることになる。

調査兵団だった頃も多忙で徹夜には慣れていたが、まだ成熟して  
ない身体だと正直きつい。

過酷な訓練に悲鳴をあげる身体を無視して、月明かりの下、ジャン  
は筆を走らせていた。

今夜みたいに雲がある日は月光が弱くて、文字が見えにくい。

目を細めて文字を追っていると、眼球の奥がずんと重くなる。

蠟燭は消耗品だ。

部屋ごとに支給される本数も決まっているから、無駄遣いはできな  
い。

しばらく黙々とレポート——立体機動教官補佐としての報告書——  
を書いていると、さすがに疲れが来て、ジャンは長く息を吐いた。

目を閉じるのはまずいのに、酷い目眩に仕方なくまぶたを下ろす。

一秒でも無駄な時間は使いたくなかった。

何より、休んでいると嫌なことを思い出してしまう。

『迷惑だっって言ってるんだよ！——アンタの恋愛ごっこには、もう  
付き合えない』

強烈に拒絶された。

アニの激情的な台詞がリフレインする度に、ジャンは歯痒さに奥歯

を噛み締めた。

口論した翌日。

殺気立った瞳を爛々と光らせたアニが、結い上げられた髪とパーカー姿で現れた。

あれだけ一緒に行動していたエレンから離れて孤立。

あわよくばと騒いでいた彼女のファンたちは静まりかえり、誰もが腫れ物に触るようには彼女を避けていた。

アニの協力を得られないなら、ジャンの作戦は破綻したも同然だ。さっさと諦めて、次の作戦を立てる方が賢明だろう。

次の作戦——つまり武力行使。

壁の破壊を止めるには戦士組三名の殺害を……、いや、壁外の情報を得るためには壁の破壊後に捕らえた方が——そういつたことを考えるべき段階に入っていた。

わかっている。

わかっているのに、なのに、どうしてもそんな糞な考えに頭を使う気になれない。

グガガガガガ——ツとコニーのデカイイビキが響いて、ジャンは我にかえった。

振り向くと、涎を垂らしてアホ面で寝ているコニーと、行儀良く仰向けに寝ているマルコがいて、ジャンは唇を歪めて笑う。

こいつらのせいだ。

俺がぬるくなっちゃったのは。

何かを得るためには何かを捨てなければならぬ残酷な現実を、知っていたはずなのに。

頭の中にあつた凄惨な未来が、悪夢のように曖昧に薄れていく。

あれほどの絶望を忘れられるはずなのに——不思議だ。

すべてを救えるという希望。

それがジャンを狂わせる。

在りし日の仲間たちと過ごし、平和ボケに毒されたんだろう。

自覚はあっても、それを間違っているとは思いたくなかった。

訓練兵団の卒業まで、あと二ヶ月。

あと二ヶ月しかない残り時間を、まだ二ヶ月あると脳内で変換していた。

まだ救える。

まだ間に合うんだと。

コニーとマルコから視線を外して、ジャンは再び机に向かう。

マルコを——104期の面々を救うためには手を抜けない。

机にかじりつくように集中してなんとか報告書を仕上げると、息つく暇もなく新しい紙を机上に広げ、次は自身の立体機動について考察を書き留めていく。

アルミンのような発想力も、ミカサのような天賦の才も、エレンのような強靱な意志も、ジャンは持ち合わせていなかった。

だから、身を粉にして努力し続けるしかない。

迷いや苛立ちといった不必要な感情を放棄して、目の前のやるべきことを必死に片付ける。

泥臭くてスマートとは程遠いが、それでも今度こそ成し遂げてみせる。

コニーのイビキに混じって、ジャンの操る万年筆が薄暗い部屋に音を立てていた。

\*\*\*

動術。何日も身を削るような夜を過ごし、調整を続けてきた自身の立体機

動術。そこに僅かな歪みが生じていたことに、ある日突然、ジャンは気付いた。

104期が鬼ごっこに勤しむ一方、ミカサとマンツーマンの特訓の最中。

ジャンの目の前を、ミカサがビュンビュン風を切って飛んでいく。唸りをあげるワイヤー。

物凄い勢いで離れていく背中を、今日こそ追い抜いてやろうとジャンが息巻いた時だった。

グリップを強く握り上体を固定してガスを吹かす——と言葉にできない違和感が彼の全身にまとわりついた。

微妙に噛み合わない気持ち悪さ。

いつもと同じように速度を上げたはずなのに、ミカサとの距離は縮まらない。

それどころかどんどん離されていく。

なんだ!?!?

——ツクソ！ 追いつけねえ！

一気にワイヤーを巻き取りながら、ジャンは歯を食いしばって風圧に耐える。

が、なぜか失速していた。

自分でも原因がわからない。

ガスがなくなったわけでも、ベルトが緩いわけでも、ましてや装備が壊れたわけでもない。

立体機動において抜群のセンスを持つジャンにとって、それが初めての不調だった。

何が原因だ!?!?

何が悪い——考えろ！

これ以上ミカサに差つけられてたまるかよ！

最終試験は目前なんだぞ!?!?

必死の思いで飛び進めると、とつくに見えなくなっていたミカサが大木の枝の上で待っていた。

ジャンは舌打ちをして、彼女と同じ枝に着地する。

「そろそろ休憩した方がいい」

抑揚のない声で、ミカサが言った。

「必要ねえ。まだ始めたばかりだろ」

ジャンは答えた。

いいから早く行けど、彼女を追い払うようにしつしと手を振る。

「でも、今日のジャンはいつもより遅いと思う。体調が悪いのでは？」

食い下がって、ミカサは尋ねた。

うるせえよ。お前に言われなくてもわかってんだよ。

「余計な心配すんな。行くぞ——手抜くなよ」

そう言って、ジャンはアンカーを射出する。

浮遊感に身を任せて飛び出すと、視界からミカサの姿が消えた。

一番言われたくないやつに、触れられたくないところを突かれて、ムカついた。

彼女なりに心配してくれたんだろうことは理解していても、苛立ちを抑える余裕はなかった。

上から言ってるじゃねえよ。

訓練兵ごっこやってるお前らとは、背負ってるもんがちげーんだ。

調査兵団に入ってから、ジャンは人類に心臓を捧げ続けた。

期間にして4年だ。

しかし、ただの4年じゃない。

何度も死にかけた。

もう死んだ方がマシなんじゃねーかと思う地獄を、修羅場を潜り抜けて、まるでその度に心臓を取り替えているような気分になった。

数えきれないほどの仲間が死んだ。

同じぐらい敵も殺した。

4年どころじゃない——そいつらの人生丸ごと上乘せしたような長い時間だった。

地獄のような未来を消し去りたい。

そのためなら何だってする。

そう強く思った。

ジャンは精神をすり減らしながらも瞳をギラつかせていたが、クリスタの何気ない報告にトドメの一撃を喰らう事態となった。

「……悪い。今、なんつった？」

呆然と、ジャンは聞き返した。

指に力が入らない。

視界がぐにやりと歪んだ。

「ユミルね、ベルトルトと別れちゃったんだって。ジャンにはお世話になったから、私から報告しておいてくれってユミルが——」

眉を下げて、クリスタは少し言いにくそうに答えた。

月明かりに照らされた彼女は白く、夜の黒さとコントラストに浮き上がる。

白黒の絵画でも眺めているようで、まるで現実感がなかった。

「何だよそれ……ふざけんなよ」

うわごとのように呟いて、ジャンはクリスタの両肩を強く掴む。

「理由は?!? いつ別れたんだ?!?」

叫ぶように問いただした。

頭の中が真っ白に染まる。

「いッ——痛いよ、ジャン」

「いいから答えろ! 何が原因だ?!?」

「わ、わからないの……ユミルも詳しくは話さなかったから」

クリスタは怯えた瞳をジャンに向けていた。

何でだよ、……何で上手くいかねーんだッ?!?

俺はただ人類を、仲間を救うために今まで努力して——どいつもこ

いつも俺の邪魔ばかりしやがって!

血液が逆流して頭が割れそうなほどの怒りで、どうにかなってしま  
いそうだ。

今までの成果が、ことごとく壊されていく。

アニもベルトルトもダメなら、一体どうすれば——

「そうだ……そうだよライナーだ! ライナーとはどうなったんだよ  
?!? お前ら付き合うんだろ?」

じつとりと嫌な汗を滲ませて、ジャンは笑いながら叫んだ。

掴まれた肩が痛むんだろう。

クリスタは肩を震わせて、

「ちがうの……ごめんね。ライナーとは付き合えないの」

と消え入りそうに呟く。

「は? ……話が違うじゃねえか。このあいだ俺に聞いただろ? ラ  
イナーと付き合ったらどう思うかって」

あの質問はライナーとの交際を後押ししてほしいと、彼女なりの相談だとジャンは捉えていた。

だからこそ、変につつかないで見守ろうと決めていたのに。そういう意味じゃないなら、あの質問にはどんな意味があったのか。

何の意味もなかったのか。

いや、今更意味を求めても無駄だ。

結果的にライナーと付き合う気がないことは、彼女の様子を見れば明らかだった。

「わかってるの。……ジャンは、私とライナーに付き合ってほしいんだって。でも、でもね……私は——」

大きな瞳を潤ませて、クリスタはやつと声を絞り出した。

クリスタが必死に何かを伝えようとしていたのに、何も聞きたくなくて、ジャンは「もういい」と冷たく彼女の言葉を遮る。

そして、継るように掴んでいた彼女の肩を解放した。

時間の無駄だ。

気付けば、空高く昇っていた白い月。

じっと見ていると急速に落下してきそうで怖い。

月が落ちれば、明日が来てしまうからだ。

ジャンはクリスタに背を向けて、自室へ歩き出した。

クリスタは何も悪くないんだとわかっているけど、これ以上一緒にいると怒鳴りつけてしまいたいそうさ。

怒鳴る時間すら惜しい。

自分の名を呼ぶ声が背後から追ってきたが、聞こえないふりをしてジャンは立ち去った。

## 三十話

「よおー。なーにしけた面してんだよッ！」

次の日の晩。

夕飯を食べ終わって寮への帰り道を歩いていると、陽気な声と共に思いつきり背中をぶっ叩かれた。

唐突な衝撃に、昨日の一件で一睡もできなかった身体がぶっ倒れそうになるのをジャンはなんとか踏み止まる。

朝から晩まで苛烈な訓練を終え、まだ元気があり余ってるバカでなおかつ今のジャンに糞怠い絡みができるバカは一人しかいない。

ジンジンと痛む背中を耐えて、ジャンは苦々しく振り返った。

「そりやーすげえな。背後からでも俺の顔色が読めるなんて、お前にしちや頭を使ったようだな、コニー」

「そんなに褒めんよ！」

嫌味全開の言葉を、コニーは快活に笑い飛ばす。

褒めてねーよと、ありきたりな返しをするのもバカらしい。

ジャンは眉間にシワを寄せて、

「それで何の用だ？ ずいぶんご機嫌じゃねえか」

「わかる!? いや〜わかっちゃうか〜！俺ほどの天才ともなるとオーラが隠せねえんだよなあ〜」

コニーは得意満面に顎をさすりながら、

「正直言つて絶・好・調だぜ！俺は10番以内には間違いない入るだろうな。そうなったら、晴れて憲兵団に……エリートコースまっすぐらだ！」

クツクツクと含み笑いをするコニーに、ジャンは「へーよかったな」と冷めた声で相槌を打った。

順当に行けば、コニーが10番以内に入るのは当たり前だし、何かの影響でそこから外れたとしてもコニーは調査兵団に入るんだ。

たいした問題じゃないだろう。

「なんだよ、ジャン。お前にしちや大人しいな」



「何度も言ってるだろ。憲兵団にはもう興味ねーんだ」

「けど、ジャンの場合は10番以内に入らないと開拓地送りだろ？」

ぐっ……バカのくせに余計なこと覚えてやがる。

コニーはニヤリと笑って、

「マルコが言ってたぞ。よくわかんねーけど、調子悪いんだってな。お前がどうしてもって言うんなら、天才の俺様がコツを教えてやってもいいんだぜ？ ま、誰にでも真似できるってわけじゃねーが」

と坊主頭のくせに、フアサアーツと髪をかきあげる仕草をした。

うっわウゼエエエエエ！

もしかして俺のマネか？

いや全く似てねーけど。

たしかに昔はそんなこと言ったような気もするが……。

心当たりがあるだけに強く出れない。

疲れる絡み方にイラつきを抑え、ジャンはため息まじりに言った。

「あのなあ、俺は忙しいんだ。バカに構ってる暇はねーんだよ」

「ん？ バカってお前のことか？」

「は？ おいおい、コニー。自分の代名詞も忘れちゃったのかよ」

「……何言ってるんだ？ 現時点で俺の方が成績は上なんだから、ジャンは俺より下で、つまり俺よりもバカってことだろ？」

「よし、ぶっ殺す」

きよとん顔で喧嘩を売ってくるコニーに、ジャンは拳を振り上げる。

そこに、「もう、何じやれてるんですか」と呆れた声が投げられた。

「じやれてねえよー」

反射的にジャンが怒鳴り返すと、サシヤが冷めた目でこちらを眺めていた。

「はいはい。八つ当たりはやめてください。廊下のだ真ん中でみつともないですよ。——というか、今日の第一倉庫の当番はお二人ですよね？ 早くしないと就寝時間に間に合いませんよ」

サシヤは目を細めて言った。

そうだった。

当番か……すっかり忘れてたぜ。

時間の無駄にしかならないが、最終試験目前の時期に当番を代わってくれる奴はいないだろう。

ジャンは舌打ちをして「先に行くぞ」と不機嫌そうにコニーに言う  
と、第一倉庫に向かった。

「……あれ？ コニーは行かないんですか？」

ジャンが立ち去るのを見送っても一向に動こうとしないコニーに、  
サシヤは首を傾げる。

「だって俺当番じゃねーから」

「でも、当番表にはたしかにコニーって書いてあつたんですけどね」  
「ん？ ……あー、そうだった。さっきアニに当番代わってくれって頼まれたんだよ。それでジャンに言おうとしたのに、結局伝え損ねたな」

「まあ、本人から聞くだろうし大丈夫でしょう。でも、めずらしいですねえ。アニが当番代わるなんて……」

ジャンが消えて行った廊下の方を見つめながら、サシヤはそう呟いた。

\*\*\*

第一倉庫には、マットや巨人型模型や金属部品など立体機動訓練で使用した備品が所狭しと詰められていた。

まずは備品の数を確認する。

前日の当番が数えた個数と合っているか、一つ一つ見ていくのは結構な手間だ。

予算の少ない訓練兵団にとって備品の紛失はかなりの痛手になる。

中には売れば金になる代物もあるから、盗難防止の意味合いもあった。

薄暗い倉庫内を照らすランタンを棚の上に置いて、ジャンは手元の帳簿と備品を照らし合わせていく。

早く終わらせたくて黙々と進めていると、ふと棚板が目について、つーつと人差し指を滑らせた。

結構な量の埃が指先に付着して、ジャンは頬をひきつらせる。

全然掃除の仕方がなってねえ。

前の当番サボってやがったな!?!?

潔癖症の上司に散々叩き込まれたせいか、この現状を見過ごすのはどうにも気持ち悪い。

当番なんて適当にすませようと思っていたのに——掃除にかかる時間を頭の中で捻出していると、背後でガラガラと戸を引く音がした。

やっとコニーが来たようだ。

ジャンは振り返らず、金具の数を数えながら声をかける。

「遅えよ。今日は速攻で終わらすぞ。俺が奥の方から見てるから、お前は——」

その時、ガチャリと微かな音がジャンの耳に届いた。

それが鍵の閉まる音だと理解すると同時にジャンは反射的に伏せる。

間一髪、頭上を通り過ぎる鋭い蹴り。

その蹴りが激しい音を立てて棚を破壊した。

飛び散る木片。

スローモーションで、ランタンが床に向かって落ちる。

落ちていく先、地面で碎ける前に。

ジャンはグツと足に力を込めて、襲撃者にタックルを食らわせた。

手応えがある。

彼女の細い腰にしがみつき、そのまま押し倒そうと——  
とった!

そう確信した瞬間、腕の中から逃げた。

彼女の体が猫のようにぐにやりと柔らかくなって、地面に倒れ込むときには形勢は逆転していた。

ジャンはうつ伏せに拘束され、右腕を捻り上げられる。

ギリギリ手が届きそうな位置に転がったランタンはひび割れて、襲撃者の顔を歪めて映していた。

だが、顔なんて見るまでもないだろう。

「か弱い乙女に襲いかかるなんて、野蛮なんじゃないの」

「バカ言うなよ。襲ってきたのはテメエの方だろ」

ふーっとアニが勝利の息を吐くのを、ジャンは鼻で笑った。

抜け出そうと身動きしてみるが、体はもちろん右腕もピクリとも動かせない。

クソッ！

動けねえ。

アニのやつ……最近様子がおかしいとは思っていたが、何でこんなことを!!??

凄まじい殺気——俺を殺す気だ。

何が目的で？

決まってる、バレたんだ。

俺が奴らの情報を握ってるってことに。

どこまでバレた!!? 何でバレたんだ!!??

殺しに踏み切れるほどの確信を与えたとは思えねえ！

一体どこでミスをした!!??

……いいや、落ち着け。

反省は後だ。

今はこの場を切り抜ける方法を考えるんだ。

時間を稼いで、コニーが来るのを待つしか——

「ちなみにコニーなら来ないよ。当番代わってもらったからね」

ジャンの思考を読んだかのように、アニは無情に言い放った。

……ふざっけんなよクソがアアアアアアアアア！

小石みてえな頭しやがってマジで役立たねえ！

さっきの糞くだらねえ絡みする暇あったら報告しとけよ！

ジャンは内心で毒づく。

と、唐突に背中に柔らかいものが当たった。

温かい。

ジャンの背中に、アニは猫のように体を擦り寄せていた。

「何しやが——ッ！」

驚いて、ジャンは声を裏返した。

女の子の柔らかい体を服越しでも感じる。

そんな場合じゃないのに、顔が熱い。

「心臓の音が早いね。爆発しそう」

ジャンの背中に、アニは耳をピタリとつけて言った。

「怯えてるんでしょ。まるで私に殺されるのがわかってるみたい。

……おかしいね。いくら襲われたからって、同期に殺されるなんて発想がすぐにはできるもの？ ……傷付くよ。アンタとはうまくやってきたと思ってたのに」

「ハッ。夜中にお前の面見たら、誰だって震え上がるだろ」

やはり殺す気か。

アニは確信している。

俺が何かしらの事情を知っていることを。

だが、どこまで知っているかはバレてねえはずだ。

上手く誤魔化して、説得できればまだ修復可能か——!??

「失礼だね。女の子がこんなにお問い合わせしてるのに、まともに答える気はないの？」

「いきなり蹴りかかっついで、人をお願いする態度じゃねーだろ」

軽口を叩きながら、ジャンは目玉を動かす。

かろうじて自由がきくのは、眼球と左腕だけだ。

アニはしなやかな動きで上体を起こした。

「そう？ なら、言い方を変えるよ。——楽に死にたいなら、アンタの知ってること洗いざらい吐きな」

「……おいおい、脅しに切り替わるの早くねえか。もう少し駆け引きを楽しめよ」

「悪いけど。アンタと腹の探り合いをするのは飽きたんだよ」

そう言って、アニはジャンの小指を握った。

人体として曲がってはいけない方向に、彼の小指が押し込まれる。

骨がミシミシと悲鳴を上げた。

「グッ——そいつア残念だッ！」

地面に転がっていたランタン。

それを、ジャンは左手で掴んでアニに投げつけた。

彼女がのけぞって避ける隙について、ジャンは拘束を抜け出す。

ダメだ。

アニは本気で俺を殺す気だ——説得できる状況じゃねえ。

かといって、逃げ場はない。

倉庫内は狭いし、扉には鍵がかけられている。

この場を切り抜けるには——アニを制圧するしかねえ！

地面を蹴る。

姿勢を低く、彼女の懐に入った。

突き上げるように、アッパーをアニの腹に打ち込む。

が、ギリギリのところまで半身になってかわされた。

逃すかよ！

ジャンは左拳を握る。

拳から飛び散る血飛沫。

血を纏った拳が空中に赤い線を描いて、アニの顔面にストレートを

放った。

だが、それも軽く避けられる。

余裕の笑みを浮かべたアニの頬に、ジャンの生温かい血がかかっ

た。

その瞬間、アニの目が見開かれる。

どうして血が？

その疑問に答えてやるほど親切にはなれない。

ジャンは唇を吊り上げて、避けられた左拳をアニの背中に向かって

振り下ろした。

その掌には、ランタンのガラス片。

背中中の急所を狙うんだ。

大丈夫。

普通の人間なら致命傷でも、こいつらは首と胴体が繋がってる限り

治すことができる。

まずはこの一撃で、アニの動きを止める！

鋭利なガラスの先端がアニに迫る。

迫り、近付き、彼女の衣服にその切先が触れる——と次の瞬間、彼女の姿が消えた。

「あ？」

戸惑いに、思わず声が漏れる。

「こつちだよ」とアニの冷たい声が聞こえた。

体の反応は間に合わない。

ジャンは目玉だけで彼女の姿を探す。

右、左、上、下——低く、低く屈んだアニが至近距離に現れると、気付けばジャンの体は宙に浮いていた。

投げ飛ばされる。

体は倉庫の奥の壁に叩きつけられ、肋骨が軋んだ。

くっ——まずい。

早く体勢を立て直さねえと！

ジャンは急いで立ち上がろうとする。

が、それを待ってくれるほど優しい相手ではない。

瞬きをすれば、眼前に鋭い眼光。

アニはジャンの頭を驚掴みにすると、そのまま床に叩きつけた。

雷に打たれたような衝撃。

目の前がスパークすると、一拍遅れて激痛が脳天を貫いた。

たまらず、ジャンは呻き声を漏らす。

「アハハッ！ 丸腰相手に武器を使うなんて、アンタって意外と卑怯な男なんだね」

アニは愉快そうに笑った。

「……命タマの取り合いに卑怯も糞もあるかよ」

虚勢を張って、ジャンも笑い返した。

体は動かない。

馬乗りになされ、頭は掴まれたまま。

割れた額からだくだくと流れる血が目に入り、ジャンの視界を赤く

染める。

気を抜けば意識がぶっ飛びそうだ。

目を爛々と光らせて、アニはジャンを見下ろしていた。

まるで舌舐めずりをするように、返り血のついた唇を舐めて。



## 三十一話

「それで、話す気になった？」

不思議に明るい声で、アニは尋ねた。

遠くに転がっているランタンの灯が、かろうじて倉庫内をぼんわりと照らす。

ジャンは呻き声を必死で抑え、

「何か勘違いしてんだろ。俺は何も知らね——グアアツ！」

言おうとした言葉は痛み搔き消された。

痛い。

熱い。

指先が燃えるようだ。

痛みに悶える体は転げ回りたいののに、それすらも許されず押さえつけられる。

ジャンは苦痛の叫びをあげながら、彼女を見上げた。

死に際の虫を眺めるような、能面のような顔。

ジャンの親指の爪を、アニはまるでコイントスのように弾いて弄ぶ。

「いいから早く吐きな。じゃなきや、両手の爪を全部剥がす。それでも話さないなら指を折る。その次は足。アンタが話す気になるまで、いくらでも付き合っただけ。——夜は長いからね」

「チツ……話したら殺す気だろうが」

「そうだよ」とアニは即答した。

そして淡々と、

「けど、楽に死ぬる。この糞みたいな世界じゃマシンな死に方だと思っただけだね」

——ああ、俺もそう思うぜ。

巨人の口の中で死ぬよりは、どんな死に方もマシってものだ。

けどな、胸糞わりいんだよ。

仲間だと思ってるやつに殺されるっつーのもな。

割れそうに頭が痛む。

呼吸をするたびに肋骨が痛む。  
指先の感覚は熱く痺れていた。  
だくだくと流れる血液が地面を黒く濡らし、体中から力が抜けていく。

死ぬのは怖い。

一度は経験した死でも、決して慣れることはないだろう。

深海に沈むような感覚だった。

もがくこともできず深く深く沈んでいき、自分という存在が溶けて消えていくようだった。

思い出すだけで背筋が寒くなる。

しかし、そんな恐怖よりも数段強い。

強烈に込み上げる怒りがジャンを奮い立たせていた。

もどかしい、やるせない、不甲斐ない——様々な感情が胸の内ですれ、けれど、やはり最後に残ったのは怒りだった。

ふざけんな……ふざっけんなよ！

また殺し合うのか!?!?

過去に戻ったって何も変わんねえのかよ！

俺はただ救いたただけなのに——今までの努力は全部無駄だったっつーのかよ！

血で歪む視界の中、ジャンはアニを睨みつけていた。

「アハハッ！ いいね！ その表情……もつと見せてよ」

頬を紅潮させて、アニはグツと顔を近づけた。

鼻が触れ合いそうな至近距離で、彼女は言う。

「ジャンが悪いんだよ。愛の伝道師なんてふざけたことしたんだから。ま、それに乗せられてはしゃぐ104期の連中は、救いようのないバカばかりだけどね。愛とか恋とか——くだらない。鳥肌が立つよ」

堪えきれない様子で、アニはクスクス笑った。

「ふふ……教えてあげようか？　なんでアンタの恋愛ごっこが上手くいったのか」

そう言っつて、彼女は艶やかな唇をジャンの耳元に寄せた。

なまめかしい吐息。

柔らかな彼女の唇が冷たい耳たぶに触れて、その熱さにジャンはぞくりと背筋を震わせた。

アニが囁く。

「女の子はみんな思ってるんだよ。処女のまま死にたくないってね」

「……はあ!？」

少しの間を置いて、ジャンは叫んだ。

「いつ巨人が壁を壊しにくるか、わからないんだ。いざ死ぬ時になって処女のままだったら、損した気分になるでしょ？ だからアンタがはじめた恋人ごっこは、渡りに船だったってわけ。ただの性欲のくせに、恋してるなんて自分を誤魔化して……滑稽だと思わない?」

アニは妖麗に微笑む。

「ねえ、ジャンも同じでしょ。こうして女の子に触ったり、触られたり……指を絡めて、抱きしめて、その先もしてみたいって……思うでしょ?」

言いながら、彼女の指がジャンの頬をなでる。

ひんやりと冷たい指先。

それが悩ましげに動きながら、首筋をなぞり、鎖骨を滑り、ゆつくりと腕をつたって、爪の剥がれた親指に優しく触れた。

そして、恋人同士のように指を絡める。

涼しげな瞳が探るように、ジャンの瞳を覗き込んだ。

「そうだ。交換条件にしようか」

「……交換条件?」

「全部話してくれるなら、やらせてあげてもいいよ。ま、そのあと殺すけど。アンタも童貞のまま死にたくないでしょ」

そう言って、彼女の手がジャンのベルトを探る。

ガチャガチャと鳴る金属音。

無機質な音が静かな倉庫内に響いていた。

ジャンにとっては全てがリアルじゃなかった。

裏に台本でもあって、自分もアニもそこに書かれた台詞を読んで演じているような違和感に包まれていた。

それでも頭のどこかに冷静な自分がいた。  
ジャンはアニの肩の辺りをつかんで、身体から引きはがして、ぐいと押しやった。

座り込む彼女を、正面に見据える。

アニは抵抗しなかった。

殺意もない。

ただ空虚な瞳でジャンを見つめるだけだった。

……こいつは誰だ。

どうしてこんなことになってる。

決まってる——俺のせいだ。

俺が未来を変えて、失敗したからだ。

「何もしないの？ キスでもするのかと思ったのに。まあ、いいよ。私からしてあげる」

ジャンの頬に手を添えて、アニの顔が近づく。

焦らすように、ゆっくりと。

そして唇が触れ合う寸前、ジャンは言った。

「エレンはいいのか？」

「……他の男の名前出さないで。ムードが崩れる」

「好きなんだろう、あいつのこと」

「今は関係ないでしょ」

「あるだろう」

「なに？ 説教？ もしかしてそういうことは好きな人とやれうとか、そんな寒いこと言うつもり？」

「そうだ」

「……残念だね。アンタにヤル気がないなら、痛めつけるしかないよ」  
ジャンの耳元で、パチンと音がした。

アニが指輪の仕掛けを開いた音。

その鋭い針が首の頸動脈に押し当てられ、ぷつりと開いた穴から一粒の血が垂れる。

「お前にはできねーよ」

ジャンはまっすぐに、アニを見つめて言った。

「好きでもねえ男と寝たり、仲間を殺したり——猫かぶって愛想振りまいて、裏では悪いことしてますっつてか。そんな器用なマネ、お前にできるわけねーだろ」

そう言った瞬間、ジャンの側頭部が蹴飛ばされた。

身体は数メートル吹っ飛び、転がって、派手な音を立てて木棚に突っ込む。

アニは静かな怒りを滲ませていた。

一歩。

また一歩。

意識が混濁するジャンのもとへ、アニは歩み寄るとおもむろにジャンの胸ぐらを掴み、顔面を激しく殴りつけた。

「アンタに何がわかるの」

もう一発、殴る。

「勝手に妄想して、勝手に決めつけて」

もう一発。

「私が何をしてきたか、何を考えてきたかも知らないくせに！」

勢いよく振り下ろされた拳を、今度は受け止めた。

ジャンは彼女の小さな拳を握りしめて、怒鳴る。

「知らねーよ!!!」

口内は血の味で溢れていた。

叫んだ拍子にガハッと咳き込んで、ジャンは血の塊を吐き捨てる。

殴られすぎて唇の感覚が鈍い。

「俺の知ってるアニは、無愛想で冷淡な女だ。いつも不機嫌そうで話しかけづれえし、女子扱いされたがる場所はクソめんどくせえ。友達にやるプレゼントすら一人で決められない優柔不断のくせに、やたらと強気でムカつくんだよ」

ジャンはアニの胸ぐらを掴み返す。

「お前はもつと普通のやつだろ！ イカれたサイコパスでも演じてるつもりか!?!?」

「……バカみたい。これから殺されるのに、なに熱くなってるの？

そんなの全部演技に決まってる。知ったような口きかないでよ」

今更わめいたところで、何の意味もないことはジャンにもわかっていた。

負け犬の遠吠えだ。

結局、誰も救えなかったのだから。

未来を知っていたのに、最大のチャンスがあつたのに、全ては失敗に終わった。

何も救えずに、殺される。

情けない、見苦しい、惨めで、それでも口を閉じることはできなかった。

「てめえのことなんざ、俺がわかるわけねーだろ。……けど、別にいいだろ。お前のことたいして知らねえかもしれないけど。死なせたくねえ、辛い思いさせたくねえって——そう思うのは、そんなにおかしいことかよ」

「ハハッ！　もしかして命乞い？　笑わせてくれるね。アンタが一生懸命やったことといえば、私とエレンをくつつけようとしたぐらいでしょ。しかも、それだって私のためなんかじゃない。自分のためにやったことを、恩着せがましく言わないでよ」

冷笑するア二に、ジャンは掴みかかる。

「俺は……、俺は救いたかったんだよ！　人類を——お前らを！」

ア二は目を見張って、ジャンを凝視した。

「……お前ら？　アンタどこまで知って——」  
ビリリッ！

その時、二人の身体に電流が走った。

膨大な文字の羅列が映像となって、二人の脳になだれこむ。

幾千万の巨人の行進。

島を出て海を渡り、国を街を村を——そこにある全ての家や人を踏み潰した。

世界が平らな大地にならされていく光景。

ア二は真つ青な顔で、ジャンの腕を振り解いた。

唇をわななかせ、やっと震えた声をしぼる。

「なに、いまの……。地ならしが——どうして？」

「おい、まさか、今が見えたのか!?」

ジャンの声は、アニには届かないようだった。

彼女は頭を抱えてうずくまると、ぶつぶつと呟く。

「嘘、これが未来？ 地ならしの発動が……そんな、どうして。私は一体何をしたの——お父さんは？ なんて、なんで地ならしが……」

取り乱すアニを前にして、ジャンも同様に驚愕していた。

未来のことは伝えられないルール。

それが目の前で破られたことに。

二人の混乱をさらに引つ掻き回すタイミングで、ズガーーン！と凄まじい音が響いた。

鍵をかけられていた倉庫の扉が開かれる。

そこには、扉を蹴破った姿勢でミカサが立っていた。

「あなたは説明すべき」

彼女のよく通る声がズンと響いた。

「私には聞こえた。ジャンがアニとエレンをくっつけようとしていたと。アニが言っていたことは本当？」

冷静に聞こえる彼女の口調は、軽蔑する者に向ける声色に微かに変わっていた。

## 三十二話

薄暗い倉庫内に差し込んだ月明かりがジャンの足先を照らす。

その光から逃げるようにジャンは一步後ずさった。

ミカサ!?!?

なんつータイミングだよ!

ジャンの背後では、倒れ込むようにアニが頭を抱えていた。

さつき頭に流れた映像は、未来で起こる地ならしの映像だ。

同じものをアニも見たはず。

当然アニは地ならしの未来を回避しようとするだろう。

エレン——始祖の奪還なんて悠長な考えは捨てて、最初から壁内人類の滅亡に尽力するかもしれない。

ぞくりと、背筋が寒くなった。

未来が変わってしまう。それも最悪な方向に。

足元が崩れるような感覚に襲われ、絶望に似た正体不明の何かが自身を揺るがそうとするのをジャンは必死に耐えていた。

俺のせいじゃねえ!

真っ先に浮かんだことは、情けない言い訳だった。

だが、それこそが本心であることも痛いぐらいに自覚していた。

たしかに失敗したんだろう。

過去に戻るなんて反則技——多大なる幸運に恵まれながら、愚かにもそのアドバンテージを生かすことができなかった。

それは自身の実力不足が原因で、例えばアルミンだったらもつと上手くやれたんだろうと今更ながら思う。

しかし、こんなふうにあにに未来を知られてしまうなんて、誰が想像できただろうか。

そうだ。誰にも予測不可能なことだった。

だから俺のミスじゃねえ!

俺は悪くねえ!

責任逃れに奔走する思考に、そんなことしてる場合じゃねーだろ!と諫めようとするが、今度はそれに混じるように自己嫌悪がこみ上げ



る。

俺は何のためにここにいる？

最初は特別だと思った。

ようやく選ばれたと。

神に選ばれて、人類を救うために過去に戻ってきたんだと。

じゃあ、何だよこれ？

何でこんなことになってんだ？

選ばれたんじゃないのかよ。

人類を救って、仲間を救って——それが俺の使命だったんじゃないのか!!？

「なんで」「どうして」と呻きを漏らしながら錯乱状態に陥るアニに、これ以上俺は何をすればいいのかとすがりたいたい衝動に駆られる。

ミカサが一步、ジャンを追いつめるように倉庫内に踏み込んだ。

「ちよつと待ってよミカサ！」

ランタンを下げたアルミンが倉庫内に駆け込むと、ミカサの前に立ちほだかった。

「……アルミン、どいて。私はジャンに話がある」

「気持ちにはわかるけど、本来の目的を忘れちゃダメだ。大きな物音がしたから、僕らは心配になって様子を見に来たんだよ？　まずは何があつたのか状況を確認しないと——」

そう言って、アルミンはランタンを掲げて振り返ると、ジャンの姿を見て息をのんだ。

「どうしたのその怪我!!？」

「……なんでもねーよ」

内心で舌打ちをして、ジャンはアルミンの手首を掴み灯りを遠ざける。

なるべく怪我は見られなくなかった。

アルミンまでいるのか。

クソ……厄介なやつらが揃いやがって。

このきな臭い話を知られるのはまずい。

早く追いついて、アニと話し合うんだ。

……殺されかけたつっのに、今更話し合いが通じるか？  
わからねえ。

わかんねーけど、とにかくアニはここで対処しねえと！  
ジャンは低い声でアルミンに答える。

「怪我は見た目よりしたいしたことねーよ。俺は大丈夫だから、席を外してくれ。いま取り込み中なんだ」

「と、取り込み中って……」

アルミンは戸惑いながらもジャンの背後を注視すると、「……アニ？」とうずくまる人影に問いかけた。

ビクリ。

アルミンに名前を呼ばれた途端、アニは大きく背中を振るわせた。そして、おもむろに立ち上がると脱兎の如く倉庫から逃げ出した。

「え？」

「——ッ待てよー！」

アルミンは呆気にとられ、ジャンはアニの後を追おうとしたが、ミカサがその行手を塞いだ。

「どけ！ てめえに構ってる暇はねーんだ！」

「いいえ、どかない。まだ質問の答えを聞いていない」

穏やかなのに冷酷な声。

真つ暗で正気のない瞳。

ミカサから向けられる剥き出しの敵意に、ジャンは頭から冷水をかけられたように感じた。

質問に答えない限りここを通す気はないと、彼女の鬼気迫る迫力が物語っていた。

仕方なく、ジャンはついと目をそらして答える。

「ああ……アニが言っていたことは本当だ」

「そう。つまりあなたは私を騙した。卑劣な手段を使って、私からエレンを引き離そうとした」

卑劣な手段。

その表現に滲み出る嫌悪に、ジャンは押し黙った。  
弁解する余地などない。

エレンとの仲を取り持つと約束しておきながら、裏ではアニの味方をしていた。

ミカサにとっては裏切り行為に違いないし、正当な抗議だ。そんなことはわかっていた。

けれど、今まで溜まっていた鬱憤がふつふつと浮かんでくるのを止められない。

ミカサは黒々とした瞳で、

「あなたにどんな事情や理由があろうと、関係ない。エレンは私の家族。私の全て。それを奪おうとする奴を、私は許さない」

「エレン、エレンって……うるせーな」

ジャンがぼそりと呟く。

どんな状況でも、彼女は口を開けばエレンのことばかりだった。

そんなことは百も承知で今更嫉妬することでもないのに、ふとミカサを守って死んだ時のことが思い出された。

撃たれたジャンに駆け寄りながら、エレンの名を呼んでいたミカサを。

別に感謝されたかったわけじゃない。

片思いだ。自分の意思で好きな女を守って死んだだけだ。

どこにも後悔なんてないはずだ。

けれど、エレンの名を呼ばれたことは苦しかった。

それは単純な嫉妬だけではなく、ずっと大事に思っていた気持ちに気付きもしないミカサが憎くもあつたせいだ。

告白する勇気もなかつたくせに。

気付いてほしかったとか、最期ぐらい俺だけを見てほしかったとか、女々しくて身勝手に——そんな自分にうんざりする。

「無駄なんだよ」

気付けば、声に出ていた。

吐き捨てるように言っていた。

「俺が協力しようがしまいが、何も変わんねーよ。エレンが一度でもお前を女扱いはしたことがあつたか？」

バキリ、と。

頬に痛みが走り、ジャンは数歩よろめいて踏みとどまった。  
アニに比べれば、いぶん軽い拳だ。

「僕の親友を侮辱するな」

まっすぐにジャンを見つめながら、アルミンは静かに言った。

その視線が殴られるよりも痛い。

痛くて、耐え難くて、ジャンは唇を噛んだ。

夜の空気が思い出したようにきんと冷え、吸い込む度に少しずつ肺を凍てつかせる。

「……私はジャンを信用していた。言葉は乱暴だけど、正直で嘘はつかない人だ」と

ミカサはくるりと背を向けて、

「明日、立体機動の試験がある。ジャンは私に勝つことに固執していた。だから、そこで決着をつけよう。私が勝ったら、アニに協力するのはやめて。あなたが勝てば……一つだけジャンの願いを聞こう」

おもしろい決闘だと思った。

なんでテメエに勝ちたかったのかまで想像しないところが、エレンバカらしい。

よくできた話じゃねえか。

勝って告白するために頑張ってきたのに、現実はこれかよ。

何一つうまくいかなくて、うまくいかなすぎて、一つも面白くないのに勝手に唇が歪んでいた。

お得意の気を回したつもりか。

ミカサが立ち去るのを見届けて、アルミンは眉を曇らせた。

「ジャンの気持ちもわかるけど、やりすぎだよ。……ひどい怪我だね。

一緒に医務室に——」

伸ばされた手を振り払って、ジャンは重苦しい倉庫から逃げ出した。

今更アニを追うこともできず、どこに逃げればいいのかもわからず、がむしやらに走っていた。

びゅんびゅん風を切って走り続けると、夜気を吸った肺は凍え、刺すような寒さに皮膚の感覚が鈍る。

まるで身体が夜気に溶けていくような。

——そうだ。

もつともつと溶けてくれ。

こんな俺ならいない方がよかった。

こんなことなら未来なんて知らないままの方がよかった。

全部、全部——消えちまえ。

\*\*\*

またジャンが何かしたんだろう。

男子寮に駆け込んできたアルミンが顔を合わせた途端ほつと息を吐いたのを見て、マルコはすぐにそう思った。

出会った時から、ジャンは利己的な男だった。

なまじ優秀だから高い鼻を折ることもなく、とにかく癩に障るやつだった。

それでも今まで仲良くやっていたのは、ジャンの強さに惹かれたんだと思う。

人間としては決して強くないはずなのに、どこか芯の強さがあるアンバランス。

そういうところに、マルコは無意識に憧れていた。

だから、医務室でベッドに腰掛けるジャンと目があつた時、マルコはぎよつとした。

「……ひどい怪我だね」

「よお。こんなところで何してんだ。もう就寝時間すぎてるだろ。良い子のマルコちゃんは、教官様に見つかつたらビビって漏らしちゃうぞ」

「アルミンに言われて来てやつたんだよ。まったく、今度は何やらかしたんだ」

いつも通りの軽口を叩きつつ、緩んでいるジャンの包帯にマルコは

手をかけた。

一度ほどいて綺麗に巻き直してやる。

たしかにひどい怪我だ。

アルミンが青ざめていたのも頷ける。

しかし、そんな怪我よりも深刻な変化にマルコは動揺していた。

「別に何もしてねーよ。ただのケンカだ」

「ここまで殴られるケンカって何だよ。どうせジャンが余計なことしたんだろ」

「余計なこと……ああ〜そうだな。たぶん、そうだ」

少し考えてから、ジャンはヘラヘラ笑った。

歯切れの悪い言い方に、マルコは眉をひそめる。

「そういえば、いつもの反省会すつぽかしたろ。クリスタが心配してたから、後で謝った方がいいよ」

「反省会？ ……ああ、あれか。そうだな。立体機動のやつだっけ」

やっぱりおかし。

どうも会話が噛み合わない気がした。

マルコは手を止めて、ジャンを見据える。

彼の瞳にはいつもの力強さが無い。

ゆらゆらとぼやけた意思のない瞳だった。

「なんかぼーつとしてるけど、本当に大丈夫か？ 殴られすぎて記憶

が飛んだんじゃ……」

「記憶は問題ねーよ。……たぶん」

「だから、さつきからその気持ち悪い言い方はやめろよ。何だよ、たぶんって。気になるだろ」

マルコが問い詰める。

すると、ジャンは頬をかいて言った。

「自分がやったことは覚えてるんだよ。怪我をした経緯も、クリスタと反省会してたことも。——ただ、何でそれをやろうと思ったのか。何で必死になったのか。……いまいちピンとこねーんだよなあ」

窓に反射する月明かりを眺めながら、ジャンはぼんやりと呟いた。

### 三十三話

「私とライナーが付き合うことになったら、どう思う？」

返ってくる答えなんてわかりきっていたのに、その瞬間、クリスタはそう聞かずにはいられなかった。彼の返事を聞いて、自分が思ううかが知れたかったからだ。

はじめて触れられた。

内から輝くような金髪の一本一本が、毛先までくすぐったい。

女の子扱いというよりは、幼い子供をあやすような手つきで頭をなでられた。

それだけなのに、なんで逃げ出したいような、頭の前からじんわりと温まるような気持ちになるんだろう。

「私は人を愛せない人間だ」とクリスタが気付いたのは、訓練兵団に入ってから間もなくのこと。

恵まれた容姿を持ち、分け隔てなく優しく振る舞う彼女を、男子訓練兵たちはもちろん放っておかなかった。

何人もの男の子から告白された。

真っ赤な顔をして、一生懸命に「好きです」と言われた。

誰にも愛されず生きてきたクリスタにとって、その好意は何よりも嬉しいはずだった。

なのに、ダメなのだ。

どんなに情熱的にアプローチされても、ちつとも彼女の心が動くことはなかった。

もしも愛されて育った普通の女の子だったら、少しは意識してドキドキしたり、ふわふわしたり——そんな風に恋をしたんだろう。

告白してきた彼らの中から選ばなくなっていた。

片思いでもいい。

好きな人ができたら、いつかは恋人になりたい。

愛し愛され、いつかは家族になりたい。

そうすれば幼い頃の自分まで丸ごと救われるような、そんな幸せが

訪れる気がしていた。

だから、その欠陥に一番ショックを受けたのは他でもない彼女自身だ。

苦しかった。

悩み尽くして、ようやく結論に至った。

クリスタはこう考えることにした。

愛は有限なんだ、と。

人の中には愛をためるタンクのようなものがあって、その中には今まで注がれた愛がたまっている。

家族や友達——多くの人からもらった愛を蓄えておいて、それを源に人は恋をするのだ。

そこで疑問に思う。

どうして私には愛がないんだろう？

みんなに優しくして良い子のクリスタは、104期にうまく馴染めているはずだ。

仲間とは良好な関係で、友達と呼べる子もたくさんいるし、自惚れていいなら告白だって少なくない数されている。

みんなからもらった愛が、何で自分の中には存在しないのか。

そっか、私は壊れてるんだ。

唐突にクリスタは悟った。

悲観的になるでもなく、妙に納得した。

たぶん私の中にある入れ物は、底がすこんと抜けている。

普通なら無償の愛を一心に注がれる幼少期を、クリスタは誰からも愛されずに育ってしまった。

だから入れ物がうまく作られなかったのだ。

そう考えると、腑に落ちた。

じゃあ仕方ないと思えるようになった。

だって、自分は愛されてこなかったから。

人にあげられる愛を持っていないから。

だから私は恋ができないんだろうと、誰かを好きになることなんて一生ないと思ってた。



——クリスタの質問に、ジャンは嬉々として答えた。

「すげーお似合いだと思っぜ」

予想通りの返答。

当然だ。クリスタにライナーをすすめたのは彼なんだから。

そうやって頭では理解していた。

けれど、心はちがう。

長く続く暗い廊下に遠ざかっていく後ろ姿。

それがみるみるうちにぼやけ、喉から漏れる嗚咽が彼まで届かない

ように、クリスタは必死で口元を押さえていた。

ユミルの声が耳の奥で鮮明に響く。

『なあ、クリスタ。お前の生き方に口を出す気はねーけどな。お前が思うよりも、世界つてのはいいい加減だ。いい子も悪い子も、人間性なんて関係ねえ。自分勝手に誰かを好きになつたりするんだよ』

そっか。ユミルはとっくに見抜いてたんだ。

どうして私は今まで普通でいられたんだろう。

あなたを見つけても、目が合つても、話せても、二人きりになつても——恋だと気付かずにいれたんだろう。

締め付けられるような胸の苦しさに、あとからあとから涙がでた。

その雫の一滴一滴をすくいあげながら、クリスタは思う。

愛は有限じゃなかった。

からっぽな自分の中から、これだけの激しい感情が湧いてくることに驚きもしたし、嬉しくもあった。

次々と湧き上がるこの気持ちは、間違はなくヒストリア私のものだ。

からっぽで、何もない自分の中から好きが生まれた。

好きという感情から、切なさが生まれた。

切なさから苦しさが。

苦しきから愛しさが。

その愛しさにまた好きがつのる。

終わりのない連鎖のように、ぐるぐると渦巻いてどんどん大きくなっていく。

それが嬉しかった。

苦しいのに、嬉しかった。

枯れることなく流れる涙をぬぐうことを放棄して、彼の姿が消えた廊下の奥をヒストリアはまっすぐに眺めていた。

私は大丈夫だった。

からっぽでも大丈夫だった。

普通の女の子じゃなくなつて、いい子じゃなくなつていいんだ。だって、いい子のままじゃ好きな人も守れない。

開拓地送りになりそうだった彼のために、何もできなかった。

ぐじぐじと悩みどうかしようとかバカみたいに駆け回つて、それだけで終わった。

頑張っているあなたを応援することしかできない——そんな自分にはもううんざりだ。

恋をしているのは悪い子の、本当の私だから。

強くならなきゃ。

強くなつて、あなたからもらつたたくさんのものを返したい。

本当の私で、あなたの助けになりたい。

\*\*\*

昨日までとは比べものにならないぐらいの冷気が頬を刺す感覚に、クリスタは目覚めた。

鼻の先端が氷のように冷たい。

まだ静かな寝息が聞こえる暗い部屋で、布団の温い誘惑に耐えながら、ほうつと白い息を吐いた。

窓の外では、空の彼方から明るみがにじむように広がっている。

朝が来た。

空を飛ぶには絶好の日和だ。

「これより立体機動最終試験を始める！」

乾燥した肌に深い皺を刻ませたキースが大声を張り上げた。

両手を背後に組み、胸を張って整列する訓練兵。

緊張した面持ちの一同を見回して、キースは口を開く。

「試験は二人一組で行う。森の中には12体の巨人型模型を用意してある。各々6体を討伐し、指定した場所に到着するまでの時間を計測する」

話の途中で一人の訓練兵が目にとまり、キースは片眉をピクリと持ち上げた。

全員が後ろ手に整列する中、その訓練兵はおもむろに右手の拳で心臓をトンつと叩く。

「アツカーマン……貴様、上官の話の遮るとはな。どんな用件があるのか言ってみろ」

敬礼を崩さず、ミカサは短く返事をしてから「私はジャン・キルシュタイン訓練兵との組み分けを希望します」と言つてのけた。

教官に対する無礼な提言に、身動きもせず直立する訓練兵たちは気配だけでざわめく。

キースはミカサの目の前で立ち止まると、彼女を見下ろした。

「組み分けは実力が拮抗するよう決めてある。よって、貴様とキルシュタインは最初から組ませるつもりだ」

「……ありがとうございます」

ミカサが謝意を述べると、キースは視線を渦中のジャンに移し興味深そうに目を細めた。

試験内容の説明後、ピリついた雰囲気の中、自身の名前を呼ばれるまで訓練兵は個人練習に勤しむ。

念入りに柔軟をして精神統一をはかる者や立体機動装置を神経質に整備する者、がむしやらに飛び回って緊張を吹き飛ばそうと躍起になる者など過ごし方は様々だ。

しばらくすると、試験が終わり晴れやかな顔で談笑する者たちが現れ、早々に名前を読み上げられたクリスタもまずまずの試験結果に胸を撫で下ろしていた。

彼女の青い瞳が無意識にジャンを探す。

すると、何やら難しい顔をしたマルコの姿が目に入った。

「どうかしたの？」

「ああ、クリスタか」

マルコは人好きのする笑みを浮かべ、

「心配ないよ。試験前で少し緊張してるだけだから」

「嘘。何かあったんだよね？」

胸騒ぎがした。

いつものクリスタなら、やんわり拒絶されたことを察して引き下がっていただろう。

しかし、今だけは譲ってはいけない気がする。

彼女の真剣さに、マルコは少し驚いた様子だったがやがて声を潜めて言った。

「ジャンがないんだ」

「え？」

「探してみたけど、どこにも姿が見えない。昨日から様子がおかしくて、もしかしたら……」

「私が探してくる」

自分でも驚くほど、クリスタは冷静だった。

マルコは目を見開いて、

「でも、どこに行ったかもわからないんだ。試験中に抜け出したことがバレたら、君も罰則を受けることになる」

「この試験を受けないとジャンは今度こそ開拓地送りになるよ。マルコはまだ試験終わってないよね？ 大丈夫。私が必ず連れ戻すから」

「でも」

「お願い。私に行かせて」

クリスタはマルコの言葉を遮った。

お願い——そう言ったけれど、微塵も引き下がるつもりはない。

「……わかった。さっき背後から教官のメモを盗み見たんだ。ジャンの順番は最後だった。時間はまだある」

「ありがとう」

「頼むよ。あいつバカだからさ」

大袈裟に肩をすくめて見せたマルコに頷いて、クリスタはすぐに駆

け出した。

## 三十四話

今期の立体機動のレベルは相当高いらしいから、今回の試験はハイレベルな点数争いになるだろうなど、ジャンは他人事のように思っていた。

生物の気配が薄くなる初冬の森は穏やかで、こうして樹々の奥の方に入り込むとゆつたりとした時間が流れている。

空気に含まれる日のぬくもり。

太陽光をいっぱい吸い込んだ枯葉の絨毯に、ジャンは四肢を投げ出してまどろんでいた。

だらりと放られた手足は地面に根付いたかのように重く、植物にでもなった気分で酸素を吸い込む。

吸って、吐く。

吐き出された白い息を見て、光合成ってこんな感じかとぼんやり思ったが、すぐに考え直した。

二酸化炭素を排出するだけの存在よりも、酸素を生み出す植物の方がよほど人類の役に立っているに違いない。

この試験に行かなければ、ジャンは兵士として終わる。

三年間の過酷な訓練は無に帰して、朝から晩まで、下手をすると死ぬまで開拓地で鋤を振る貧乏暮らしが待っている。

なのに、それでいいとジャンは思っていた。

もう何もしたくない。それが本音だ。

死ぬほど訓練してやっと手が届きそうな憲兵団行きの切符を、みすみす捨てようとしている。

そんな自分を冷静に受け入れる一方で、「なぜ不合理な選択をするのか」と信じられない気持ちもあった。

「意味わかんねえよなー」

と、ジャンは青空を見上げながら呟く。

必死になって目指していた憲兵団。

そこに入れば内地での安全で快適な暮らしが約束される。

よほどのバカを除いて、ほとんどの訓練兵が憲兵団に入りたいと願っていたし、ジャンもその大勢のうちの一人だった。

しかし、ある朝目覚めるとジャンの全ては変わっていた。

死に急ぎ集団とバカにしていた調査兵団に身を捧げる覚悟が出来ていた。

己の成績をなげうって、104期の立体機動の技術をあげようと寝る間も惜しんで机に向かった。

巨人と対峙した時、一人でも多く生き残れるようにと。

かと思えば、人の恋路に首を突っ込んで「俺は愛の伝道師だ」うんぬんと、ふざけたことをぬかす。

今まで何をしてきたかは覚えていても、その理由についてジャンはさっぱり思い出せなかった。

忘れているのだ。

未来からタイムリープしてきたことを。

卒団式の翌日超大型巨人に再び壁が破壊されることも、親友を亡くし調査兵団に入ったことも、壁の向こうに広がる海やその先にある敵の存在、九つの巨人の力。

エレン・イエーガーの地ならしによる殺戮——そして自分が一度死んだということすら。

そのすべての記憶を失っていた。

兵士をやめること、親には何て説明しようか。

憲兵団に入ったら仕送りぐらいしてやるって、息巻いて家を出たのに。

青い空に飛ぶ一羽の鳥に向かって、ジャンは手を伸ばし掴むように握った。

だが、当然鳥は何事もなかったように拳の外に飛んでいく。

自由なんて羨ましくもない。

「俺はもう飛べねえよ」

そう呟いて、ジャンは瞳を閉じた。

井の中の蛙大海を知らず、されど空の青さを知る。

それで十分。

兵士なんてやめて実家に戻ろう。

親父には追い出されるかもしれないが、それでも俺ならなんとかやっていけるはずだ。

人の生き死には関係のないところで暮らして、いい歳になったら結婚して孫でも見せてやりや、それも親孝行だ。

そうして考えに耽りつつ、ジャンは目を開けた。

しかし、そこには青空ではなく、逆さまになったクリスタの顔が眼前にあった。

「……ああああ!!?」

ジャンは叫び声をあげながら、勢いよく体を起こす。

その拍子にごつんと音を立てて額同士がぶつかり、今度はクリスタが「んうう!」と小さな悲鳴をあげて尻餅をついた。

「おまツ、お前なあ! ビックリするだろうが! 心臓止める気か!!?」

痛む額を押さえて、ジャンが怒鳴った。

「だって、考え事してるみたいだったから……」

相当痛かったのか、涙目のクリスタがむくれて言い返す。

「だからって黙って近寄るやつがいるかよ!!? だいたいお前は――」

「さつき何してたの?」

ジャンの話を遮って、クリスタは尋ねた。

「空に手を伸ばして言ってたよね。『俺はもう飛べねえよ』って。どういう意味?」

クリスタが首を傾げると、ジャンは「それは……まあ、別に」と語尾を濁らせる。

「別について……変だよ。だって誰もいないのに、何でそんなことを言ったの? もう飛べないってことは、以前までは飛べたって意味でしょ? 偶然だとは思うけど、ジャンが手を向けてた上空には鳥がいたよね。……まさか鳥に話しかけてたの?」

「なんとなくわかるだろう!!? そこは空気読んでスルーしろよ!」  
しつこく言及するクリスタに、ジャンは頭を抱えて叫ぶ。



「ええー、そんなに怒らなくなっちゃっていいのに。心配しただけだよ。でも、大きな声出せるなら元氣いっぱいってことだよね」

クリスタはそう言って、パタパタと服に付いた土埃を払って立ち上がった。

「じゃあ戻ろつか。今から行けば試験に間に合うよ」

につこりと笑って、クリスタは手を差し伸べた。

立体機動のグリップ跡がついた手。

それを一瞥してから、ジャンはごろりと再び寝転ぶ。

そして少しずつ形を変える雲を眺めながら、のんびりと話した。

「行かねえー」

間延びした声。

これから昼寝でもはじめそうなぼんやりした返答に、クリスタは「どうして?」と尋ねる。

「さあな。そんなの俺にもわかんねーよ。まあ、強いて言うなら疲れた」

ジャンはそう口にする、妙にしつくりきた。

何の気なしにぼつりと出た言葉が案外核心をつくのかもしれない。

頬をなでるやわらかな風。

冬の匂いに、胸が安らいだ。

「調査兵団に入るんじやなかったの?」

と、さらにクリスタが尋ねた。

「気が変わった。っーか、完全にどうかしてたな」

ジャンは鼻で笑って、

「少し考えればわかる。あんなデケエ奴らに勝てるわけねえってことぐらいな。調査兵団に入りたいやつなんて、自分を特別だと思ってるガキか、イカレ野郎のどちらかだ。どこぞの死に急ぎ野郎は両方だろうがな」

そして俺は前者だった。

ただそれだけの話だ。

しばらく経つてもクリスタは何も言わなかった。

かといって立ち去るでもなく傍らに佇む彼女の気配に、だんだんと

申し訳ない気持ちがあつた。

クリスタには世話になった。

ライナーと食事に行つてほしいなんて意味不明な頼み事を聞いてもらったし、自身の計画が上手くいかないと彼女に辛く当たったり弱音を吐いたりもした。

散々振り回しておいて何も説明しないんじや、いくらなんでも自分勝手すぎる。

でも、困つた。

何であんなバカなことに必死になつていたのか、どうしても思い出せない。

理由を覚えてないんじや説明のしようがない。

「あー悪かつたな。今まで勝手に頼つたのに、放り出すみたいになつちまつて」

とりあえず謝つておこうかと思ひ、ジャンは言つた。

「クリスタはいいやつだから、よく絡んでた俺をほっとけないんだろ。けど、もういいんだ。俺が自分で決めたことだしな。お前からしたら仲間を見捨てるようで気が悪いかもしれねえが——本人の意思を尊重するつてやつだ」

いざ謝罪の言葉を口にすると、それなりにセンチメンタルな気分になつた。

クリスタに対して謝つていゝというよりは、もっと大勢の誰かに言ひ訳しているような、妙な感覚に陥る。

「そもそも兵士の本質は使い捨てだ。人類を守るために、個人は消費される道具にすぎねえ。俺の代わりなんて誰でもいいんだよ。道具が一つなくなつたところで困るもんじやねーだろ？ 兵士の敬礼も宗教じみてて気に入らねえ。何が人類に心臓を捧げろだ。顔も知らねーやつらのために、何で俺が体張らなきゃなんねーんだよ」

胸に落ちてきた枯れ葉。

それを摘んで、ジャンはフツと一息で吹き飛ばした。

「俺も含めて兵士志願者の多くは、周囲に流されて職を選択した。生産者は腰抜けという風潮に乗つかつて、兵団所属後の高待遇に目が眩

んだにすぎねえ。とりあえず憲兵団を直指し、それが無理なら駐屯兵団。人類に心臓を捧げる覚悟なんて、俺らのどこにある？ そうして死ぬ時に気付くんだ。兵士なんてやめときゃよかつたってな。……ま、俺が兵士をやめる理由としてはこんなもんか。要するにくだらねーってことだ」

ジャンは淡々と話し終わると、ますます嫌になった。

長々と高説を垂れたわりに、並べ立てた話はつまらない愚痴や己の浅はかさを吐露しただけだ。

隣で黙って聞いていたクリスタは、彼の話が終わったことを確認するとおもむろにジャンの耳を引っ張った。

「いててててて！ 何すんだよ！」

ジャンの抗議を無視して、クリスタは彼の耳を掴んだままずっと歩いていく。

「早く戻らないと。試験に間に合わなくなっちゃうでしょ？」

彼女は世間話でもするように、いつもの天使ボイスでジャンを氣遣った。

しかし、その優しい声とは裏腹に容赦なく彼の体を引きずっていく。

「だから行かねえって言ってんだろ！ 俺の話聞いてたか!!？」

「うんうん、聞いてた。半分くらいは聞いてたよ」

「半分かよ！ 俺結構語ってたよな!!？」 全部聞いとけよ恥ずかしいわ！」

「大丈夫だよ。試験が終わったらまた聞かせて。ね？」

クリスタは駄々っ子をあやすように言って、慈愛に満ちた表情で振り返った。

枯れ葉を踏み散らす二人分の足音。

ジャンは体をねじって、ようやく彼女の手を振り払う。

「いい加減にしろよ。これ以上はお節介がすぎるぞ」

低い声が攻撃的に唸る。

生来の悪人面で睨みつけるジャンに、しかし、クリスタは怯まなかった。

透けるような青い瞳で、彼女は問いかける。

「ミカサに勝てないから……だから行きたくないの？」

人を傷つけることが嫌いな彼女が、予想外に踏み込んできたことにジャンは一瞬たじろいだ。

凶星を指されたことに硬直した。

一呼吸飲み込んだ沈黙。

その沈黙が誤魔化しようがないほど彼女の言葉を肯定していた。

「うるせえ」

ふつつつとした苛立ちが沈黙を埋めるように悪態をつく。

「だったら何だよ。お前には関係ねえだろ」

脈がないことはわかっていたが、嫌われてはいなかったと思う。

それが昨夜の一件で状況が変わった。

何でア二と揉めていたのか、その記憶は曖昧だが、ミカサから向けられた敵意はよく覚えていた。

嫌悪に満ちた眼差し。

それだけでも胸にきてるのに、立体機動で彼女に負けるということは今までの努力を真っ向から否定されるようで——恋愛感情とはまた別に、僅かだけ残るプライドさえも潰される気がした。

「関係あるよ」

なおも食い下がって、クリスタは言った。

いつもは気弱そうに揺れるサファイアの瞳が、今はまっすぐに彼を見つめる。

「ジャンのことが好きだから、私はあなたをほっとけない」

凜として響く、澄んだ声は穏やかな森に馴染んだ。

## 三十五話

「……は？　なんだよ……それ」

頭に昇った血液がざあつと一気に下がる感じがして、ジャンは言葉を失った。

急速に速くなる鼓動。

硬直したジャンをクリスタはまじまじと見つめて、

「ぷっ——アハハ！　変な顔！　さっきまで怒ってたのに、そんなにびっくりした？」

と嘔き出した。

「お、お前なあ……マジでビビっただろおが！　くだらねえ冗談言つてんじゃねーよ」

可愛らしい声でクスクス笑う彼女を前に、ジャンは吃りながら言った。

反応したくないのに、勝手に顔が熱くなる。

クリスタはひとしきり笑い終わると、

「私ね、本当はジャンのこと苦手だったの」

と大人びて言った。

「自分さえ良ければいいとか、人が嫌がることを平気で言うとか、乱暴な言葉遣いとか……俺は正直者だからくっつけて開き直るのもどうかと思うし。あと顔が怖いし」

顔は生まれつきだ。

指折り数えて悪癖をあげつらうクリスタに、ジャンは内心で突っ込む。

「でもね、ちょっと憧れてた。他人からどう思われようと関係ないって顔して、自分に自信があつて……私にはないものばかりジャンは持ってるから」

「ガキが粋がってたただけだろ」

「ふふ、そうだね。子供っぽいところもあるね」

否定せずに、クリスタは微笑む。

「でも、一生懸命だった。現実主義で、いつだって何をすべきか考えてた。必要ならわざと嫌われ役になって、言いにくいこともハツキリ言って。『偉そうに指図するな』って陰口叩かれても、ジャンは次の訓練のことばかり考えてる。——うまく言えないけど、そういうところろに惹かれたんだと思う」

ジャンに向けて、クリスタは柔らかかに言った。

向けられた視線があまりにも優しく、疑いようがない。

今度こそ誤魔化せない。

そうわかっていたのに、ジャンは咄嗟に下を向いていた。

「ハハッ——やめろよ。途中から誰の話してんのかと思っただぜ。買い被りすぎだ」

「初恋なの」

クリスタが力をこめて言った。

その声に、ジャンは思わず目をあげて彼女を見てしまった。

ゆったりと優しく、ゆるんだ顔をしている。

「こんな私でも、好きな人ができたら絶対頑張ろうって決めてた。振り向いてもらえるように努力しようって。頑張ってもダメかもしれないけど、簡単には諦められないよ。……ジャンにもそういう人はいらる？ 自分の全部を賭けて、頑張りたいって思える人」

「ッ——」

今更な質問だ。

その答えをクリスタが知らないはずはない。

しかし、彼女が皮肉や嫌がらせで言ったのではないことぐらいジャンにもよくわかっていた。

答える必要なんてない。

適当に受け流してこの場を去ることもできたのに、彼女の言葉に宿る真剣さに、ジャンは逃げる事ができなかつた。

「……いた」

ジャンは答えた。わざと過去形で言った。

「ちゃんと頑張った？」

クリスタが優しく尋ねる。

「どうせ振られるのに、頑張るもクソもねえだろ」

「そうかな」

「バカか。見てたろ。嫌われてんだよ、俺は」

「ミカサに会いたくないの?」

「……顔も見たくねえ」

「どうして?」と彼女が言い終わる前に、ジャンが遮った。

「かつこ悪りいからに決まってるだろ!!!」

ああやばいと思った時には大声で怒鳴っていた。

クリスタはびくりと肩を震わせ、目を見開いてジャンを凝視している。

クソ。最悪だ。

こいつ、心配して言ってくれてなのに。

今日だけじゃねえ。

ずっと俺のこと気にかけてくれてたのに。

頭の中がパンと弾けたように感じた。

鼓膜がビリビリ振動しているのがわかる。

もうやめろ! って頭では考えているのに、体はそれを無視して深く息を吸うと再び怒声を上げた。

「行つてどうなる?!?」俺がミカサに勝てるわけねえだろ! あんな大勢の前で、好きな女にボロ負けしたいなんて誰が思う?!? 嫌われて、さらに醜態晒して——これ以上恥かきたいって誰が思うんだよ!

ああ?!?」

洪水のような耳鳴りがやまない。

「俺はもともとクソみてえな人間だ! 何やつても中途半端だ! 器用貧乏で、期待されるわりに何も成し遂げられねえ! いつだって才能があるやつ踏み台だ! 本物には勝てねえってことぐらい、俺が一番わかってんだよ! この絶望がテメーには理解できねえだろ?!?」  
現に今だって、仲間に怒鳴り散らしてる自分が——自分が嫌になる」

威勢よく荒立っていた口調が、我にかえったように語気を弱めた。

呆然と、ジャンは荒い息を整える。

クリスタの顔は怖くて見れなかった。

内臓を潰すドス黒い感情が、これ以上みつともなく漏れ出ないように唇を強く結ぶ。

彼女の足先すら視界に入らないように俯いて、ジャンは黙ったまま背を向けた。

こうして誰かの目に晒されていること自体が唐突に耐えがたく、恥ずかしかった。

「ジャンがかっこ悪いのなんて、いつものことだよ」

クリスタのよく響く高い声。

それが背中に到達すると、まるで「止まれ」と命じられたかのようにジャンの足は動かなくなった。

「情けなくて、かっこ悪くて——それでも頑張るジャンが一番かっこいい」

美しいソプラノがどんどん近づいてくる。

「それを今から証明するよ」

とすと背中中に軽い衝撃。

疑問に思う暇もなかった。

背後からまわされた両手がジャンのヘソのあたりで合流すると、ぎゅっと抱きしめられる。

「兵士なんてやめて二人で暮らそっか」

「……………離せよ」

ようやく絞り出した拒絶の声はあまりにも弱々しかった。

「私のことが嫌になったらすぐに追い出していいから。付き合っただけで言わない。お願いだから、あなたのそばにいさせて」

甘やかな囁きが脳を溶かす。

繋ぎ止めるように締め付けてくる細い腕。

その力強さがあなたは必要な存在だと、深く深くジャンに教えこんでいるようだった。

クリスタ以外の誰が、こんなにも自分を必要だと言ってくれるだろう。

何の役にも立たず、逃げ出そうとするクスなんかには価値を見出して



くれるだろう。

そう思うと、涙腺が緩んだ。

愛されていることを実感した。

誰にも選ばれなかった俺を、クリスタは選んでくれた。

それがバカみたいに嬉しい。

嬉しくて、嬉しくて——こんなにも幸せな気持ちくれた彼女に応えたいと思った。

「……クリスタ」

「はい」

優しい声を受け入れてくれる。

その安心感に身を任せて、腰に回された彼女の手にジャンはそっと手を重ねた。

「お前と一緒に暮らせたらいいだろうな。美人な嫁がいるって、周りの男共に羨ましがられて、優越感に浸れること間違いなしだ」

「それはありがとうって言うところかな？ あんまり褒められてる気がしないけど」

不満そうな声に、ジャンは笑いを噛み殺す。

「それだけじゃねえよ。クリスタは努力家だろ。掃除も洗濯も完璧で、料理とかすげえ美味しいの作ってくれそうだし」

「家事はジャンにもやってもらわないと困るよ？ 脱ぎっぱなしの靴下とか、私は絶対拾ってあげないからね。でも、料理は任せて。最近気付いたんだけど、私ってすごく一途みたい。毎日好きな人に手料理を作るなんて、すごく嬉しい」

クリスタは幸せそうに言った。

「ああ……でも、ケンカは多いだろうな。お前って意外と頑固だし、めんどくせえところあるから」

「それはお互い様でしょ。ジャンの自己中よりはマシだと思うけど」  
「ハハッ！ 結構ひでえこと言うな」

クリスタらしくない鋭い物言いに、ジャンは声をあげて笑った。

いつもの彼女なら絶対に言わないであろう毒が、不思議と心地いい。

「お前と一緒にいたら毎日楽しいだろうな。……きつとすぐに好きになる」

夢を見るように、ジャンが呟く。

「たぶん俺は幸せになれる」

「私の方が幸せになっちゃおうと思うよ」

クリスタは迷いなくそう言ってくれた。

冷たく冷えた小さな手。

その手が微かに震えているのが伝わって、ジャンは彼女の手をぎゅつと握った。

「比べるまでもねえ。巨人と殺し合う人生より幸せだって……わかってんのになあ」

そう言って、ジャンは握りしめた小さな手を優しく自身の体からのがした。

「お前を選べない俺はバカだ」

クリスタは返事をしなかった。

黙って、その続きを待っている様子だった。

散っていく葉が地面に落ちていくのを眺めながら、ジャンは言葉を探した。

何を言っても傷つけるだろう。

けれど、話さないわけにはいかない。

下手な嘘は性に合わないし、何よりクリスタがそれを望んでいないからだ。

「クリスタは、俺にとって特別だ。特別で大切な仲間だ」

俺の気持ちを知っていて、傷つくことがわかっているのに、何でクリスタはここまでしてくれたのか。

決まってる。

俺だ。俺のためだ。

俺の背中を押すために、こんなに震えて好きだと伝えてくれてる。

「好きなやつがいる。初恋だ。一目惚れだった。どんなに目を逸らしても——俺の真ん中にはあいつがいる」

自分の弱さに向き合いたくなんてなかった。  
知らないフリをしたかった。

俺はもともと弱い人間で、そう諦めようと思っていたのに——クリスタは違った。

俺でさえ諦めた俺自身を、クリスタが信じてくれている。

どんなに弱っても結局立ち上がるって、諦めないって——バカみたいに信じて、わざわざ傷つきにくるようなお人好しだ。

それはかつてなく深く胸に刺さる感じがした。

「今ここでクリスタの好意に甘えたら——俺は自分を許せねえ」

ジャンは力強く言った。

「やっぱり、ジャンはかっこいいよ」

クリスタは満足そうに言うと、ジャンの背中から離れた。

二人を隔てる一步分の距離。

確かにそこにあつた熱を、風がさらっていく。

ジャンは一瞬振り向こうとして、途中でやめた。

それでも何を言うべきか迷いながら口を開いた瞬間、「まって」とクリスタが遮った。

「謝らないで。約束、したでしょ？」

——約束。

ああ、そうだ。

立体機動の訓練中、高所から落ちたクリスタを助けたあの日。

互いに謝るのは禁止だと、そう決めた。

それは二人が対等な関係であると確認した瞬間でもあつた。

だから彼女の声が微かに震えていたとしても、謝っちゃいけない。

他にもつとと言うべきことがあるはずだ。

ジャンはピシヤリと自分の頬を打った。

鋭い痛みが両頬をじんとさせ、「よっしゃ」と小さく気合を入れる。

「ありがとう。——行ってくる」

振り返らずに、ジャンは直進した。

もう迷いはない。

勝ち目は薄くても、勝算はある。

やるからには勝ちに行く。  
それこそがかませ犬の生きる道だ。

## 三十六話

「最終組の試験を開始する。ミカサ・アツカーマン！ ジャン・キルシュタイン！」

キースが号令をかけると、名前を呼ばれた二人の訓練兵が進み出た。

数メートルの距離を空けて佇む両者。

寒さのせいかな緊張のせいかな、ジャンの全身は粟立っていた。

すでに試験を終えた104期の面々は、固唾を飲んで二人の決闘を見守っている。

「森の中には12体の巨人型模型を用意してある。各々6体を討伐し、到着するまでの時間を計測する！」

キースが「始め！」と叫ぶと、試験の開始を告げる信煙弾が空に上がった。

ミカサとジャンはすぐさま立体機動にうつると、同時に森へ飛び込んだ。

浮遊した瞬間、ジャンは自身の体が重いことに気がついた。

まだスランプが抜けていないのだ。

ある日を境に、立体機動が体に馴染まなくなった。

空中姿勢のバランスが、ガスを吹かすタイミングが、ワイヤーを巻き取る感覚が——すべてがちぐはぐで噛み合わない。

スランプに陥る前は、曲がりなりにもミカサのスピードについていていた。

まずはあの時のスピードを取り戻さなければ、ミカサに勝つどころか勝負にもならないだろう。

スランプの原因はわかっていた。

自分の弱さに向き合いたくなくて、うまくいかない現実から逃げ出したかったからだ。

都合よく消えた記憶。

それは甘つちよろい自己防衛だ。

自分自身に向き合わねえと、俺は前に進めねえ。

思い出すんだ……この心臓を捧げた意味を！  
ギギギと音を立てて、進行方向に巨人型模型が二体立ち上がった。  
木の肌を晒したハリボテの巨人に向かって、ジャンはブレードを叩  
き込む。

深く抉れるスポンジのうなじ。

すぐさまガスを吹かし、二体目へ向かう。

体を弓形にそらして反動をつけると二体目のうなじを狙った。

そこに刃が埋まる直前、ジャンは目を疑った。

スポンジでできたうなじが一瞬ぶれたかと思うと、肉らしい質感の  
肌が現れたのだ。

それはまさに巨人のうなじそのものだった。

ッ——なんだ!?!?

その変化にぎよつとしたが、振り下ろしたブレードは止まらない。  
勢いのままに肉のうなじを削ぐ。

ズバンッ!

音を立てて、三日月型にそれが切り離された。

手に残る感触はスポンジではなく、紛れもなく肉を削いだ感覚。

刃に付着した生暖かい血が飛び散って、ジャンの頬にかかる。

熱を含む蒸気が辺りに立ちのぼる。

ぞくりと、何かがジャンの背筋を駆け上がった。

そうだ、俺は知っている。

この感覚を——巨人を殺す感触を。

直感的に脳裏に閃いた瞬間だった。

『兵士よ怒れ!!! 兵士よ叫べ!!!』

一人の男の、野太い絶叫が響いた。

その直後、『うおおおおおおお!!!』と大勢の怒号が地響きのよう  
に呼応した。

思考が追いつかないまま、ジャンは視線を地面に向けた。

そこには深緑のローブを纏った大勢の兵士が馬を走らせていた。

なんだよこれ……一体何が起こってる!?!?

ジャンはパニックになりそんな思考を必死に繋ぎ止める。

自由の翼を背負った兵士たちは幽霊のように青ざめた表情で、しかし、誰もが大きく口を開き声の限り絶叫していた。

鬼気迫る迫力に圧倒されながらも、ジャンは彼らを凝視した。すると、あることに気付いた。

透けているのだ。

彼らの体も馬も透けて、向こう側の地面が見えている。

そして驚くべきことに、半透明の兵士たちは避けることもなく、次々に大木を突き抜けていくのだ。

群れとなつた兵士たちは互いの熱に浮かされて、ぐんと一段階速度を上げた。

馬よりも立体機動の方が速いはずなのに、ジャンは少しずつ離されていく。

「ダメだ！ 行くな！」

ジャンは咄嗟に、そう叫んでいた。

嫌な予感がした。

このまま彼らを行かせてはいけなないと、頭の中で警鐘が鳴っていた。

しかし、兵士たちは振り返りもせず前進する。

「聞こえねえのか！ 止まれ！ 止まれよ！」

兵士たちの叫びに負けじと、ジャンは声を張り上げた。

しかし、唐突にそれは起こった。

先頭近くを走っていた兵士の頭が吹き飛んだのだ。

砲弾に撃ち抜かれたように頭部が弾け飛び、残された体は馬から滑り落ちた。

それを皮切りに、次々と兵士たちの体が破壊され、落馬していく。

「ああ……そんな……」

見たくないのに、目を逸らせない。

ゴミのようにボロボロになった肉体が地面にぼとぼと落ちていく様を、ジャンは上空から眺めていた。

兵士たちの数はみるみる減っていった。

地響きのように鳴り響いていた絶叫もどんどん細くなっていく。  
なのに、誰も止まろうとはしない。

前傾姿勢に、手綱をビュンビュン振って必死に馬を走らせていた。

ああ、死んじまう！

なぜ止まらねえ!?!?

やめろ！ 逃げろよバカ野郎！

こんな悲惨な死に方にどんな意味があるっつーんだ！

『理屈じゃわかっていたさ』

あの悪夢のような作戦の後、青年はそう語った。

勲章の授与を待つ間、エルヴィン団長の代わりに生き返ったアルミンに向かって、値踏みする権利ぐらいあるはずだと、そう主張した青年だ。

落ち着かせようと彼を裏に連れていった時、壁の向こうで起きた石つぶての砲撃について青年はつぶさに話してくれた。

『誰かを犠牲にさせないために自分を犠牲にできる奴が必要なんだと、そんな勇敢な兵士は誰だ？ とエルヴィン——あの悪魔に聞かれた時、思っちゃまったんだ。それは俺だってな』

青年は訴えるように言った。

『けど、見ろよ！ そうやって死んでいくことが、こんなに何の意味もないことだなんて思いもしなかったんだ！ 俺はバカだ……何で自分だけは違うって……思っちゃまったんだろう。……お前にはわかるだろ？ なあ、ジャン』

「ああ、わかるぜ……フロック」

頭にドツと流れこんできた記憶に、ジャンは返事をした。

青年の名前が自然と口を突いて出た。

誇りに死ぬことはない。こんな死に方をするぐらいなら屈した方がいいって、そう言ったお前に救われた奴も多くいただろう。

俺もその考えに納得したし、心底共感もしたはずだ。

なのに、何で俺は従わなかった？



フロックと共に、壁内人類を、エルディアを守ることに心血を注がなかつたのは……なぜだ？

ジャンが我にかえると、兵士たちの怒号はピタリと静まっていた。消えている死体。

視線を彷徨わせても馬の一匹も見当たらない。

だが、安堵したのも束の間。

彼らの代わりに現れたのは——104期の訓練兵たちだった。

いつのまにかジャンは訓練兵たちに混じって飛んでいた。

彼らの姿は、先ほどの兵士と同様半透明だ。

そしてこれから何が起こるか、ジャンにはもうわかっていた。

木の影から飛び出した巨人が、一人の訓練兵に喰いついた。

それが合図かのように、どこからともなく巨人が沸いてくると飛び回る訓練兵たちに襲いかかる。

ワイヤーを掴まれ振り回される者、大きな手に握りつぶされる者、巨人に取り合われて体を引き裂かれる者。

訓練兵たちは腸を撒き散らし、耳をつんざく凄惨な悲鳴をあげた。人間の尊厳は踏み躪られ、次々に死んでいく。

巨人に蹂躪される仲間たちを、ジャンは呆然と見送った。

唾液まみれになって捨てられた死体に、そのそばかす面に覚えがあつた。

しかし、ジャンが取り乱して「やめろ！」と叫ぶことはなかつた。無駄だとわかつたからだ。

どんなに叫んでも、たしかにあつた未来だと理解したからだ。

ああ、そうだ。

俺は人類のために命をかけられるような、できた人間じゃねえよ。自己犠牲で悦に浸れるほど、強くもねえ。

顔も知らねえ誰かを救うためになんて、デカくて突拍子もないことに全力で挑めるような、特別な人間じゃねーんだ。

心臓が燃えるように熱かつた。

知りたがっているのだ。

その心臓を何に捧げ、そして何のために燃やすのか。

「そうだ。思い出せ……思い出せよ。」

俺は誓っただろ。」

この骨の燃えカスに!!!

「そう思い至った途端、巨人に蹂躪されていた訓練兵たちがボツと音を立てて炎に包まれた。」

鼻腔にこびりつく焦げた人の臭い。」

「もうもうと立ち込める煙が目の前を白く染めた。」

ジャンは顔を両腕で庇うと、その白い靄の中を恐れずに飛んだ。」

そうして一秒か二秒、もしかすると数十分も経過した後。」

白い靄が晴れて、眼前に訓練場の森が姿を現すと、ジャンの前方には黒い戦闘服に身を包んだ女が飛んでいた。」

ベリーショート黒髪から覗く頬に、傷のある女だった。」

## 三十七話

ああ、ミカサだ。

その姿を視界に入れた途端、彼女の頬の傷に目を奪われ、ジャンは胸を撫でおろした。

なぜそう思ったのか、うまく説明できそうにない。

幻覚に安堵するなんて間抜け話で、それでも、これは確かにあった記憶だと確信めいた郷愁が胸の内に広がっていた。

じわりとインクが滲むように。落ちた水滴が波紋になるように。

出鱈目な順番に、記憶の根幹を揺り動かす。

ああ、懐かしい。

重力なんて存在しないかのように、軽やかに浮かぶミカサ。

その後ろを、充足感に満ちてジャンは飛んでいた。

疑問にすら思わなかった。

こうして彼女の後ろを飛び従うことが当然のように、心身に馴染んだ。

一つ一つの筋肉が震え、熱を帯びるのを感じる。

感覚はますます鋭く、冴えていく。

加速する飛行。

噛み合わせの悪かった歯車が潤滑油を刺され、するすると一斉に回り始めたようだった。

頭の中はからっぽのまま。

一心不乱に、ミカサを追う。

すると、遠くの木を枝を押しつけて、15m級の巨人がデカイ顔のぞかせた。

直後、そいつに向かって、ミカサがガスを噴射する。

彼女はあつという間にそのデカブツに迫ると、雷槍を突き刺した。

閃光が走る。

それでも怯まずに、ジャンは突進した。

雷槍を受けた巨人はかすり傷一つなく、何事もなかったようにギョ

口ついた瞳をこちらへ向ける。

軽やかに身を翻して、ジャンが奴のうなじを削ぐ。

パスンツ！という気の抜けた音と共に、削いだうなじはスポンジに、肉体は木のハリボテに変わっていた。

どこからが幻覚で、どこまでが現実なのか。

曖昧な境界線。

その不思議な空間で、ジャンは覚醒しつつあった。

気付けば、かつての自分の動きを完璧にトレースしていた。

だが、まだ足りないのだ。

ミカサに追いつくためには、それだけじゃ到底足りない。

ずっと変わらなかった絶対的な勝者と敗者の構図を、今ここで覆す。

そのための何かを、ジャンは見つけなければならなかった。

クソツ——速すぎんだろ！

こんなの……どうやって勝つんだよ！

諦念が胸に入り込もうと待ち構えていた。

これ以上、逃げたくない。

だけど、どうやって自分と向き合えばいいかなんて見当もつかない。

巨人がいる世界。

絶望を溜め込んだ世界で、願いを持ち続けることになんの意味があるんだろう。

巨人の全滅を願っても、戦争のない平和な世界を願っても——どう

せ誰の願いも叶いやしないのに。

それでも祈り続ける意味を、ずっと誰かに教えてほしかった。

けど、その誰かなんてどこにもいやしないから、ジャンは自分で答えを決めた。

この世界に、意味なんかないんだと。

この世には、人類という生き物がただ存在するだけだ。

生まれた世界や立場で、置かれた場所や状況で、与えられた才能や能力で、未来は見えている。

マシな方を選んで適当に暮らしても、人類を救うために戦っても、全ては無意味だった。

しかし、その一方で、はつきりとした意味を持つ人間も存在していた。

ミカサだ。彼女は間違いなく特別だった。

何をやっても完璧で、到底不可能だと思える様々な事柄をいとも簡単に可能にしてきた。

そして、意味ある存在は彼女だけではない。

嫌味なことに、ジャンの周りには特別な人間が大勢いた。

エレンやアルミン、クリスタ、リヴアイ、ハンジ、エルヴィン——  
もっと広く言えばライナーやベルトルトやアニだって、世界を動かすほどの重要な鍵だ。

それに比べて、俺は何だ？

無意味な存在なら、なぜここにいる。

俺は数合わせのゴミか。

残酷な世界を引き立てる、不幸役その1か？

……そうだ、それが正解だろ。

俺は特別ななんかじゃなかった。

じゃあ、今までやってきたことも、何も残らないのか。

結局、俺の中には何もなかったのか。

……いや、それはちげーだろ。

自問自答の刹那、強い否定がふと心に浮かんだ。

たしかに俺がやってきたことも、持っているものも価値はねえかもしれないねー。

けどな、何もねえわけじゃねーよ。

誰よりも、その立体機動に憧れた。

ミカサの後ろを誰かに譲ったことなんて、一度たりともねえんだぞ。

俺以外の誰が、お前に追いつけるっつーんだ！

そう強く思ったときだった。

突然、空中に、細やかな光の粒子がちかちかと点滅した。

舞い上がる植物の綿毛が陽に反射しているようにも見え、ジャンは目を細める。

瞬く間に、光の粒子は互いを繋ぎ合い、ミカサの元まで流れていく。ジャンは、その光をなぞるように飛んだ。

不思議な光はジャンの体にぶつかると、吸い込まれて消えていく。重力を感じない。前へ、前へ。体が引つ張られる。

今まで感じたことのないスピードに、ジャンは瞬きを忘れる。

ミカサの背中がぐんぐんと近付いていた。

彼女が通り過ぎた数秒後に、まったく同じ動きでジャンが追いつく。

まるでミカサのように、美しく描かれる飛行軌道。

神業と思えた彼女の動きを、ジャンは完璧にトレースしていた。

頭で考えているわけじゃない。

この最中でも、ミカサがどう動くかなんて理解できない。

それでも、反射的に体が動いた。

これが、ミカサの立体機動——あいつが見ていた世界なのか。

心臓が爆発しそうに狂っている。

関節がバキバキと鳴る。

体が軋んでいるのがわかる。

肉体が限界を越えて、超人的な動きを可能にしていた。

手を伸ばせば、すぐそこにミカサの背中がある。

しかし、どうしても届かない。

見えない壁が、彼女に追いつこうとするジャンを拒絶していた。

鋭く揺れる短い黒髪から、彼女の頬がのぞく。

そこに刻まれた傷が、ジャンの瞳に焼き付いた。

そうか。俺はまだ忘れているのか。

思い出さなきゃならねえ——俺が死んだ時の記憶を。

突然、ずくんと、痛みが走った。

ジャンは咄嗟に目を落とす。

腹部のあたり、灰汁色のシャツがみるみる血で染まっていた。

ジャンは痛みを耐えようと、歯を食いしばる。

落ち着け！これは現実の痛みじゃねえ！

これは幻覚で……いや、そうか。

この傷は、ミカサを庇って死んだときについた銃創だ。

大勢の敵に囲まれたミカサを見たとき、ジャンは躊躇なく飛び出した。

ミカサを背に庇って、体中に銃撃を受けた。

いくつもの小さな鉛玉が、今まさに撃ち込まれたように感じる。

その痛みを薙ぎ払い、ジャンは身を振って飛び続ける。

ラストチャンスだ。

ここで諦めれば、勝ち目はなくなると直感的にわかる。

噛み締めすぎた唇が破れ、口内に血の味が溢れる。

これも幻なのか、それとも現実なのか、判断がつかない。

ぐちゃぐちゃになった頭の中で、「エレン！」とミカサが絶叫した。

ああ、そうだった。

あの時、今にも死にそうな耳に、何度も何度もミカサの絶叫が聞こえたのだ。

自分を守った男が、好きな男だと勘違いした彼女の悲鳴が。

あんだだけ撃たれたのに、何で即死じゃなかったんだよ。

さっさと死んでおけばよかった。

だって、そうだろ。

好きな女を守って、その死に際に他の男の名前を叫ばれてみるよ。

誰だって、後悔するだろ。

………俺は、何を後悔したんだ。

ミカサを助けたことか？

あの時、見捨てりやよかったって、そう思ってたのか？

自らの問いを、ジャンは即座に否定する。

断言できる。

どんな結果だろうと、仲間を救うことを悔やむはずがない。

じゃあ、俺は何を後悔したんだ。

脳内で、繰り返される絶叫。

エレンの名前を叫びながら、鬼のように敵を殲滅したミカサ。

その姿が、ありありと思い出される。  
撃たれたジャンと同じぐらい血塗れになって、戦いを終えたミカサが近づいてくる。

涙を流して、「エレン」と何度も呟きながら。

ミカサはジャンの体を抱えた。

震える手を、彼の頬に添えた。

そして、恐る恐る、彼の顔を覗き込む。

やめろ。思い出したくない。

死んだのがエレンじゃないとわかった時、ミカサはどんな顔をしたんだろう。

これ以上、耐えられなかった。

立体機動中にも関わらず、ジャンは両目を固く閉じた。

遮断される視界。

どこかでプツンと電源が落ちるような音がした。

それと同時に、全ての感覚が停止する。

忌まわしい記憶の再生は止まり、体の痛みも消えた。

深い闇の中で、思考だけが巡る。

……そうだ。

あの時も、俺は同じことを思ったんだ。

怖かった。

だから、聞こえないふりをした。

ミカサは泣きながら、何かを言っていたのに。

ちゃんと俺に向かって、叫んでいたのに。

ミカサは死にゆく青年の顔をしっかりと確認した。

それから、「ジャン」と確かに彼の名を呼んでいた。

その後の出来事を、なかったことにしたのはジャン自身だ。

あの時、ミカサはなんて言ったんだろう。

ここまで来て、また逃げるわけにはいかねえよな。

ジャンはそつと瞳を開いた。

魔法が解けたみたいに、様々な感覚が一気に戻ってくる。  
立体機動の浮遊感。



肌にぶつかってくる空気抵抗。

耳元でビュンビュン鳴る風の音。

そして、少し前方を飛んでいる彼女の背中。

それらは、むしろクリアすぎるぐらいに、脳の中枢を揺さぶる。

高濃度の情報に、頭がくらくらした。

その時、目の前を飛んでいたミカサがぐるりとこちらを向いた。

空中で、二人は正面から向かい合う。

ミカサは、あの時と同じ表情で、泣いていた。

『ジャン——私を好きになっけてくれて、ありがとう』

そう言うと、そのまま透けるように肉体が薄れる。

そして、彼女は光の粒に変わった。

その光は、ジャンを導いた光の粒子と混ざり合い一層強く輝くと、

ジャンの肉体に吸い込まれて消えた。

後に残されたのは、静かな訓練場の森。

そこで、ジャンは一人きりで飛んでいた。

「エレンバカのくせに……お前、気付いてたのかよ」

消えた彼女に向かって、ジャンは呟いた。

眼前に広がる光景は、多くの仲間が死ぬ過去でもなく、腰抜けな自

分が死ぬ未来でもない。

ここは訓練場の森で、ただの現在<sup>いま</sup>だ。

そして、逃げ回ってきた自分自身に勝つための場所だ。

ジャンは前方を見据えた。

遠くの枝葉に隠れた異物を、肉眼が微かに捉える。

それと同時に、飛び出した。

唸りをあげる鉄製のワイヤー。

標的は、三体。

5 m級の二体をすれ違いざまに狩る。

そして空高く、ジャンは体を投げ出した。

真下には、15 m級。

そいつのうなじを、落雷のごとく急降下して一直線に削ぎ落とす。

三体分のうなじ——スポンジの塊が地面に落ちたのは、ほとんど同

時だった。

息ができない。呼吸を忘れる。

でも、苦しくはない。

全身の細胞が、勝手に酸素を取り込んでいるみたいだ。

前へ、前へ。

枝葉の隙間に、身体をねじ込んでいく。

遠く、もっと遠くへ。

速度を上げて、肉体を運ぶ。

瞬く間に過ぎ去る景色。

全てを置き去りに、ジャンは最後の木々を抜け、砂埃をあげて着地した。

「ジャン・キルシュタイン——4分50秒」

キースが記録を告げる。

ミカサは!?!?

ジャンは急いで周囲を見渡した。

遠巻きにこちらを伺っている同期たち。

その中に、ミカサの姿はない。

とつくに着いてるんじゃない。

そう思った時だった。

背後で、地面を削る着地音が聞こえた。

ジャンが振り返る。

「……………俺の勝ちだな」

半ば呆然と、ジャンは言った。

話しかけたというより、独り言に近い。

口に出すことで、勝利を確信したかった。

ミカサは黙っている。

ブレードを収めることも忘れ、立ち尽くしていた。

その顔を見て、勝った!という嬉しさよりも、笑いがこみ上げてくる。

信じられるか?

あのミカサが、俺に負けて悔しがってやがる。

ひくつきそうになる唇を、ジャンはなんとか堪えた。

光のフィルターが貼り付いた、透き通るような空の青み。

爽やかな風が、まだ長い彼女の髪を揺らす。

綺麗な黒髪だ。

初めて出会った時と同じように、そう思った。

変な感じだ。

情けなくて、かつこ悪いのに——そんな自分を悪くないと思える。

やっと空っぽになって、彼女の前に立っている気がした。

「ミカサ、お前は負けた。約束通り、俺の願いを一つ叶えてもらうぜ」

そう言つて、ジャンはニヤリと笑った。

なあ、ミカサ。

もう一度返事をくれよ。

告白もしてねえのに、振られるなんてダサすぎるだろ。

ちゃんと答えをもらわねえと、俺はここから動けねえ。

どうしたって、前に進めねーんだ。

今だけでいい。

俺を見てくれ。

ああ、やつと言える。

ミカサ——死ぬほど、お前に惚れてたつて。

## 三十八話

「これより、成績上位者10名を発表する！」

キースの大声が、響く。

いつもより数段迫力がある声に、訓練兵たちは身を引き締めた。

訓練兵と一括りにされるのも、今日で最後だ。

兵士たちは、大人びた表情で唇を引き結ぶ。

彼らの背中には、訓練兵を象徴する、剣を交えた絵が描かれている。

4年間背負ってきたその絵も、もうすぐ変わる。

不老不死の一角獣、守護の薔薇、自由の翼——いずれの兵団を選んでも、人類に心臓を捧げることに変わらない。

そして、この日。

人類の行く末を背負うことになる成績上位10名が、発表された。

首席 ミカサ・アツカーマン

次席 ライナー・ブラウン

三番 ベルトルト・フーバー

四番 アニ・レオンハート

五番 エレン・イエーガー

六番 マルコ・ボット

七番 クリスタ・レンズ

八番 サシャ・ブラウス

九番 コニー・スプリンガー

十番 ジャン・キルシュタイン

\*\*\*

卒団式の夜。

「訓練兵の卒業は祝い事ではない。決して慢心することのないよう、兵士としての自覚をうんぬん——」などと教官方は言っていたが、食卓には卒業を祝う豪華な食事が並んだ。

といっても、普段の食事と比べれば、だ。

いつも薄いスープはほんの少し濃く、大きな芋がごろごろ入っている。

パンは水分を含んでふっくらと焼き上がり、それに加えて、めったにお目にかかれない鹿の干し肉がメインに置かれていた。

ご馳走を前に、兵士たちは瞳を輝かせた。

どこぞの芋女に奪われないようにと、せつせとパンを口に運ぶ者もいれば、酒でもないのに盃をぶつけ合い、競うように飲み比べる者もいる。

成績をめぐつてギスギスしていた人間関係は、ようやく打ち解けたように見えた。

「よかったじゃねーか。ギリギリ十番で、首の皮一枚繋がったなあ」

ニヤつきながら、コニーが言った。

ジャンは「まーな」とクールに返しつつ、内心では「まったく」と大いに同意する。

「ま、天才の俺は当然お前より上の順位だけだなー」

「なんれふか、ほれ。じゅうばんと、きゅーばんなんて、たいして変わらないれふよ」

口いっぱいに食べ物を詰め込んで、サシヤがふがふが喋る。

血走った目を獲物から離さず、食べカスが口から飛び出るのもおかまいなしだ。

ジャンは眉を顰めたが、コニーは気にならないらしい。

「ちっちちち……わかってねーなあ。その一番の差が、とんでもなくデカいんじゃないか。なんつーの？ 越えられない壁ってやつ？」

「それなら、八番の私がさらに上つてことですよね。あなたたちの肉は、さらに天才の私がもらってあげましょう」

そう言っただけで伸ばしかけたサシヤの手を、マルコがピシヤリと叩く。

「その理論で言うとな、ここの卓では六番の僕が一番偉いことになるね」「じ、冗談ですよ」

と誤魔化すように笑って、サシヤはしぶしぶ手を引つ込めたものの、その目はすでに別の獲物を探してギラついていた。

その様子を横目で眺めながら、ジャンは盃を傾ける。

二回目の卒団式だ。

既視感を覚えつつも、少しずつ違う現実を見るのは、間違い探しをするようで結構楽しい。

未来は変わってきているという手ごたえを、感じさせてくれる。

「巨人に勝てるわけないだろ！」

唐突に、トーマスの大声が食堂中に響いた。

楽しげに話し込んでいた同期たちは、談笑を中断して、何事かと彼に注目する。

その一方で、ジャンは盃の中身をぼんやりとのぞいていた。

まだ半分ほど残っている液体が、ジャンの顔を部分的に映し出す。

何が起ころうかは知っているの、わざわざ目を向ける必要はない。

耳だけで拾う情報によると、「巨人には勝てない」とトーマスが主張するのに対して、エレンは「人類は戦うべきだ」と調査兵団の必要性を語っている。

最初はトーマスの意見に納得せざるを得なかった同期たち。

それがエレンの熱量に浮かされて、僅かながらに空気が変わっていた。

食堂中を巻き込んだ演説を終えると、エレンは悔しさに涙を滲ませ、食堂を出て行く。

その後続く、ミカサとアルミン。

以前と同じようなやりとり、ジャンが興味を失おうとした時、視界の端でアニが立ち上がるのが見えた。

トレードマークのパーカー姿に、ストレートにおろされた金髪。

エレンたちが出て行った方とは反対方面の扉に向かって、彼女は歩いていく。

扉に指をつけて押し、少し開いたところからそのまま出て行くのかと思えば、彼女はふいに周囲を見回した。

誰か探してるのか？

目立たないように、ジャンはアニを眺めていた。

すると、動いていた彼女の視線と目が合っ、アニはそのまま食堂を出て行ってしまふ。

ジャンは盃を持って立ち上がった。

立ち話に興じる同期たちを避けながら、アニが消えた扉に向かって歩き、立て付けの悪い扉をギイイと軋ませて開く。

扉を後ろ手に閉めると、食堂の喧騒を閉じ込めてくれた。

アニは、すぐに見つかった。

地面に降りる木の階段、五段ほどの短いそこに、彼女は座っていた。

月明かりに照らされる背中が、いつもより小さく見える。

ジャンは一人分の空席を開けて、アニの隣に座った。

なんとなく持ってきた盃を、自分とアニの間に置く。

冷たい夜の空気は、特別に澄んでいる気がする。

ジャンは首をそらし、夜空を仰いだ。

どこまでも奥行きのある黒の中で星の輝きが明るく、空気が澄んでいるぶん、光の粒子は直接ここまで届いているんじゃないかと思える。

「隣」

「あー？」

「勝手に座らないでよ」

「勝手にじゃねーよ、お前が呼んだんだろ」

「別に、呼んでないから。勘違いしないで。たまたま目が合っただけ」  
突き放すような台詞のわりに、彼女の声は本気で嫌がっているようには聞こえない。

「エレンにベツタリなミカサを、見てられなかったんでしょ。アンタ、盛大にフラれてたもんね」

「うるせえよ。もう忘れてくれ」

「あんな衝撃的なこと、忘れられないよ。長い訓練兵団の歴史でも、試験中に告白したバカはアンタ一人だろうね。同期どころか教官にまで見守られて……フラれて……し、しかも、その後は容赦なく懲罰房行き——」

「あああああ！ 笑いたきや堂々と笑えよクソ！」

「それで、あの後仲直りはできたの？ ミカサとはだいぶ拗れてたようだけど」

「ああ……たぶんな」

その問いに、ジャンは答えを濁す。仲直りというか、一方的に謝り倒したと言った方が正しいからだ。エレンとの仲を取り持ってほしいと頼ってきたミカサを騙したのは、確かに悪かったと思う。

許してもらえるかどうかはともかく、筋は通すべきだと思った。なぜミカサを騙したのか。

「君のことが好きだから」という小つ恥ずかしい理由を説明して、謝って——最後には、見るに見かねたアルミンがフォローに入ってくれた。

それでも、「わだかまりが残っていないか」と聞かれると首を傾げざるを得ないけれど、少なくともジャンの胸中は穏やかだ。

「苦い初恋になったね」

そう言って、アニはふっと息だけで笑った。

不名誉な形容詞が付こうが、今までのへタレっぷりを思えば、「初恋だった」と過去形にできただけ上出来だ。

「俺からも聞いていいか」

ジャンは言葉を探しかけたけれど、すぐにその必要はないと思い直した。

そして、天気の話でもするように口を開く。

「ライナーとベルトルトに、何で言わなかった」

それは、ジャンが長らく抱いていた疑問だった。

アニとの間にあった一部始終は、決して言い逃れできるものではない。

殺し合いの末の、衝撃的な結末。

未来で起こる地ならしの映像を、アニは見た。

加えて言えば、そのごたごたに乗じて、ジャンは彼らの計画を知っているような口ぶりで語ってしまった。

いくら殺される寸前だったからって、今思い返せば迂闊な発言だ。

こちらの真意がバレることは、すなわち死を意味する。

当然、計画を知った異分子は排除されるはずだった。



なのに、なんの冗談か、まだジャンは生きている。

「アンタこそ。知ってたのに、何で私たちを殺そうとしなかったの。いくらでもチャンスはあったはずだよ」

質問には答えず、アニは問い返した。

「たぶん、お前と同じ理由だ」

ジャンがそう言うのと、アニは「あつそ」と呟いてから「アンタって本当に甘いね」とため息を吐いた。

「お互い様だろ。俺らはこれでいいんだよ。この世界には、血の氣の多いやつらばかりいやがるからな。俺らみたいな半端者がいてもいいだろ」

「バカだね。いいわけないでしょ」

ただでさえ冷たく見える白肌は月明かりの下でさらに青白く、彼女の動きに合わせて金糸の髪が緩やかに揺れた。

「全部、私たちのせいなんだね。地ならし——あんなに恐ろしいことが起こるなんて」

「まだそうと決まったわけじゃねえ」

ジャンは彼女の言葉を遮った。

「運命なんてクソ喰らえだ。だから俺が変えてやる。そのためには、お前の協力が必要だ」

アニはゆつくりと夜空から視線を落とすと、ジャンの顔をまじまじと見つめた。

「アニ、頼む。手を貸してくれ」

「本当に勝手な男だね。アンタのせいで、私はもう戦えない——アンタを殺せない時点で、仲間を裏切ったも同然なんだよ。私にはもう帰る場所がない。……やるべき使命もない」

「じゃあ、地ならしで世界が滅びるのを待つか？」

そう鋭く問うと、アニは微かに肩を震わせた。

瞬きを忘れた瞳。

灰色がかった薄い水色のそれは夜の中で不思議な深みを帯び、細やかな星影を抱いて、まるで小さな夜空が彼女の両目に宿ったようだった。

あまりにも酷な決断を迫っている自覚はある。

しかし、引き下がることはできない。

残酷な世界に打ち勝つためには、誰かが——いや、誰もが辛い決断を下さなければならぬ。

その順番が、今はア二の手の中にある。

誰のせいでもなく、何の因果もなく、ある日突然その順番は巡ってくるのだ。

その時、「もしも」という言葉が、ジャンの口をふいについて出た。明確な意図があつたわけじゃない。

何か言わなければ、と一種の強迫観念めいたものに突き動かされたのだ。

辛い決断を迫られる彼女に、少しでも誠実でありたい。

何かに縋るように揺れるア二の視線。

ノープランで開いた喉がぐつと詰まって、それでもジャンは無理やり言葉を絞り出した。

「もしもお前が死んだら、俺も一緒に死んでやるよ」

「はっ」

一瞬ぼかんと口を開けてから、ア二は一文字で返した。

さつきまでの不安げな顔が嘘みたいに、不機嫌そうに眉根を寄せらる。

「意味わかんないんだけど」

「はあ!? お、お前がなんか不安そうにしてっから俺は——」

「何でアンタなんかと一緒に死ななきゃいけないの。私が喜ぶと思っただ？」

ぼそりと言い捨てるア二に、顔が熱くなる。

「俺だつて願ひ下げだ！ けど、なんつーか……お前のためにできることなんて、一緒に死んでやることぐらいしかできねーって、そう思つて——だいたいわかんたろ!? 言葉の綾だろ察しろよ！ それぐらいの覚悟で、俺はお前を——」

「口説いてんの？」

「口説いてねえよ!!!」

一気に血圧が上がリ、ついつい声色にも熱が入って、ポリウムがでかくなる。

反対に、アニの方はどんどん冷めている様子だ。

ついさつきまで柔らかく見えた眼には、パキパキと薄い氷がはつて  
いる。

ため息を吐きながら、アニが立ち上がる。

「おい、待てよ。まだ話は終わっちゃいなーぞ」

ジャンが噛み付くように言うと、アニは肩越しに振り返った。

「場所を変えるよ。ここじゃ人目につきすぎる」

食堂の方にちらりと目を向けて、それからジャンに視線を移した。

「一応、礼を言っとくよ。自分のバカさ加減に嫌気がさしてたけど、ア  
ンタと比べたら私なんてまだマシな方だね」

小馬鹿にするように顎をあげて、アニは唇の端をつりあげた。

「……そりゃどーも」

調子が戻ったようになによりだ。

アニに気付かれないようにニヤリと笑って、ジャンはため息まじり  
に腰を上げた。

\*\*\*

ここから新しい未来がはじまる。

世界の中枢から遠く外れた、隅っこで燻るここからはじめよう。

些末なゴミの中で、たった一つの火種から燃え広がることを教えて  
やるよ。

さあ、物語を進めるといい。

せいぜい絶望してろ。

救われねえと孤立してろ。

いつでも物語をひっくり返すのは、些末な伏線だって思い出させて  
やるよ。

これは、俺がはじめた物語だ――